

K-520

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第23集

# 遺跡詳細分布調査報告書 第1集

昭和63年3月

米沢市教育委員会

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第23集

遺跡詳細分布調査報告書  
第1集

昭和63年3月

米沢市教育委員会

# 序 文

この報告書は、昭和62年度に文化庁の補助を受け、住宅開発に伴う遺跡の詳細分布調査を実施した報告書です。

米沢市は、昭和60年度に市内にある383ヶ所の遺跡について遺跡地図及び遺跡地名表を作成し、開発関係各位に配布し、埋蔵文化財の周知及び保護保存に努めてまいりました。のことにより、個人の住宅開発に関しても毎年事前調査を実施し対処してまいりました。本年度から順次住宅開発に係わる遺跡について詳細な分布調査を実施して、その遺跡の性格や時期等について解明していく所存です。

御承知の様に、遺跡地図については表面採集や地形並びに地元の方々の情報による点が多く、地層の確認や遺跡の範囲については一部不明な点があります。埋蔵文化財については現状のままで保護保存していくのが最良の方法であることは言うまでもありませんが、どうしても開発しなければならない箇所については、学術的な調査を実施し、記録による保存を図ることとしております。

今回の分布調査では、数ヶ所試掘調査を実施したところ、3ヶ所について住居跡の中心部に当り、それぞれ掘り下げ確認した結果、全て同時期の遺跡であります。このことにより当時の居住分布が手にとるように判明し、大きな成果となりました。

これからも、住宅開発と埋蔵文化財の保護保存については開発関係者と連携を図りながら調査活動を積極的に進め、先人の所産である文化財の愛護思想啓発に努めてまいります。

本調査にあたり、格別の御指導、御協力を賜わりました文化庁、山形県教育庁文化課、地権者の町田忠、高山礼子、大沼孝穎、遠藤庄四郎、佐藤俊一各位、地元の皆様に対し、心から御礼申し上げます。

昭和63年3月31日

米沢市教育委員会

教育長 小口亘

## 例　　言

1. 本報告書は、文化庁の国庫補助を受けて実施した昭和62年度の埋蔵文化財分布調査事業の報告書（第Ⅰ集）である。

2. 調査は米沢市教育委員会が主体となって実施したものである。

3. 調査体制は下記の通りである。

調査主体	米沢市教育委員会
調査総括	安部敏夫（米沢市教育委員会社会教育課長）
調査担当	手塚 孝
調査主任	菊地政信　　調査副主任　金子正廣
調査補助員	原 三郎, 宍戸則昭, 鳴貫六助
作業員	佐藤峰雄, 蔡田清二, 会田仁一郎, 高橋光男, 我妻徳枝, 諸橋正一, 今野勘助 佐藤太郎, 大沼孝穎, 町田 忠, 高山礼子, 橋爪 健, 手塚武雄
事務局長	平間重光
事務局員	梅津幸保, 山田 隆, 我妻重義, 角屋由美子

4. 本調査にあたっては、文化庁、山形県教育庁文化課、大沼孝穎、町田 忠、高橋礼子、佐藤俊一、遠藤庄四郎、橋爪 健の各氏より多大なるご協力を賜わりました。ここに心より厚くお礼申し上げます。

5. 掛図の縮尺は拓影図3分の1、遺構、土器実測図についてはスケールを呈示しているので不同とした。写真図版は完形土器については縮尺不同、土器片、石器についてはスケールで呈示した。掛図に用いた北の方向は真北に統一した。拓影図、実測図、写真図版の遺物番号はすべて統一した。

6. 本報告書の作成は全体的に手塚 孝が総括し、菊地政信、金子正廣が補佐した。編集は手塚 孝、責任校正是梅津幸保、山田 隆、我妻重義が担当した。遺物整理、図版作成に関しては我妻徳枝、原 三郎、宍戸則昭、木村京子、小林理香、各氏の協力を得た。

## 本 文 目 次

序 文  
例 言  
目 次

第1節	昭和62年度宅地開発に伴なう埋蔵文化財調査経過.....	1
I	住宅開発等に係わる遺跡確認について.....	1
II	宅地開発による遺跡確認の概要.....	2
第2節	大浦遺跡群周辺の埋蔵文化財分布調査.....	6
第3節	外ノ内遺跡周辺の埋蔵文化財分布調査.....	7
第4節	花沢A遺跡.....	8
I	遺跡の概要.....	8
II	試掘調査の経過.....	8
III	調査の経過.....	8
IV	検出された遺構.....	10
	(1) 竪穴住居跡.....	10
	(2) 土壙.....	15
	(3) 土器埋設遺構.....	15
V	検出された遺物.....	15
	(1) 出土土器.....	16
	(2) 出土石器.....	19
	(3) その他の遺物.....	20
第5節	大塙A・大塙山遺跡.....	46
I	遺跡の概要.....	46
II	試掘調査の経過.....	46
III	調査の経過.....	46
IV	検出された遺構.....	48
	(1) 大塙山遺跡.....	48
	(2) 大塙A遺跡.....	48
V	検出された遺物.....	49
	(1) 出土土器.....	49
	(2) 出土石器.....	60
第6節	総括.....	75
I	花沢A遺跡.....	75
II	大塙A・大塙山遺跡.....	75

## 挿 図 目 次

第1図	米沢城跡周辺の地形図.....	2
第2図	米沢城跡周辺の地形図.....	2
第3図	米沢城跡周辺の地形図.....	3

第4図	台ノ上遺跡周辺の地形図	3
第5図	東屋敷遺跡周辺の地形図	4
第6図	米沢城跡周辺の地形図	4
第7図	大浦遺跡群の分布範囲図	6
第8図	外の内遺跡の分布範囲図	7
第9図	花沢A遺跡グリット配図	9
第10図	花沢A遺跡遺構全体図	11
第11図	花沢A遺跡H Y 27平面図	13
第12図	花沢A遺跡H Y 28平面図	20
第13図	花沢A遺跡出土土器拓影図(1)	21
第14図	花沢A遺跡出土土器拓影図(2)	22
第15図	花沢A遺跡出土土器拓影図(3)	23
第16図	花沢A遺跡出土土器拓影図(4)	24
第17図	花沢A遺跡出土土器拓影図(5)	25
第18図	花沢A遺跡出土土器拓影図(6)	26
第19図	花沢A遺跡出土土器拓影図(7)	27
第20図	花沢A遺跡出土土器拓影図(8)	28
第21図	花沢A遺跡出土土器拓影図(9)	29
第22図	花沢A遺跡出土土器拓影図(10)	30
第23図	花沢A遺跡出土土器拓影図(11)	31
第24図	花沢A遺跡出土土器拓影図(12)	32
第25図	花沢A遺跡出土土器拓影図(13)	33
第26図	花沢A遺跡出土土器拓影図(14)	34
第27図	花沢A遺跡出土土器拓影図(15)	35
第28図	花沢A遺跡出土土器展開図、実測図(1)	36
第29図	花沢A遺跡出土土器実測図(2)	37
第30図	花沢A遺跡出土土器展開図(1)	38
第31図	花沢A遺跡出土土器展開図(2)	39
第32図	花沢A遺跡出土土器展開図(3)	40
第33図	花沢A遺跡出土土器展開図(4)	41
第34図	花沢A遺跡出土土器展開図(5)	42
第35図	大檀A・大塚山遺跡グリット配図	47
第36図	大塚山遺跡遺構全体図	51
第37図	大塚山遺跡H Y 1平面図	52
第38図	大塚山遺跡土壤セクション平面図(1)	53
第39図	大塚山遺跡土壤セクション平面図(2)	54
第40図	大塚山遺跡土壤セクション平面図(3)	55
第41図	大檀A遺跡H Y 2・3平面図	56
第42図	大檀A遺跡G 137~140-207~210調査区遺物出土状況実測図	57
第43図	大檀A遺跡出土土器拓影図(1)	61

第44図	大槻A遺跡出土土器拓影図(2) .....	62
第45図	大槻A遺跡出土土器拓影図(3) .....	63
第46図	大槻A遺跡出土土器拓影図(4) .....	64
第47図	大槻A遺跡出土土器拓影図(5) .....	65
第48図	大槻A遺跡出土土器拓影図(6) .....	66
第49図	大塚山遺跡出土土器拓影図(7) .....	67
第50図	大塚山遺跡出土土器拓影図(8) .....	68
第51図	大塚山・大槻A遺跡出土土器拓影図(9) .....	69
第52図	大槻A・大塚山遺跡出土土器拓影図・実測図(10) .....	70
第53図	大槻A遺跡出土土器実測図(11) .....	71
第54図	大槻A・大塚山遺跡出土土器実測図(12) .....	72

## 付 表 目 次

第1表	昭和62年度遺跡確認状況一覧表 .....	5
第2表	花沢A遺跡出土土器観察表 .....	43
第3表	大塚山遺跡遺構計測表 .....	50
第4表	大槻A・大塚山遺跡出土土器観察表 .....	73

## 図 版 目 次

第一図版	花沢A遺跡の発掘(1)
第二図版	花沢A遺跡の発掘(2)
第三図版	花沢A遺跡出土の土器(1)
第四図版	花沢A遺跡出土の土器(2)
第五図版	花沢A遺跡出土の土器(3)
第六図版	花沢A遺跡出土の土器(4)
第七図版	花沢A遺跡出土の土器(5)
第八図版	花沢A遺跡出土の土器(6)
第九図版	花沢A遺跡出土の土器(7)
第十図版	花沢A遺跡出土の土器(8)
第十一図版	花沢A遺跡出土の土器(9)
第十二図版	花沢A遺跡出土の土器(10)
第十三図版	花沢A遺跡出土の土器(11)
第十四図版	花沢A遺跡出土の土器(12)
第十五図版	花沢A遺跡出土の土器(13)
第十六図版	花沢A遺跡出土の土器(14)
第十七図版	花沢A遺跡出土の土器(15)
第十八図版	花沢A遺跡出土の土器(16)
第十九図版	花沢A遺跡出土の土器(17)
第二十図版	花沢A遺跡出土の完形一括土器(1)
第二十一図版	花沢A遺跡出土の完形一括土器(2)

- 第二十二図版 花沢A遺跡出土の完形一括土器（3）  
第二十三図版 花沢A遺跡出土の完形一括土器（4）  
第二十四図版 花沢A遺跡出土の完形一括土器（5）  
第二十五図版 花沢A遺跡出土の完形一括土器（6）  
第二十六図版 花沢A遺跡出土の完形一括土器（7）  
第二十七図版 花沢A遺跡出土の完形一括土器（8）  
第二十八図版 花沢A遺跡出土の完形一括土器（9）  
第二十九図版 花沢A遺跡出土の完形一括土器（10）  
第三十図版 花沢A遺跡出土の完形一括土器（11）  
第三十一図版 花沢A遺跡出土の完形一括土器（12）  
第三十二図版 花沢A遺跡出土の完形一括土器（13）  
第三十三図版 花沢A遺跡出土の完形一括土器（14）  
第三十四図版 花沢A遺跡出土の完形一括土器（15）  
第三十五図版 花沢A遺跡出土の石器  
第三十六図版 大檀A遺跡の発掘  
第三十七図版 大塚山遺跡の発掘  
第三十八図版 大檀A遺跡出土の土器（1）  
第三十九図版 大檀A遺跡出土の土器（2）  
第四十図版 大檀A遺跡出土の土器（3）  
第四十一図版 大檀A遺跡出土の土器（4）  
第四十二図版 大檀A遺跡出土の土器（5）  
第四十三図版 大檀A遺跡出土の土器（6）  
第四十四図版 大檀A遺跡出土の土器（7）  
第四十五図版 大塚山遺跡出土の土器（8）  
第四十六図版 大塚山遺跡出土の土器（9）  
第四十七図版 大塚山遺跡出土の土器（10）  
第四十八図版 大檀A・大塚山遺跡出土の土器（11）  
第四十九図版 大檀A遺跡出土の土器（12）  
第五十図版 大檀A・大塚山遺跡出土の完形一括土器  
第五十一図版 大檀A・大塚山遺跡出土の石器

## 第1節 昭和62年度宅地開発に伴う埋蔵文化財調査経過

### I 住宅開発等に係わる遺跡確認について

米沢市教育委員会は、これまで文化財保護法の趣旨にもとづき、文化財保護の啓蒙に努め、その意義、法律内容、事務手続等についてレクチュアを実施し、指導にあたってきたが、特に開発等により遺跡が不条理に破壊されることを危惧し、本市の埋蔵文化財の包蔵地を示す『米沢遺跡地名表』及び『米沢市遺跡地図』を昭和61年3月に作成し、関係業者等に配付、広く周知を計った。これにより、文化財保護法で言う「周知の遺跡」を確立した。

配布当時に本市で確認されていた遺跡数は383ヶ所であったが、その後分布調査等で新たに26ヶ所の確認を得たため、周知の徹底を計る意味も含め、昭和62年10月に新たに確認された遺跡を加筆修正した409遺跡による第2版を配布している。

遺跡は繩文時代を中心に中世まで連続した各時代の遺跡が多数存在し、県内でも有数の遺跡数といえよう。本市では今後も分布調査を継続して実施していく方針であり、遺跡数はさらに増える可能性が大である。

以上述べたとおり、本市は市内全域に多数点在する遺跡の存在を広く関係各位に周知したことにより、これらに対する開発計画、開発行為があった場合は、遅滞なく教育委員会と協議を行うよう要請した。

昭和62年度の本市に係わる建築確認申請及び土木工事、砂利採取などの開発行為の総数は1月末現在で964件であり、うち教育委員会に協議を求められた遺跡に係わると予想される確認依頼件数は別表のとおり33件であった。

その内訳は次のようである。

建築確認申請にかかるもの	10件
砂利・鉱石採取にかかるもの	17件
道路・下水道工事にかかるもの	4件
グランド等の土地造成にかかるもの	2件

このうち発掘調査を実施したのは、グランド造成工事の伴う1件であった。

今年度の特徴としては、建築確認申請にかかるものの中では米沢城跡に関するものが多いことである。これは現在米沢城の本丸を残しどとの遺構上が住宅地となっているためである。

また前年度3件のみであった砂利・鉱石採取にかかるものが大幅に増加し、確認件数の半数を占めたことが挙げられる。

なお、昨今市外の業者による申請等が増加しており、周知の範囲を近隣の市町村にも広げていくことが必要ではないかと思われ、今後の課題である。

## II 宅地開発による遺跡確認の概要

### (1) 米沢城跡

- ・確認場所 丸の内一丁目 7-10
- ・確認期日 昭和62年 8月10日
- ・開発内容 住宅増改築
- ・遺跡の概要 本遺跡は米沢城としての範囲、本丸・二の丸・三の丸の一部を含めた南北560m、東西600mの336,000m<sup>2</sup>あり、市街地における唯一の埋蔵文化財包蔵地となっている。

#### ・遺跡確認の概要

昭和62年7月10日に開発者（栗野秀一氏）が来庁、開発計画について聴取した。現在の建物を取り壊しその跡に新築するとのことで、その時期を待って包蔵内容を確認することとした。

8月10日連絡あり、現地確認をした。その結果、本丸の堀跡を埋め立てた地点であった。重機により2m50cm程度試掘したところ、遺物(陶器類)が数点出土したが、遺構の確認はできなかった。地盤が軟弱で拡張できなかつたが、工事に当つては慎重に施行されるよう指示した。

### (2) 米沢城跡

- ・確認場所 丸の内一丁目
- ・確認期日 昭和62年 9月7日
- ・開発内容 車庫建設
- ・遺跡の概要 本遺跡は米沢城としての範囲、本丸・二の丸・三の丸の一部を含めた南北560m、東西600mの336,000m<sup>2</sup>あり、市街地における唯一の埋蔵文化財包蔵地となっている。

#### ・遺跡確認の概要

昭和62年9月3日開発者（渡部正志氏）から建築計画概要書が提出され、市建築課から回送されたので、連絡をとり9月7日に現地確認をした。

現地は100m<sup>2</sup>ほどの空地で、数ヶ月前まで一部車庫として利用したものが解体され新たに車庫を建設するもの。ボーリングによる探査と試掘を実施したところ堀跡らしく、地盤が軟弱で埋め立てを施したことを見認めた。遺構、遺物は確認できなかつたが、工事は慎重に進めるよう指示した。



第1図 米沢城跡周辺の地形図



第2図 米沢城跡周辺の地形図

### (3) 米沢城跡

- ・確認場所 丸の内一丁目6-24
- ・確認期日 昭和62年9月12日
- ・開発内容 宅地造成
- ・遺跡の概要 本遺跡は米沢城としての範囲  
本丸・二の丸・三の丸の一部を含めた南北560m、東西600mの336,000m<sup>2</sup>あり、市街地における唯一の埋蔵文化財包蔵となっている。

#### ・遺跡確認の概要

昭和62年9月9日開発者（磯貝利男氏）から

建築計画概要書が提出され、市建築課から回送されたので、連絡をとり、9月12日現地確認をした。394m<sup>2</sup>の宅地は一部畑となっており、畑を中心に試掘調査を実施した。耕作土30cm～40cmを剥いで見るとその下に礎が約10cmあり、堀を埋め立ててその上に耕作土を覆土したことが判った。この辺一帯は米沢城二の丸付近で寺院跡の一角と考えられるが、この地点も堀跡と確認した。

遺構や遺物の確認が出来なかったが、工事に際しては慎重に施行されるよう指示した。



第3図 米沢城跡周辺の地形図

### (4) 台ノ上遺跡

- ・確認場所 吾妻町6-19
- ・確認期日 昭和62年9月24日
- ・開発内容 住宅増改築
- ・遺跡の概要 本遺跡は松川流域の左岸に位置する河岸段丘で、縄文前期及び中期の集落跡で、土器はもちろん打製石斧、磨製石斧、三脚石器、石棒、土偶などが多出する本市でも重要な遺跡の一つである。

#### ・遺跡確認の概要

昭和62年9月22日開発者（中神宇市氏）から建築計画概要書が提出され、市建築課から回送されたので、連絡をとり、9月24日現地確認をした。

敷地189m<sup>2</sup>に33m<sup>2</sup>の既存の住宅があり、東側に増築48m<sup>2</sup>の計画である。この地点は昭和40年前後に市営住宅として建設された経緯がある。この開発地は住宅街のほぼ中心にあり、遺跡の中心から離れている散布となっているため、遺構の確認はできなかった。なお工事に当っては慎重に施行されるよう指示した。



第4図 台ノ上遺跡周辺の地形図

## (5) 東屋敷遺跡

・確認場所 大字竹井野際883-3

・確認期日 昭和62年10月1日

・開発内容 車庫新築

### ・遺跡の概要

本遺跡は梓川流域の遺跡群に属し、戸塚山古墳群と相俟って奈良、平安から中世にかけての集落跡で土師器、須恵器、陶磁器片などが出土している。

### ・遺跡確認の概要

昭和62年7月17日開発者（平間重光氏）が来庁相談あり、建設概要について聴取した。秋に建設との事で計画書の提出を待つて確認することとした。10月1日建築計画概要書に基づいて現地調査を実施した。現況は畠で作物があるので、ボーリング探査による地層の確認を行った。畠の追には地山が出ており、耕作による土壤の擾乱が見られ、遺構の確認はできなかった。

以上のことから、工事を着工するには十分留意の上、慎重に施工されるよう、又遺物等が出土した場合は教育委員会に連絡するよう指示した。

## (6) 米沢城跡

・確認場所 松ヶ岬二丁目2-73

・確認期日 昭和62年10月29日、12月8日

・開発内容 宅地造成

・遺跡の概要 本遺跡は米沢城としての範囲本丸・二の丸・三の丸の一部を含めた南北560m、東西600mの336,000m<sup>2</sup>あり、市街地における唯一の埋蔵文化財包蔵地となっている。

### ・遺跡確認の概要

昭和62年10月21日開発者（大比良申三氏）か

ら建築計画概要書が提出され、市建築課から回送されたので、連絡をとり、10月29日現地確認をした。現況は既存建物があり地層等確認出来ず、開発者から「御馬洗場」と聞く。12月8日建物解体したので包蔵内容調査したが、地盤が軟弱なためボーリング探査に頼らざるを得なかった。内部は池か堀跡と見られ、遺構の確認は出来なかった。

以上のことにより、工事を着工するには十分留意の上、慎重に施工されるよう指示した。



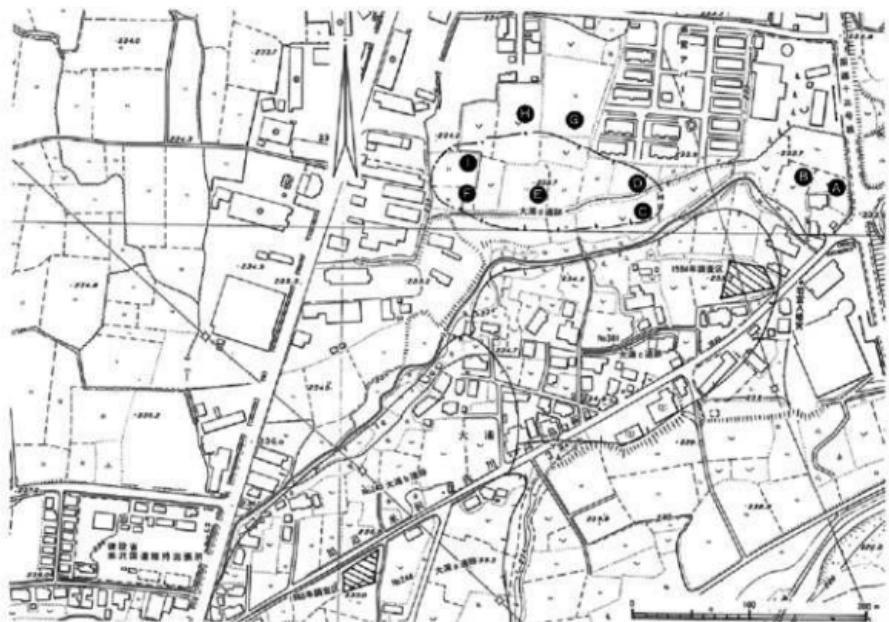
第5図 東屋敷遺跡周辺の地形図



第6図 米沢城跡周辺の地形図

第1表 昭和62年度遺跡確認状況一覧表

No.	遺跡名・地区名	時代	開発内容	確認年月日	確認・結果
1	(赤崩地区)		砂利採取	62.5.6	遺跡範囲外
2	米沢城跡遺跡	中世～近世	社務所増築工事	62.5.29	過去の開発で遺構破壊
3	(三沢地区)		砂利採取	62.5.29	遺跡範囲外
4	桜山d遺跡	縄文前期	砂利採取	62.6.10	工事立会い
5	米沢城遺跡	中世～近世	家屋増改築工事	62.7.16	慎重工事
6	米沢城遺跡	中世～近世	家屋新築工事	62.8.10	慎重工事
7	笊籠C遺跡	縄文前期	グランド造成工事	62.8.11	発掘調査実施
8	(源八前C遺跡)	縄文前期	砂利採取	62.8.18	遺跡範囲外
9	(関地区)		砂利採取	62.8.18	遺跡範囲外
10	(関地区)		砂利採取	62.9.2	遺跡範囲外
11	米沢城跡遺跡	中世～近世	車庫新築工事	62.9.7	慎重工事
12	米沢城跡遺跡	中世～近世	下水道本管工事	62.9.9	慎重工事
13	米沢城跡遺跡	中世～近世	宅地造成工事	62.9.12	慎重工事
14	台ノ上遺跡	縄文前中期	家屋増改築工事	62.9.24	慎重工事
15	(六郷地区)		砂利採取	62.9.28	遺跡範囲外
16	(成島地区)		砂利採取	62.9.28	遺跡範囲外
17	縦返館跡遺跡	中世	砂利採取	62.9.28	慎重工事
18	米沢城跡遺跡	中世～近世	下水道本管工事	62.9.29	慎重工事
19	東屋敷遺跡	允平宏中世	車庫新築工事	62.10.1	慎重工事
20	(万世地区)		砂利採取	62.10.17	遺跡範囲外
21	桜山a遺跡	縄文	道路建設工事	62.10.29	慎重工事
22	米沢城跡遺跡	中世～近世	宅地造成工事	62.10.29	慎重工事
23	米沢城跡遺跡	中世～近世	宅地造成工事	62.10.29	慎重工事
24	(笠野地区)		道路建設工事	62.10.29	遺跡範囲外
25	成島遺跡	縄文前中期	広場造成工事	62.10.29	慎重工事
26	高野原	縄文前中期	廐棄物処理施設建設	62.11.20	慎重工事
27	(赤崩地区)		砂利採取	62.11.25	遺跡範囲外
28	(南原地区)		砂利採取	62.11.25	遺跡範囲外
29	(関地区)	縄文	砂利採取	62.12.7	遺跡範囲外
30	(李山地区)		砂利採取	62.12.7	遺跡範囲外
31	(李山地区)		砂利採取	62.12.7	遺跡範囲外
32	(大沢地区)		鉱物採取	62.1.13	遺跡範囲外
33	(笠野地区)		宅地造成工事	62.1.20	遺跡範囲外

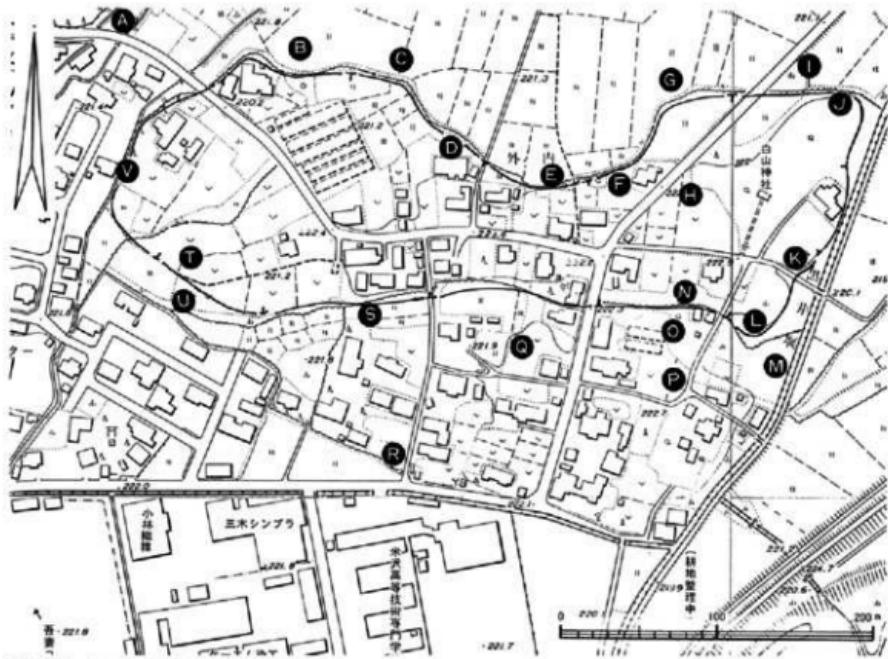


第7図 大浦遺跡群の分布範囲図

## 第2節 大浦遺跡群周辺の埋蔵文化財分布調査

米沢バイパス完成以後、本遺跡周辺は急速に宅地化が進行し県営アパートや結婚式場などの大規模な建物も建設されている。その様な状況の中で1984年に大浦a, b, cの遺跡が確認され、上図で示す箇所を米沢市教育委員会が発掘調査を実施している。米沢市埋蔵文化財報告書第18集に詳しい。今回の調査は1987年（昭和62年）10月27日に実施した。調査はA～Iの試掘地点に1m×1mの範囲で遺構確認面まで掘り下げ、遺構を確認した場合はボーリング棒で性格を把握することに努めた。その結果A, B, G, H地点からは遺物、遺構は検出されなかった。C地点では溝状遺構が認められ、深さは1m以上を有す。なおこの地域は従来の地形を比較的よく保っている。

I, F地点からE, D地点にゆるやかに傾斜し、F地点が微高地になっており、現在リンゴ園として利用されている。この場所を字名で「源氏屋敷」と呼ぶ。表土は浅く約20cmで遺構確認面が認められ、円形状を有するビットを確認することができた。遺物は土師器片が数点あり、磨滅が著しい。1点破線で囲んだ範囲が今回の調査で確認した埋蔵文化財の包蔵範囲と推定される地点で大浦d遺跡とした。年代を決定する遺物は得られなかったが、土師器片が出土しており、大浦遺跡と同様な年代と考えたい。遺構確認面は「ヤケパン」と通称される粘質土の固い土質で黒褐色を有し炭化物を含む。範囲は東西200m×南北70mの約14,000m<sup>2</sup>である。



第8図 外ノ内遺跡の分布範囲図

### 第3節 外ノ内遺跡周辺の埋蔵文化財分布調査

本遺跡は米沢市北部、隣接する高畠町との行政区境近くに所在する。西側を国道13号線が南北に走り、自動車の往来の激しいところである。このため、新たに国道を新設（四車線化）・拡張が計画され、数年後には具体化する運びである。又、この遺跡の南側は北部工業団地として企業進出が著しく、さらに県立高等技術専門校、県工業試験場などの公共施設が移転してくるなど、変貌の激しい地区である。

本遺跡の試掘調査は、從来から遺物が散見される所であり、又この遺跡の北側に地質学上の白竜湖湖岸段丘のみられる地域でもある。試掘調査は10月5日に行ない、合計22ヶ所を設定。刈り入れの終っていない田を除き、宅地を除く畠、雑木林の空地を中心的に実施した。試掘の外にボーリング棒による調査と地元地権者の方々からヒアリングによった。

試掘坑は、 $1\text{m} \times 1\text{m}$ 、深さは地山の見える部分まで掘る形ですめたが、検出された遺物は少なく、縄文時代中期のものと思われる小片数点と、他に須恵器片数点を試掘坑F地点の南側で表探するにとどまった。

遺跡の範囲面積は、試掘地点の東西K-V、南北C-Sの間で計測した場合約  $450\text{m} \times 115\text{m}$  のおよそ  $52,000\text{m}^2$  の東西に長い遺跡と想定される。とくに遺跡の中心となるのは、D-H、N-Sの線で結ばれる約  $11,000\text{m}^2$ 、標高では  $221\text{m} \sim 223\text{m}$  の範囲と考えられる。

## 第4節 花沢A遺跡

### I 遺跡の概要

本遺跡は、米沢市街地の東部、奥羽本線米沢駅から北西約700mの所に位置し、「米沢市遺跡地名表」（昭和62年10月改訂）では遺跡No.252、所在地番は米沢市花沢一丁目2517～2に所在する。ここは米沢市中を北流する最上川上流の松川と羽黒川の両河川に挟まれて形成された河岸段丘上にあり、「米沢市遺跡地名表」では、羽黒川流域の遺跡群の1つとして捉えている。

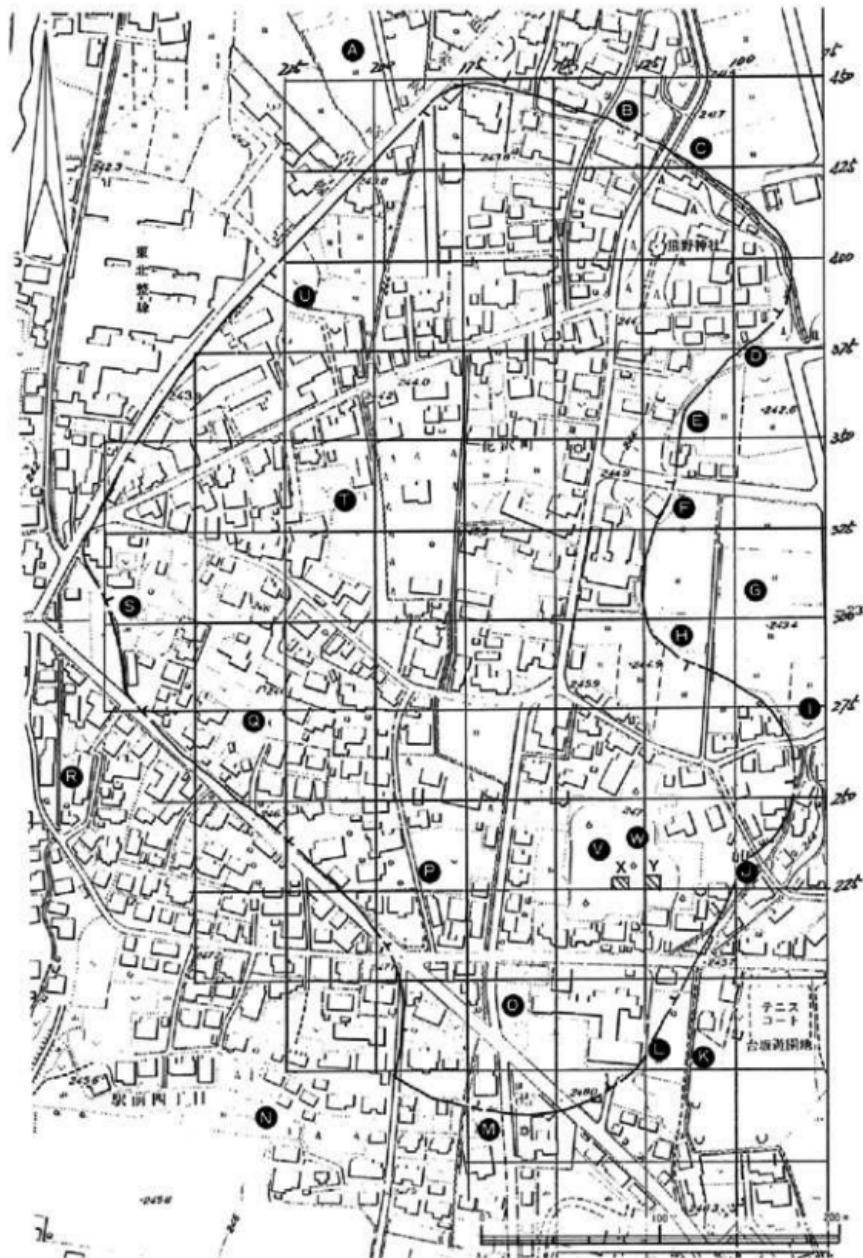
本遺跡はその大半が宅地化しており、その中で、唯一果樹園（サクランボ）を経営している、大沼孝頼氏のご好意によりその果樹園内を調査させていただいた。

### II 試掘調査の経過 [第9図参照]

米沢市が昭和60年度に花沢地域一帯の分布調査を行なった際には、東西約200m×南北約300mのおよそ60,000m<sup>2</sup>を遺跡範囲としていたが、今回21ヶ所の坪掘りを行なった結果、東側のC～Lの10ヶ所は羽黒川の旧氾濫原であり、更に南側のMでは試掘と地権者のヒアリングから、現在田となっているが昔は河原石が多かったことなどから、遺跡範囲外であることが判った。又、両側は宅地化が急速に進んでいる為、点在する畠、雑木林等を中心にして試掘せざるを得なかつたが、ことにS地点はすぐ西側を北流する松川の河岸段丘上にあり、数点の土器片を採集していることから、遺跡範囲はB～L、O～Q、S～Uの線で結ぶ内側、東西約300m×南北約470mのおよそ140,000m<sup>2</sup>の範囲と考えられる。今回調査の果樹園にはV～Yの4ヶ所試掘坑を設定し、その結果V、Wは既に擾乱されており、残りは2ヶ所X、Yを調査することとした。Xを以下「西側区」Yを以下「調査区」と称する。

### III 調査の経過

調査区の調査は、西側区と同時併行に8m×8mのグリッドを設定して10月5日から入り、西側区は遺物は出土したものの戦前の防空壕造りの為擾乱され調査は中止。調査区の掘り下げは、10月8日終了。その結果、畠の歴跡と思われる18本の遺構を確認。写真撮影後更に調査区両側を拡張し、調査区全体の掘り下げを実施。その結果、調査区南西部部分と東側に各1つずつ不明な落ち込みを検出し掘り下げたところ、多量の土器・石器を伴う住居跡と判明した。ここで、前者をHY27、後者をHY28とし精査した結果、10月16日、HY28にて複式炉と3ヶの柱穴ピットを検出した。この為、東側を更に1.5m×5m拡張し掘り下げ、10月19日セクションをとり、HY28の遺構全体を検出し写真撮影を行なう。一方HY27は10月20日床面整理を行ない、「両側円弧形方形プラン」と予想される為、更にHY27西側を2m×6m拡張しその掘り下げと面整理を実施。10月21日、複式炉（馬蹄形土器埋設石組複式炉）と3ヶの柱穴ピット、それに完形の浅鉢土器1点を検出した。10月22日午前11時30分より現地説明会を開催する。10月27日HY27西南隅の土壌を掘り下げ、平板測量を行ない、埋め戻しをして調査を完了した。精査面積は94m<sup>2</sup>である。



第9図 花沢A遺跡グリッド配図

#### IV 検出された遺構

今回の花沢遺跡調査区から検出された遺構は、円形竪穴住居跡2棟を含む土壙3基、土器埋没遺構2基、住居跡内に検出された土壙状落ち込み2基と近世の墓壙4基の計12基が認められた。ここでは明らかに近世と判明した墓壙を除く縄文期に限定して、遺構ごとに説明を加える。

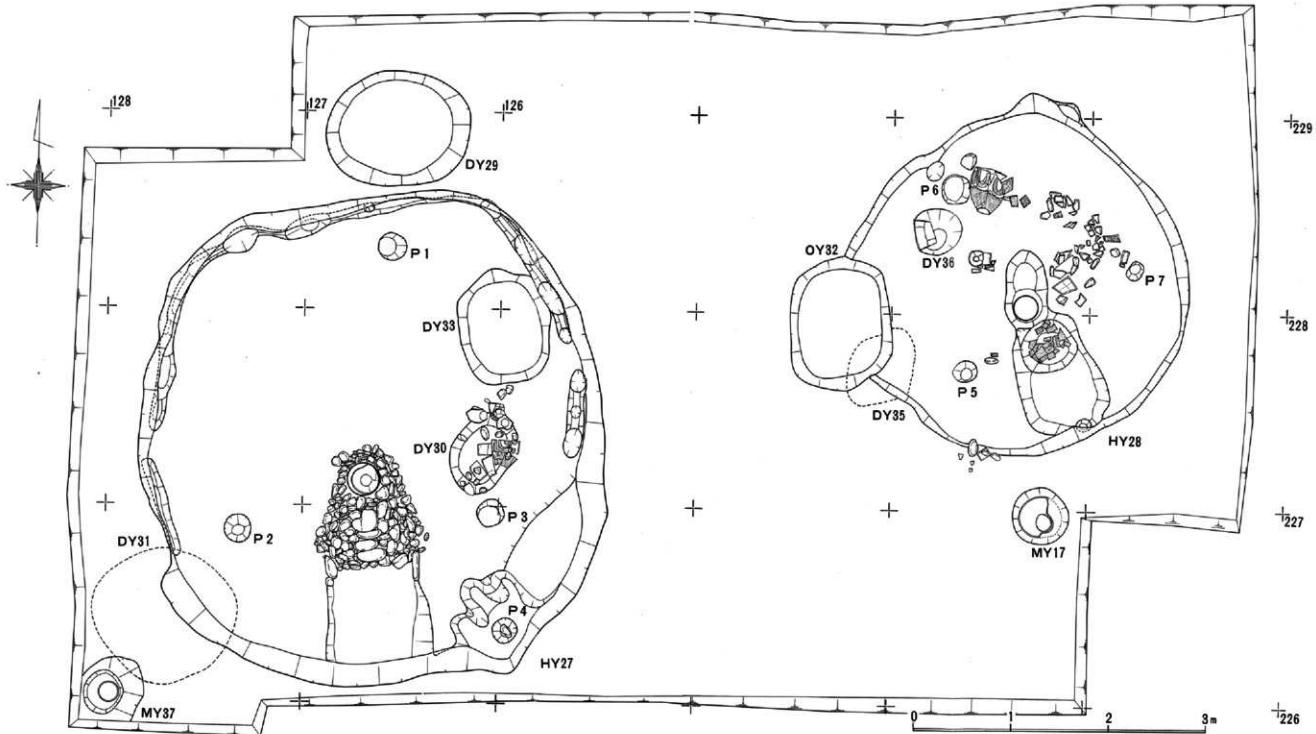
##### (1)竪穴住居跡 [第10図～第12図]

竪穴住居跡は調査区の西側のHY27、同じく調査区東側に位置するHY28の2棟がある。前者のHY27は、主軸方向（南北4.9m、東西4.7m）のほぼ円形プランを示し、西側東側両側面が幾分外に膨らむのを特徴としている。

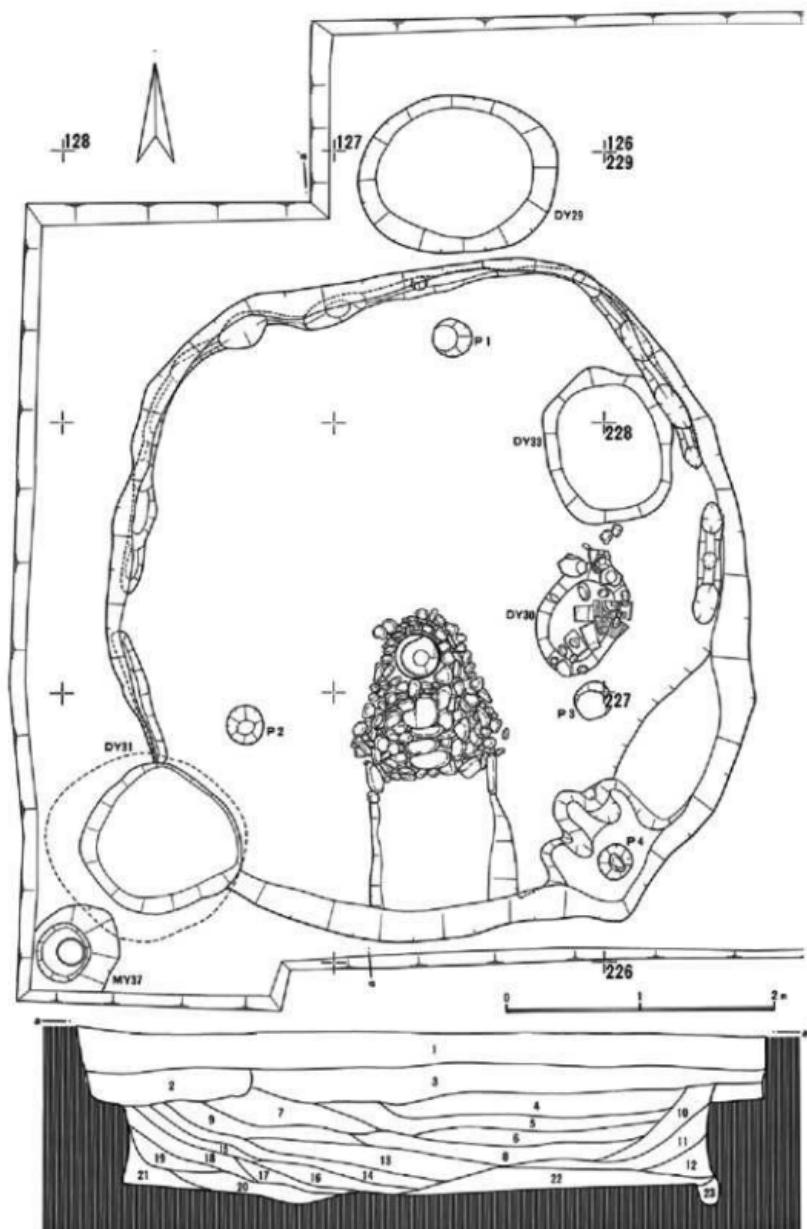
壁はセクションでの確認を加えると、北壁75cm、南壁76cm、西側90cm、一部後世の攪乱によって削平された東側においては80cmとなり、当時の構築段階においては、概ね1m近い壁高を有したものと推測される。壁直下には東側の一端と後述する複式炉が設置された南側部を除くと約5cm～25cmの巾、深さ10cm～27cmの周溝が北側を中心として配置されている。ことに、周溝も含めた壁確認上部からの確認においては上端と底部においての主軸長が底面にいくに従って広く、断面形状はいわゆる袋状土壙に類している。よって、周溝は壁内部に存在する形となる。このことは、後の層序の中で詳しく触れることにしたい。

次に柱穴は、ほぼ正確な三角形を呈しており、複式炉埋設土器とほぼ軸を同一するP1を頂点にP1～P2までの径が3.25m、P1～P3間が2.95m、P2～P3間が2.55mとなる。柱穴は、P1～P3が概ね26cm～27cmと統一され、深さは床面からP1が55cm、P2が46cm、P3が45cmを計るが、P1を中心として設置されたことが判かる。炉は先に述べた如く、南壁直下に灰原の袖部を置く長軸2.2mの複式炉が設置されており、複式炉の平面形態は、頂端の土器埋設炉、明瞭な石組みを有する石組炉、それに素掘りの灰原からなる、馬蹄形土器埋設石組複式炉に分類される。埋設土器は、深鉢形土器・精製深鉢形土器（第31図341）と内部に粗製深鉢形土器（第22図200）を重複して設置しており、両者とも意図的に胴上部を切断して炉に利用したものである。この複式炉の東側には、壁に隣接して約20cmの山形状に整形削平した小高い壇が設置されており、その中央部に直径24cm、深さ5cm、内部に河原碟を埋納してP4が存在する。全体的な壇の大きさは、壁から最頂部92cm、巾89cmを有し、住居跡との配置関係から想定すれば、祭壇跡と見るべきであろう。更にP3の北側にも長径88cm、短径60cm、深さ5cmの浅い落ち込みDY30が付随しており、底面に第28図328と第22図197の2個体の土器破片を敷き詰めてある。しかも、土壙全体及び内部に敷き詰められた土器片全体が赤褐色に一次焼性を受け、多量の木炭粒も認められていることから想定すると、炉とは別のサブ的な炉もしくは、炉内に蓄積した木炭及び灰を一時的に収納した可能性もある。

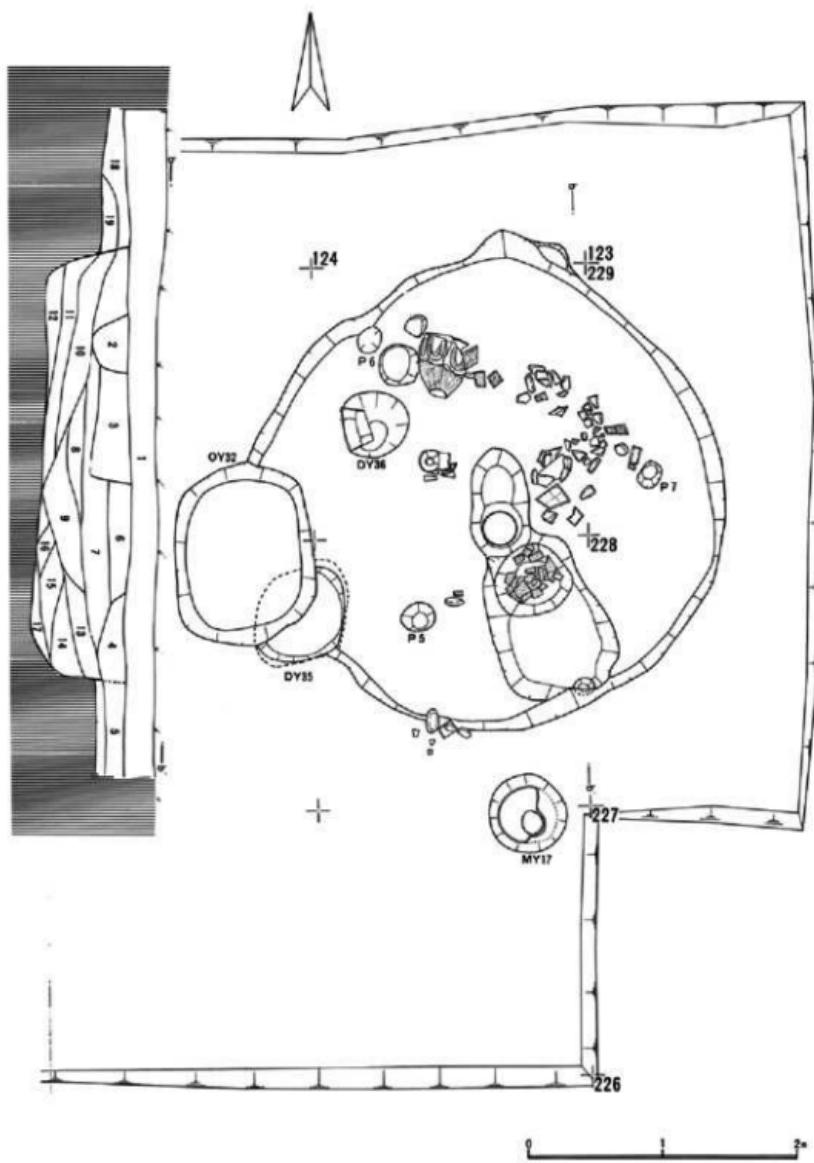
次のHY28は、西壁の一部が近世墓壙（OY32）によって破壊されているが、ほぼ円形プラン



第10図 花沢A遺跡遺構全体図



第11図 花沢A遺跡HY27平面図



第12図 花沢A遺跡HY28平面図

を示す長径3.5mの竪穴住居跡である。住居跡のはば中央に土器埋没炉を伴った複式炉はHY27と同じように南壁よりに灰原を有し、石組み炉部に相当する位置には、第15図53~57に示した土器片を用いて、炉を床面に形成している。壁は後世の耕作によって幾分削平されているが、北で33cm、南で32cm、東で32cmで約32cmを示す。恐らくは、先のHY27と同様に15cm程削られたと仮に想定すれば、概ね47cm位の壁高を有していたものと推測される。

柱穴はHY27とはほぼ同じく正三角形を呈しており、P6を頂点としてP5間が2.65m、P6~P7間が2.87m、P5~P7間が2.85mで、大きさは、P5が35cm、P6が40cm、P7が27cm、P6の深さ58cm、P5が長径35cm、深さ43cm、P7が長径28cm、深さ55cmであった。更に付帯施設としては円形の長径68cm、深さ16cmの底面に第14図44を貼り付けた土壤状落ち込みが認められる。しかもHY27と同様に焼けた痕跡と炭化粒を多量に含んでおり、同様なものと思われる住居跡内から検出された遺物はP6に接して横倒した状態で確認された第31図344の深鉢形土器1点を含む完形土器3点と土器片470点、石器類116点、総数589点が床面を中心として検出されている。覆土からの検出は、HY27と対照的にわずかであった。

### (2) 土壌 [第10図]

DY31、DY35、DY29の3基が認められ、DY31はHY27の構築によって切られ、DY35はHY28に切られている。両者とも形状が袋状を呈しており、DY35は自然堆積の埋土、DY31は一部人工的な堆積（砂・砾層）を多量に含む。このことはHY27以前に存在していたDY31を意図的に埋め戻し、その後にDY31を切断する形で構築した様子を物語っている。最後のHY27の北側に隣接するDY29は第IV群土器を中心として検出されていることから、縄文後期に属するものとみられる。大きさは、DY29が長径145cm、短径114cm、深さ7cmの楕円形、DY35が長径82cm、短径65cm、深さ72cmの円形プラン、DY31が長径140cm、短径134cm、深さ138cmのはば円形プランを示す。

### (3) 土器埋設遺構

両住居跡に付随すると思われる遺構で、HY27の南西寄りに検出されたHY37の甕形土器（第29図、30図339）を口縁部を上に直立した状況で埋納し、HY28の南に隣接するHY17も同様に直立した大型の粗製深鉢土器（第23図203）と、深鉢形胴下半部を再利用した第33図351の深鉢土器を二重に設置してあった。

## V 検出された遺物

花沢A遺跡より検出された遺物は総数10,488点であり、主にHY27、HY28の両住居跡を中心として西側区の試掘坑内検出遺物を含めた総数量であり、分類すると土器類、石器類、その他の3つに大別される。殊に、大半を占める土器類は時期的に縄文早期中葉、同前期末、中期後葉期、後期初頭の4時期に区分され、その他として平安期の須恵器、土師器、近世の陶磁器類数点

が含まれるが、断片であることからこれらは割愛した。ここでは土器群を中心に説明を加えたい。なお、遺構外の数量を列挙すれば次の様になる。西側調査区遺物、土器850点、石器69点、東側調査区遺構外の遺物、土器1,979点、石器88点、遺構内出土遺物、石器6,888点、石器220点の以上であった。

#### (1)出土土器

本遺跡から検出された土器群は総数9,717点が認められ、年代的には次のⅣ群に分けられる。

##### I群土器〔第24図 218～220〕

3点認められた。何れも早期中葉に属するものとみられ、No.218は地文に斜位の貝殻条痕文を施し、その後に籠状工具による籠状連續文を有するもの。No.219は半截竹管の先端部を用いて斜状に突刺文を施したもの。No.220は口縁部が緩やかに外反する無文土器である。籠状文と貝殻条痕の組み合わせから想定すれば、関東地方の子母口式併行に類するものとみられる。

##### II群土器〔第24図 221～234〕

本群に属する土器は総数78点認められているが大半は住居跡内覆土からの検出によるものが多く、磨滅が著しく、図化が可能であったのは僅かに14点であった。主な文様構成としては、半截竹管文等による爪形文及び円弧文、山形文を有するもの、No.221、227、229。棒状工具による鋸歯状文、山形文、平行沈線文、No.224、225、228、231。L R、R L等による斜縄文、No.222、230～234となる。これらは前期末の大木6式併行に属するグループである。

##### III群土器

本群に属する繩文中期後葉期の土器群はH Y27、H Y28の両竪穴住居跡埋土及び床面出土を中心とし、西側調査区、精査区の遺構外出土を含めると総数7,891点が検出されており、花沢A遺跡出土土器群の中では、最も多く認められたグループである。

これらの土器群は文様表出技法、単位文様、文様構成等の吟味から、幾つかのグループに細分することは可能であるが、大半の土器類は破片が主体を占めるため、全体的な文様構成、単位文様の細別は基本的に不可能である。但し、検出された23個体分の精製土器の文様区画を基本とし、全体的な方向としては主に縦位に展開する文様構成を有する土器群—A類土器、主に横位に展開する文様構成を有する土器群—B類土器、それに、基本的には縦位の文様構成を呈しながらも連続して横位に展開する土器群—C類土器、更にその他の土器群—E類土器と文様の飾られない所謂粗製土器群—D類土器を加えた5類に大別される。以下簡単に完形土器を中心として説明を加えたい。

##### A類土器

太状の沈線及び凹線を用いて縦長に単位文を描くグループで磨消繩文を主に一部充填繩文で構成している。単位文様は梢円文、「C」字状文系、変形「C」字状文系、「U」字状文、変形「U」

字状文、「Y」字状文系、「H」字状文系、2単位楕円文、円「U」字状文等を組み合わせて文様構成を呈している。完形一括土器はNo.340と345の2点が認められ、前者のNo.340は左から單位文様を展開すると、縦位の「C」字状文→変形「E」字状文→「C」字状文→楕円文→「U」字状文→「C」字状文→変形「E」字状文→「C」字状文→「E」字状文→「C」字状文→「U」字状文の11単位で文様を構成し、基本的な文様単位は「U」字状文を繰り返す2区画である。後者のNo.345は縦位の「C」字状文と「U」字状文を結合させた「C」字「U」字状文を基本単位として、それぞれ7単位で構成している。これらの類に属するものとしては、他に「U」字楕円文を呈するNo.44、縦位の楕円文を有するNo.165がある。他の土器破片は全体的な文様単位が不明確であることから具体的な文様単位を推測することは困難であるが、概ね縦位の「C」字状文系、同「C」字状文系、楕円文系等が主流を示すものと考えられる。

#### B類土器

縦位の「C」字、同「U」字、変形「C」字、「C」字状波文等の単位文を主に文様を構成する仲間であるが、文様体を区画する波線を下脣部に置くことによって先のA類とは区別される。No.339、341、342、344、351、353の6点の完形一括土器がある。本類の文様構成を有するグループは更に数単位の文様を不規則に配したものB<sup>1</sup>類と、数単位の単位文様を交互に配するもののB<sup>2</sup>類と細分することも可能である。前者のB<sup>1</sup>類はNo.339、353の2点が認められ、No.339は左から展開すると縦位の「U」字状文→変形「C」字状文b→「U」字状文→変形「C」字状文Cの4単位に波状渦巻文を下脣部に置き、文様を区画している。基本的には「C」字状文+変形「C」字状文の2区画を標準とした文様構成と考えられる。次のNo.353は横位に文様を展開するもので、文様表出技法の全てが縦線を用いて渦巻「C」字状文をメルクマールとして変形「C」字状文その他の単位文様を組み合わせた集合体を構成する特異な文様構成を示している。この文様体を構成する土器群は東北南部の各遺跡で断片的に検出されており、明解な文様表示は与えられていない現状を鑑み、我々はあえて全体的な文様構成の展開状況と意義を考慮し、「水流渦巻C字状文」と呼称したい。

B<sup>2</sup>類はNo.341、342、344、351の4点が認められ、No.341は左から展開すると縦長の「C」字状波線入組文を横走するもので7単位で構成している。No.342は渦巻「C」字状文と「C」字状文を交互に配し、渦巻「C」字状文下に配する波線を更に「C」字状文を包む様に大波状で区画し、丁度両単位文様を交互に巻き込む形状となる。No.344は縦長の「U」字状文と楕円文を交互に配列するもので、7単位、3区画となる。No.351は縦長の「Y」字状渦巻文と「C」字状文を交互に組み合わせ、その間に大波線で区画する文様構成をもつ。一部同心円文を2単位配しているが、基本的には「Y」字状渦巻文と「C」字状文の組み合わせによる4区画で構成するものである。

## C類土器

単位文様を横に展開し文様を構成する仲間であり、No. 327～330, 343, 346～350, 352, 354～356の14点の完形一括土器がある。本類に属する土器群は花沢遺跡の3群土器群の中で中心的な存在であり、単位文様と文様構成から次の8種に分類した。

### C<sup>1</sup>類 [No. 352, 355]

単位文様となる「C」字状文、「(」状文、変形「C」字状文a、渦巻「C」字状文、「U」字状渦巻文a、複合「U」字状両端渦巻文、「U」字状渦巻文b等を横位に組み合わせて文様を構成する仲間を一括した。No. 352は「U」字状渦巻文a→複合「U」字状両端渦巻文→「U」字状渦巻文b→「U」字状渦巻文a→「U」字状渦巻文aの5単位で構成し、No. 355は「C」字状渦巻文→「(」状文→「C」字状文→「)」状文→変形「C」字状文a→「C」字状文の6単位となる。

### C<sup>2</sup>類 [No. 343]

渦巻「C」字状文を横に展開し液線で区画するグループであり、No. 343, 1点がある。4単位で構成している。

### C<sup>3</sup>類 [No. 346～348, 354]

C<sup>2</sup>類と同じように横位に「C」字状文を展開するもので4個体認められている。No. 346は3単位、No. 347は4単位、No. 348は5単位、No. 354は6単位と不規則である。この仲間には、No. 77, 78, 131, 276も含まれる。

### C<sup>4</sup>類 [No. 327, 357]

口縁部文様体として発達した横長の「C」字波状文を展開して文様を構成する仲間で、No. 327は1条の隆帯と不定帶状文を置き、その下方に横長の「C」字波状文を3単位、No. 357は3単位配してある。

### C<sup>5</sup>類 [No. 328]

前者のC<sup>4</sup>類と基本的には同じであるが、「C」字波状文の間隔を一定に配して平行に展開させるのを特徴とし、C<sup>4</sup>類が更に発達した文様体と考えられる。

### C<sup>6</sup>類 [No. 349]

横位の楕円文に更に外側に楕円文を配した同心円文を単位文様として配列し、舌状に発達させた波状文で区画するのを特徴とする。No. 349は5単位で構成しており、同様な文様体を有するものとしては、No. 62, 63、近いものとしてNo. 89がある。

### C<sup>7</sup>類 [No. 330, 356]

横位の同心円及び両端渦巻文を単位文として構成するものであり、単位文様の接点を隆線で誇張することによって発達した舌状の突起部を有するのを特徴としている。この種は波状及び平線

両者に用いられる、内反する鉢形が多く存在する。

#### C<sup>8</sup>類 [No. 350]

横長の楕円形同心円文を単位文様として横位に展開するものであり、No. 350、1点が認められた。C<sup>6</sup>類の発達した文様体と推測され、文様体を区画する波線は、本類になると平行沈線文に変わっている。

#### D類土器

粗製の土器群を一括したもので、17の土器埋納遺構内から検出された變形土器を含め7個体分の一括完形土器が認められている。

地文となる繩文は二段のL R・R L、前々段多条3~4本を主にする繩文原体を回転したものが多く、器形的には口縁部が内傾する變形土器D<sup>1</sup>類、No. 203、273他、口縁部が外反し胴部が膨らむD<sup>2</sup>類、No. 199他、同じく外反し胴部の膨らみが少ないものD<sup>3</sup>類、No. 201、202等口縁部が緩やかに内傾しそのまま底部に向うD<sup>4</sup>類、No. 198等、同じく内反するが「く」字状に急速に内反するD<sup>5</sup>類、No. 209他、大きく開く口縁がそのまま底部に向うD<sup>6</sup>類、No. 46等の形態に細分される様である。

#### H群土器 [第25図 235~264、第26図 279、280、282、第27図 306、309~326]

繩文後期初頭に位置する土器群を一括した。HY27の上端を中心に1,767点検出され、うち完形一括土器はNo. 332、333の小形土器2点と、No. 359~361の深鉢形土器3点が含まれる。文様手法は棒状工具等によって描いた沈線文が大半であり、縱位の「ステッキ」状文、「バスケット」状文、平行沈線文、渦巻状文の順で多く認められた。これらの、所謂精製土器の一群は、地文をL R・R L等の単節斜繩文によるものが多く、粗製土器の一部に撚糸文を呈する特徴が多い。これらは関東地方の堀之内I式、東北南部の南境式に平行するものである。

#### (2)出土石器

本遺跡から出土した石器群は、東拡張区のHY27を中心に完形石器22点、剝片石器314点、礫器45点の総数359点が認められている。剝片石器は紙数の都合により割愛せざるを得ないが、完形石器のみを簡単に述べると、石材は磨製石斧を除く全てが硬質頁岩によるもので、次の5器種に分けることができる。

#### 石匙 [第32図版1~4]

HY27床面より4点検出されている。

1は主要剝離を1a面に施した横長の石匙であり、刃部先端の1b面に打点を残している。

2の石匙も2a面に主要剝離を施し、捕みの一端が打点面に位置することから、抉りを加えたことによって2つの捕み部を有する様な特異な形態を示している。全体的な形態は突状を示し、縦型の形態を示す。

3は刃部が弓形に曲する形態を示し、3a面に主要剥離をもち3b面に打点を有する箇部は、両端を僅かに整形している。

#### 尖頭状石器〔第32図版6, 12〕

6は、先端が尖頭状を有する両面加工の石器を本類とした。基部の一端が破損しているため、明確にはできないとしても、丸味を有する可能性が高い。

12は、大型の尖頭状を有する両面加工の欠損石であり、恐らくは基部と推測される石槍の形態を有するものである。

#### スクレーバー〔第32図版5, 7, 9, 14, 16〕

スクレーバーに類する石器は5点ある。5は、5a面の右縁辺から刃部にかけて主要剥離を施すもので、所謂エンドスクレーバーの仲間に入る。7は、7a二等辺三角形をしている石器であり、先端部に主要剥離がみられ、機能的にはナイフ的なものであろう。14は、14a面全体と14b面縁辺に主要剥離を施した構円形状を呈する石器であり、石窓の仲間に加えた方が妥当かも知れないが、ここでは本類の仲間としておく。16は、円形状を呈する石器であり、両面の縁辺部に沿って主要剥離を施したラウンドスクレーバー様の石器である。

#### 磨製石斧〔第32図版18〕

基部が損傷した緑色変形岩の石材を用いた磨製石斧であり、刃部がハマグリ状を示すのを特徴とする。

#### その他の石器〔第32図版10, 11, 13, 15, 17〕

その他の石器としては、剥片の縁辺に僅かな加工痕を示すものを一括した。

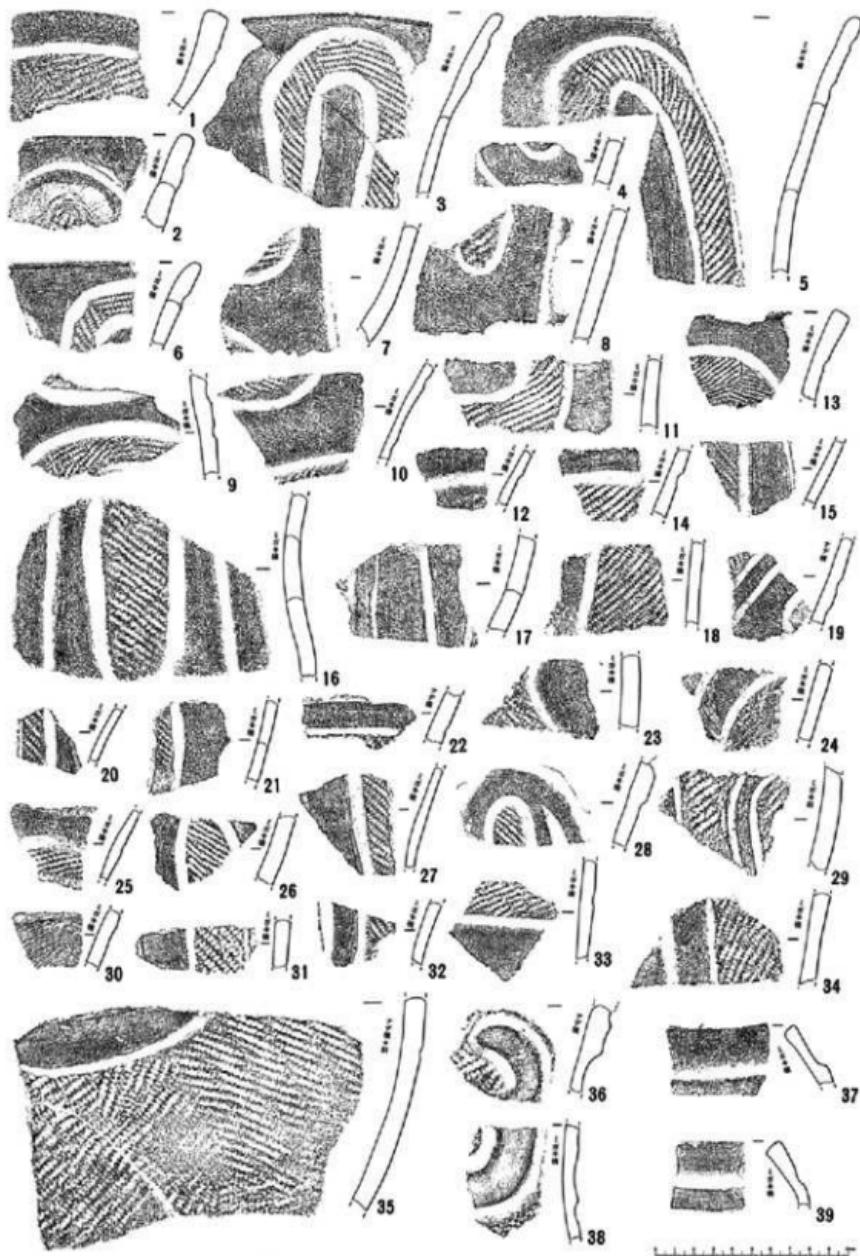
10は縦長の剥片、13, 17は横型の剥片、15は台形状を示す。11は両面に不規則な剥離を呈するもので、不定形石器としておく。

最後に礫器の数量を述べると、凹13点、磨石26点、石皿2点の計41点が、HY27, HY28両住居跡を中心に検出している。

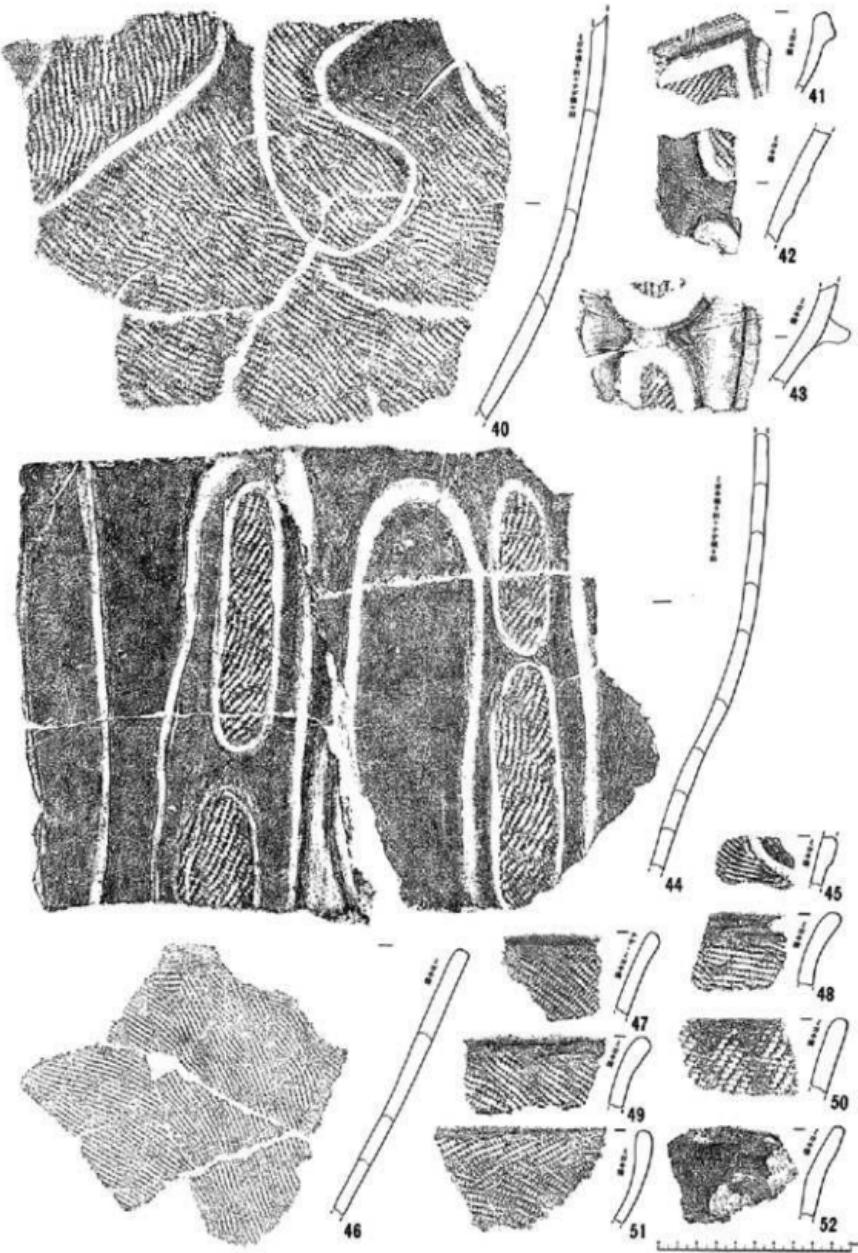
#### (3)その他の遺物

その他の遺物としては、HY28床面より検出された板土偶1点と、HY27の覆土1層から検出された円盤状土製品4点がある。先の土偶は、乳房を誇張した2つの突起とその仲間に繋ぐ縫帶状の突起を「Y」字状に配し、その側面を鋭利な工具で列点状刺突を連続的に施してある。1つは両側面と裏面に2条に突刺併行を施している。この種の文様及び大きく開く両腕の誇張した形態は、当地方では大木8a式から出現し、突刺文を有する板土偶は大木9式から出現する。

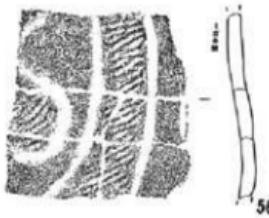
HY28の検出を考慮すると、大木10a式に類するものである。円盤状土製品は、土器の胴部破片を円形に整形研磨したものであり、334は縄文中期末葉、335～337の3点は縄文後期初頭に位置するものである。



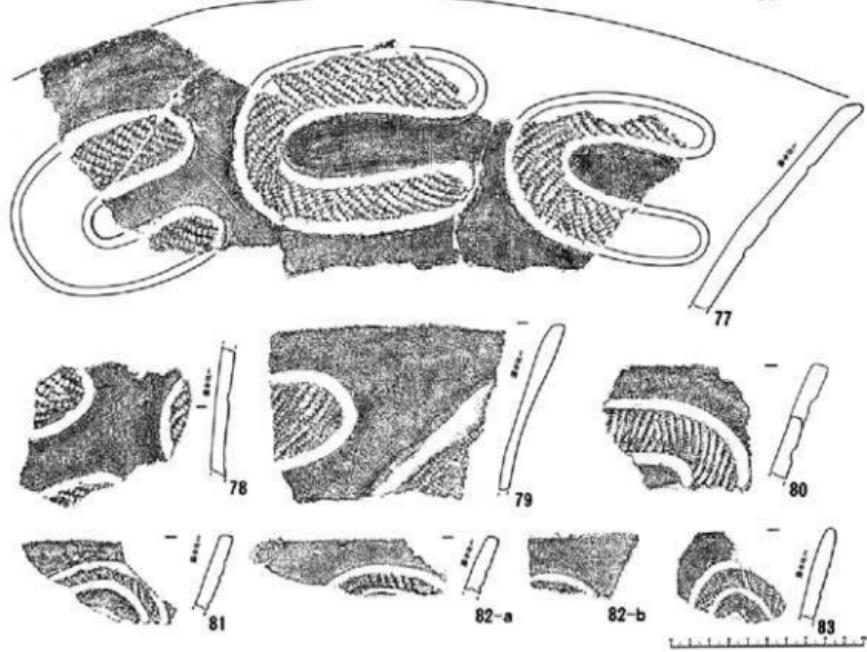
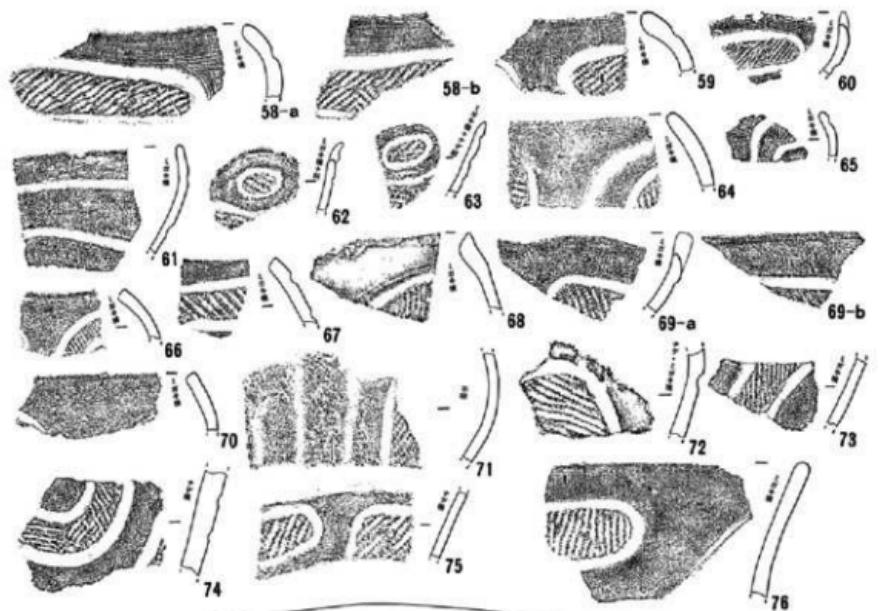
第13図 花沢A遺跡出土土器拓影図(1)



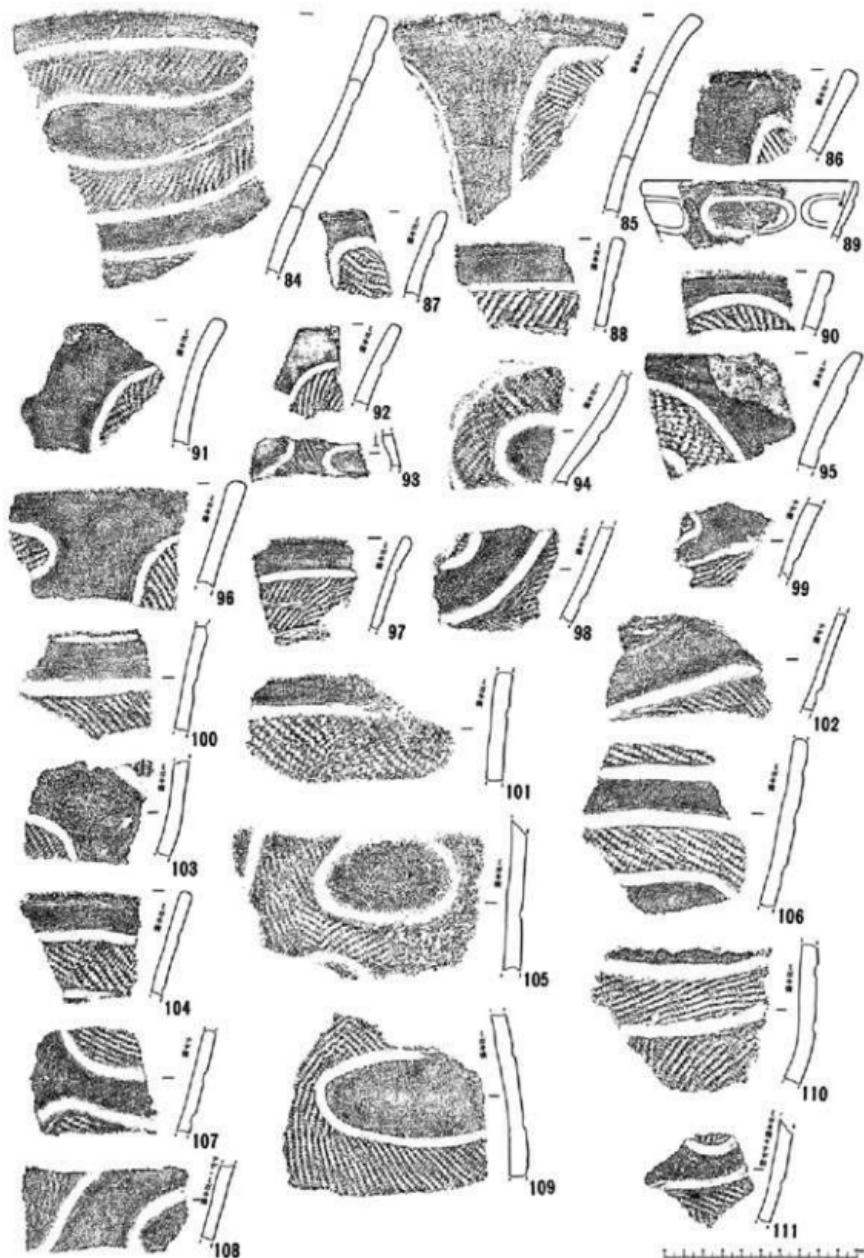
第14図 花沢A遺跡出土土器拓影図(2)



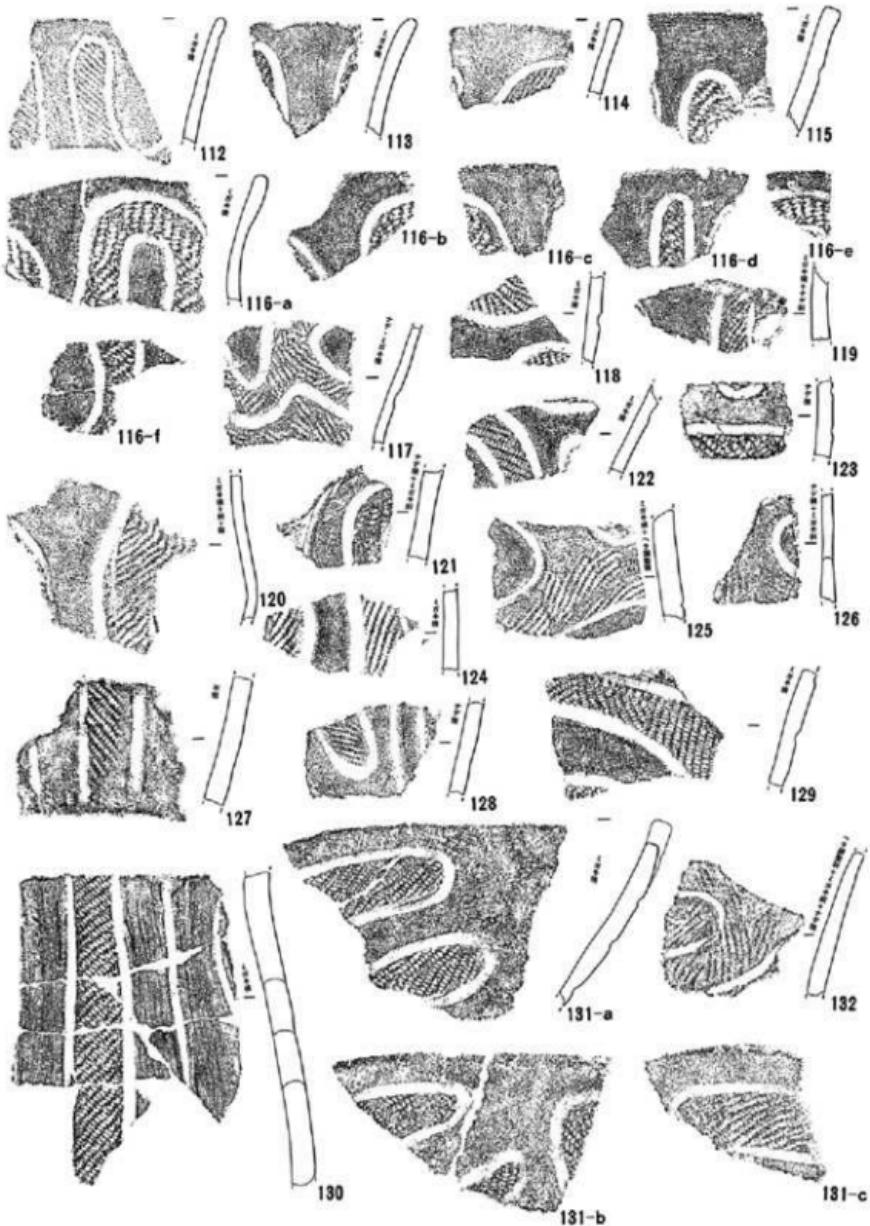
第15図 花沢A遺跡出土土器拓影図(3)



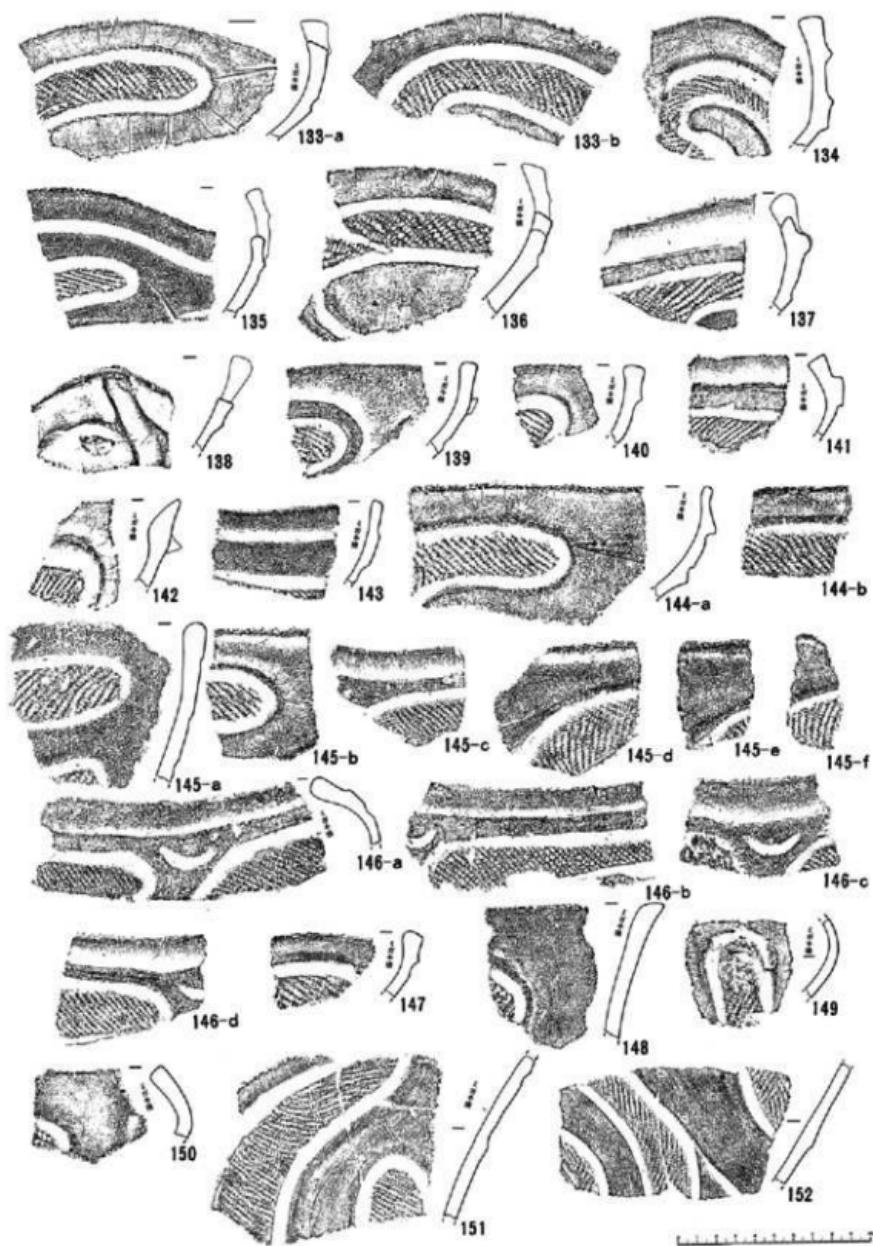
第16図 花沢A遺跡出土土器拓影図(4)



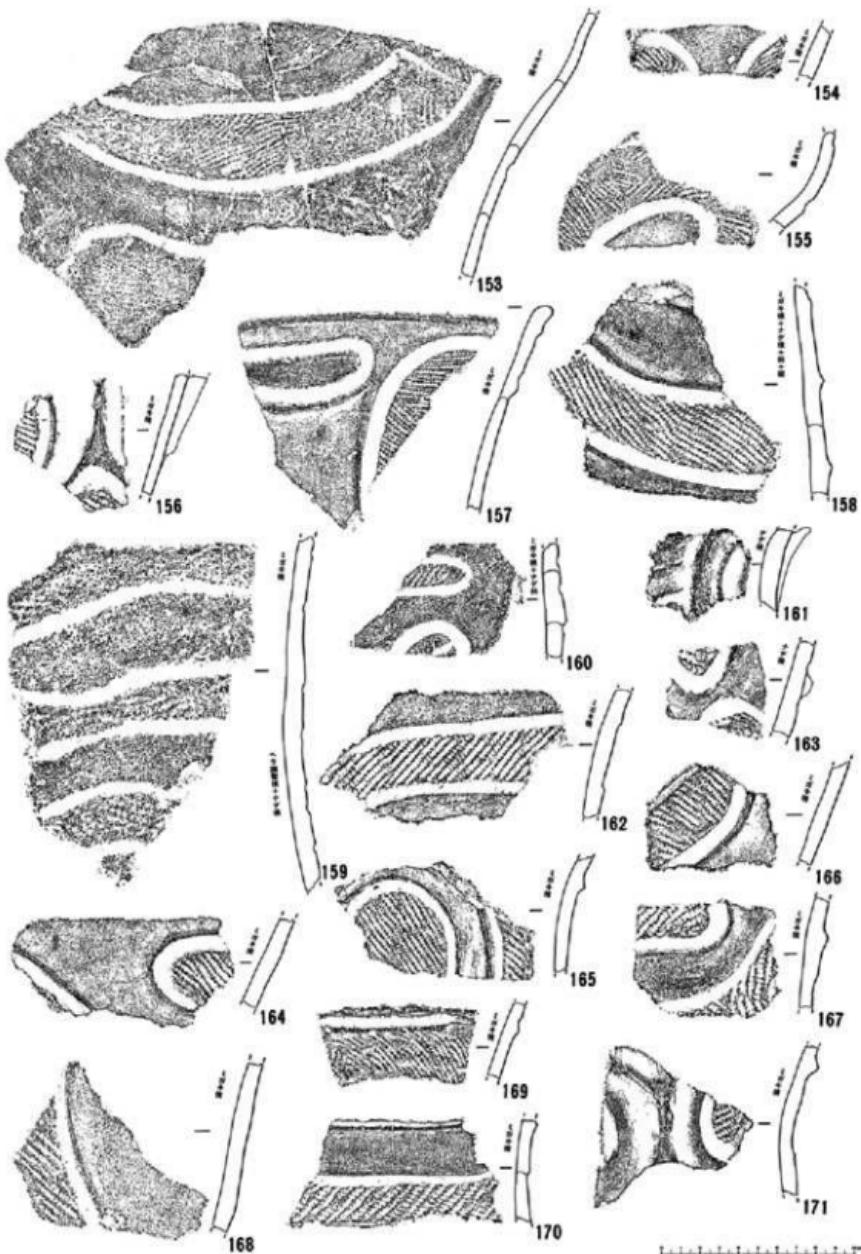
第17図 花沢A遺跡出土土器拓影図(5)



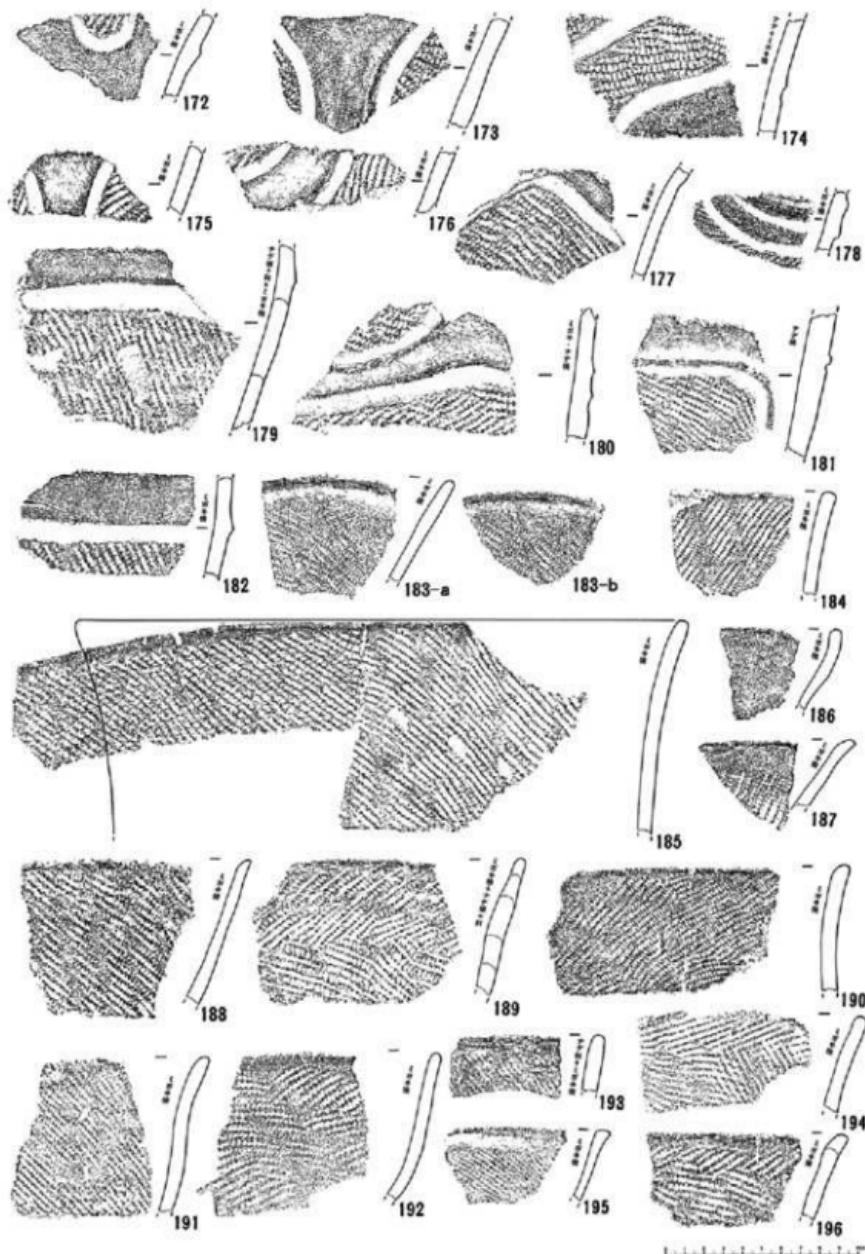
第18図 花沢A遺跡出土土器拓影図(6)



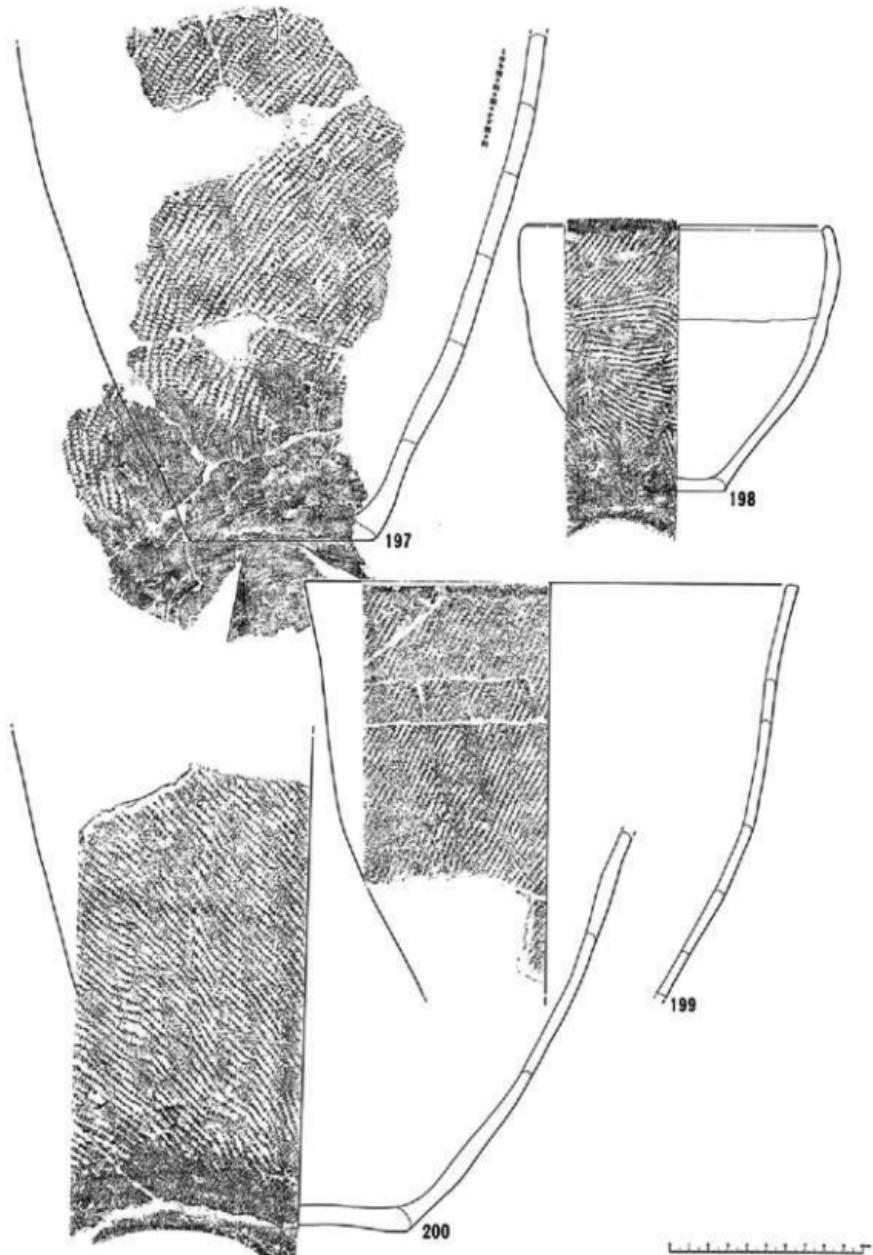
第19図 花沢A遺跡出土土器拓影図(7)



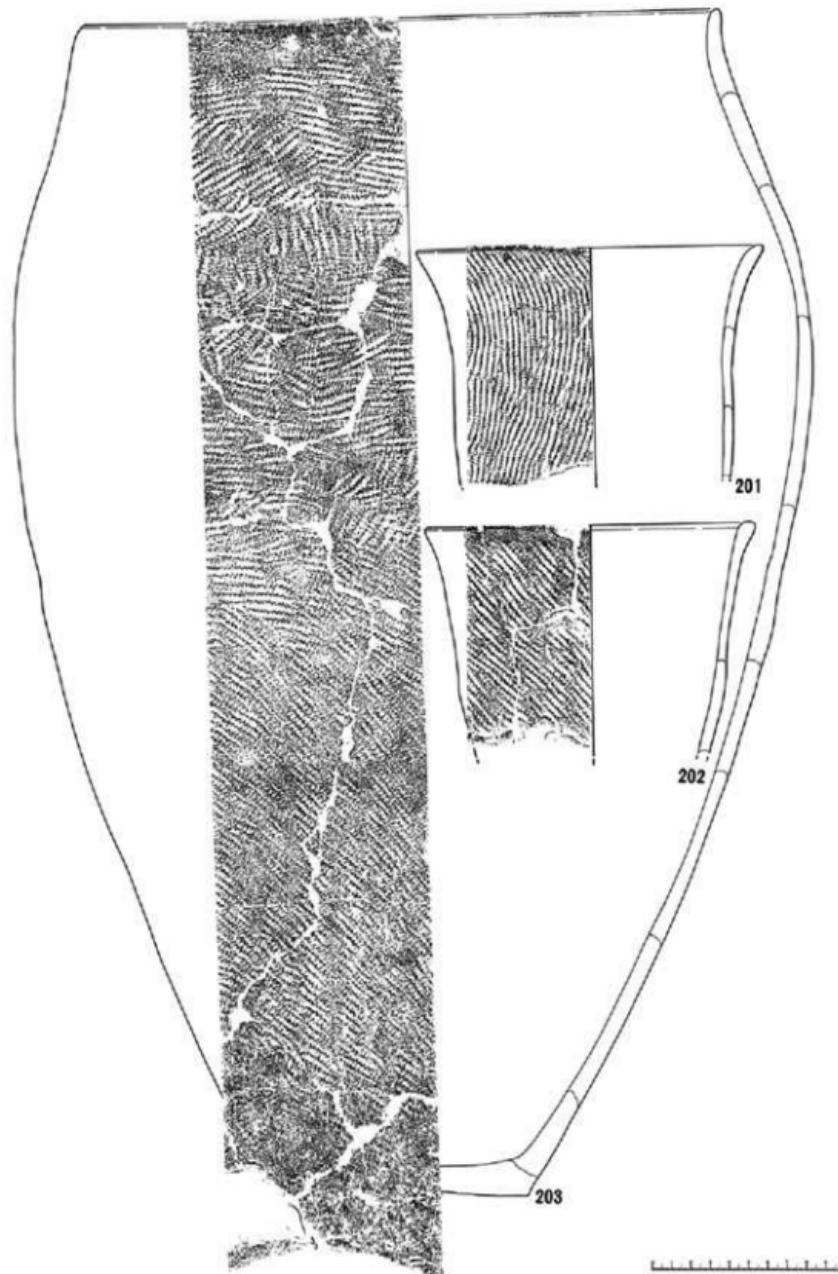
第20図 花沢A遺跡出土土器拓影図(8)



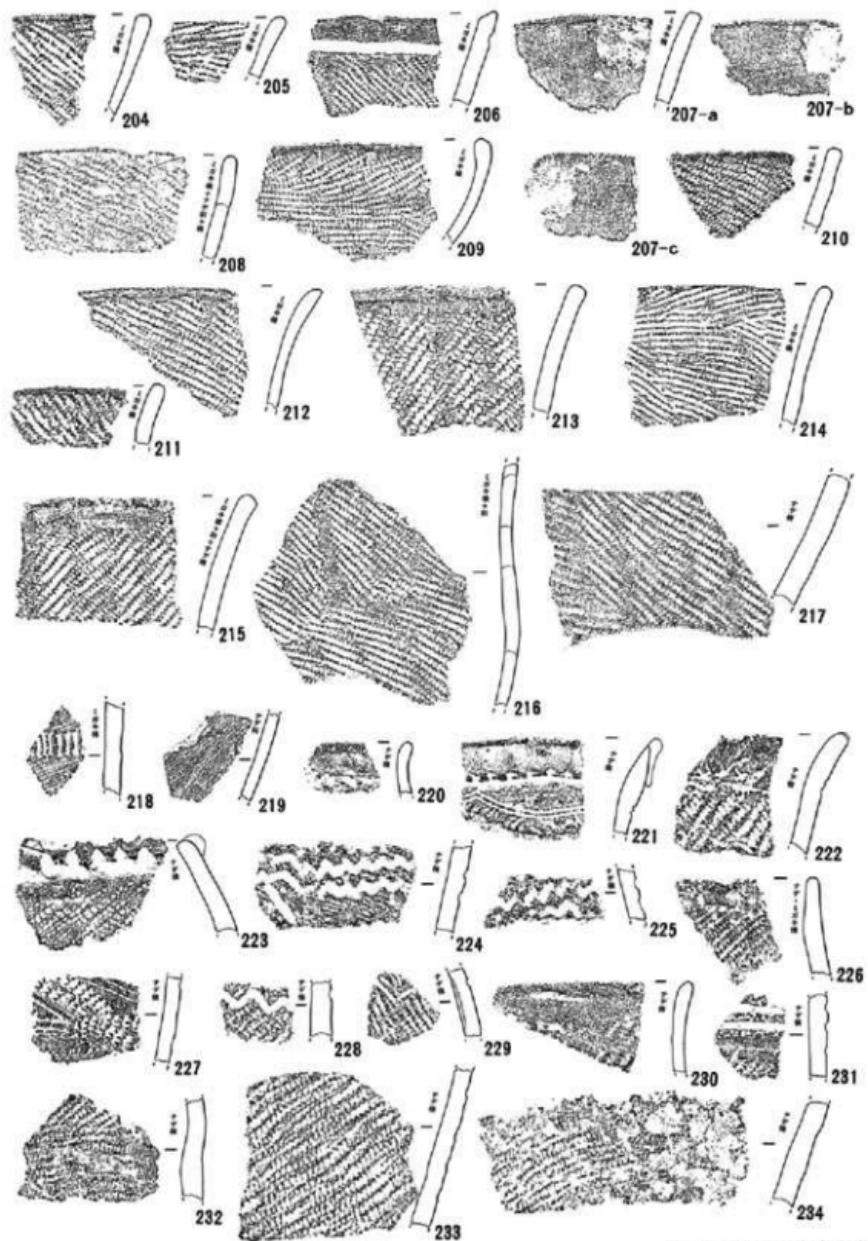
第21図 花沢A遺跡出土土器拓影図(9)



第22図 花沢A遺跡出土土器拓影図⑩



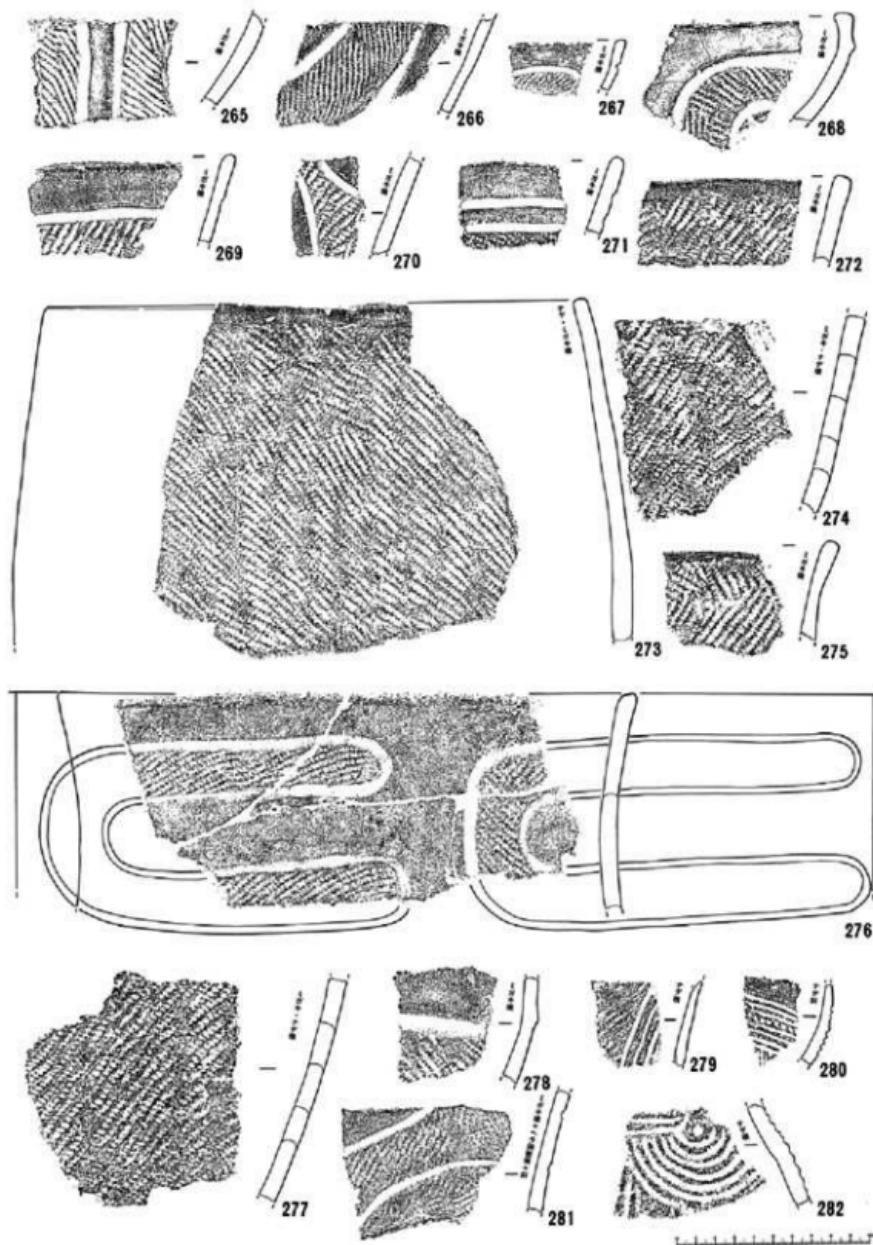
第23図 花沢A遺跡出土土器拓影図(1)



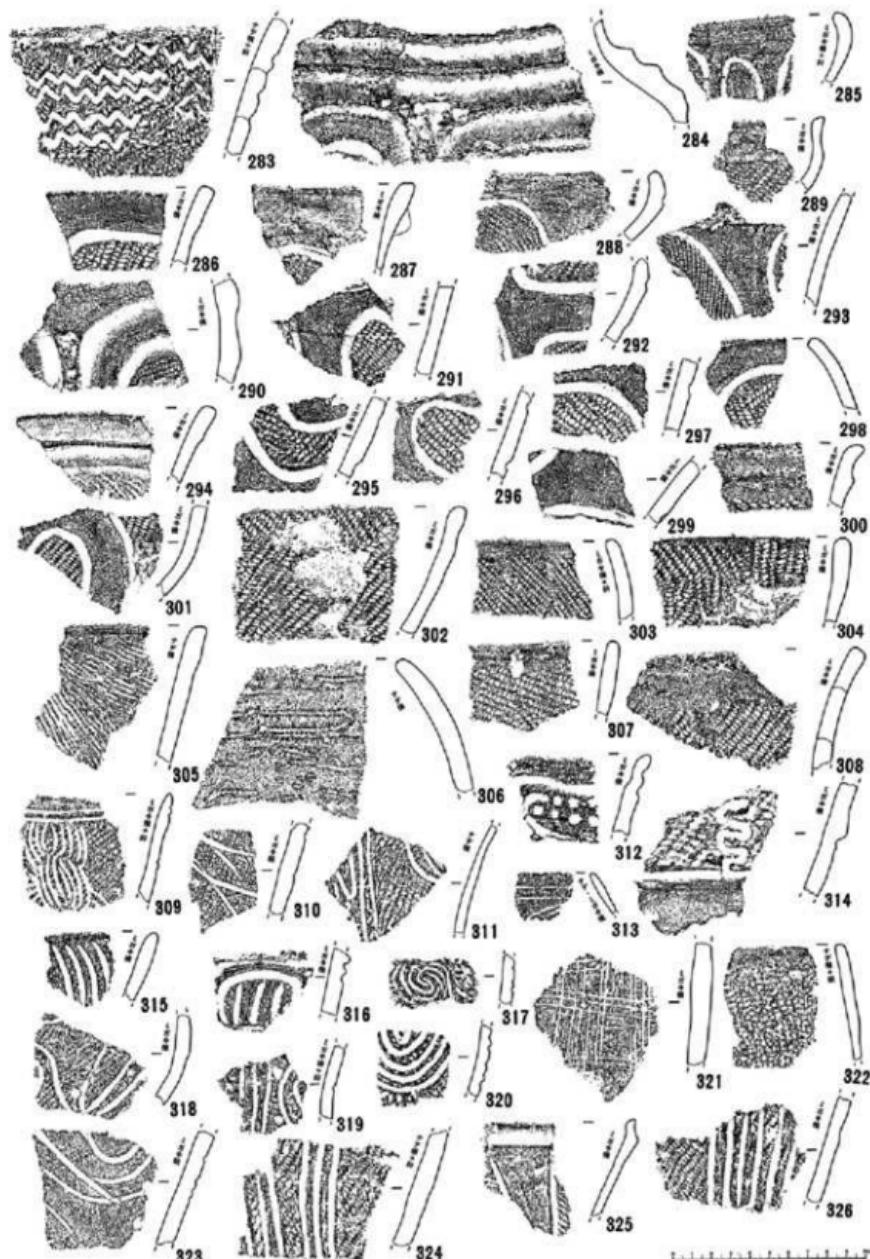
第24図 花沢A遺跡出土土器拓影図12



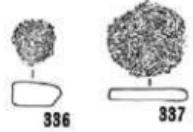
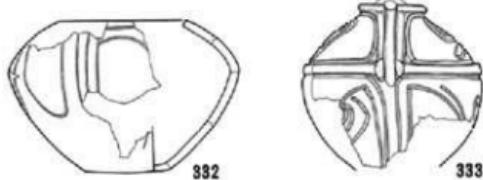
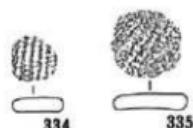
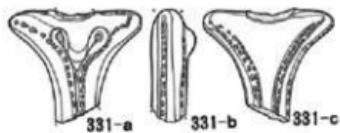
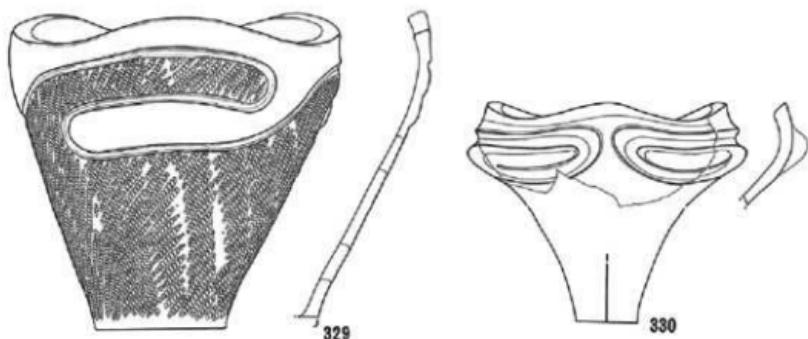
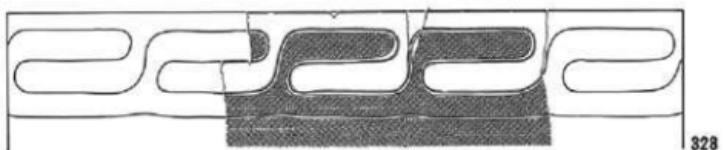
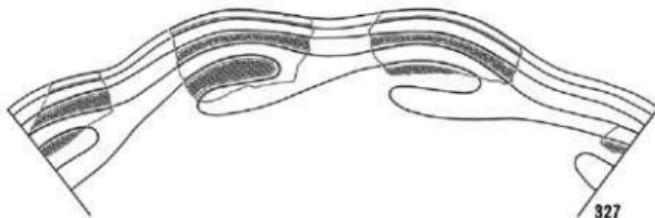
第25図 花沢A遺跡出土土器拓影図13



第26図 花沢A遺跡出土土器拓影図14

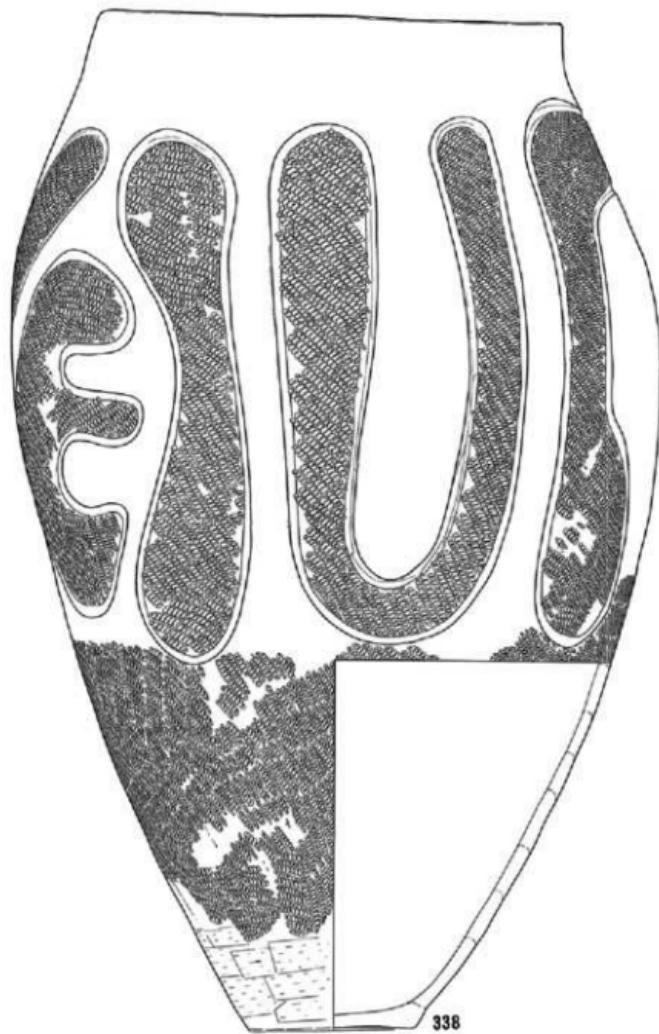


第27図 花沢A遺跡出土土器拓影図5

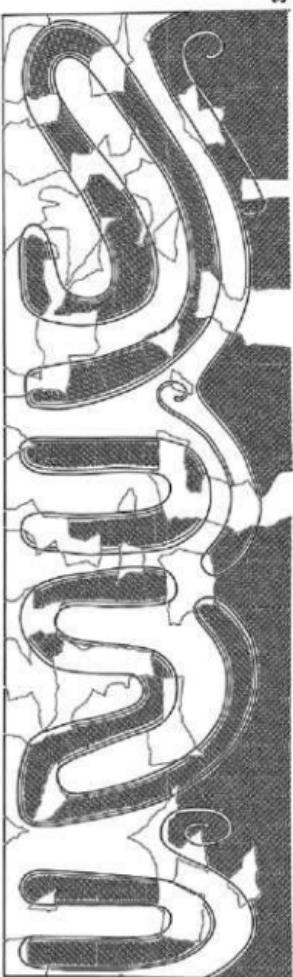


— 36 —

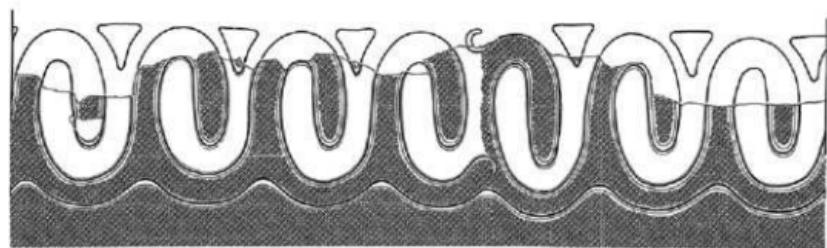
第28図 花沢A遺跡出土土器展開図、実測図(1)



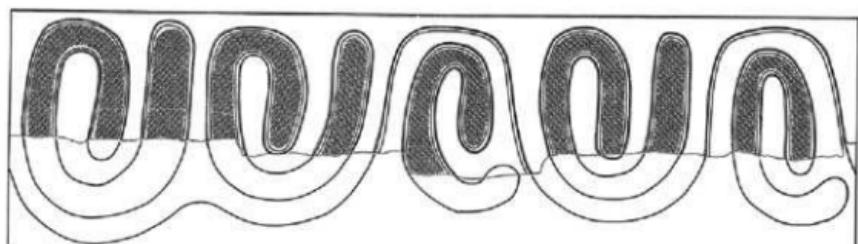
— 37 —



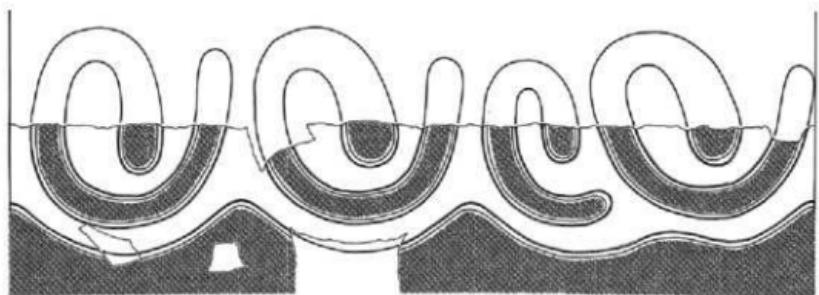
第30図 花沢A遺跡出土土器展開図(1)



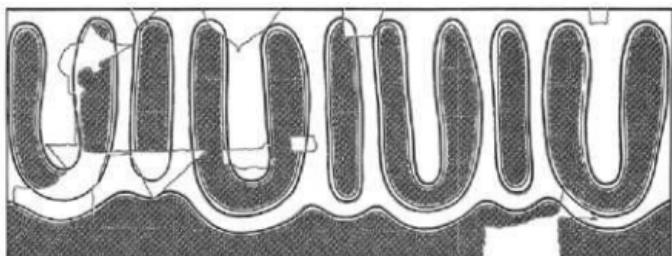
340



341

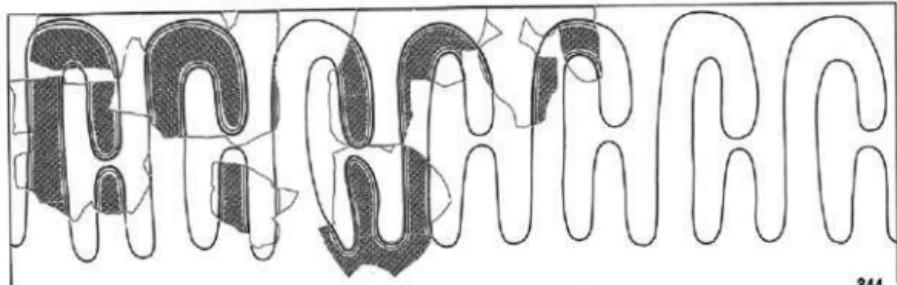


342

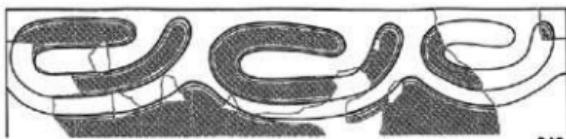


343

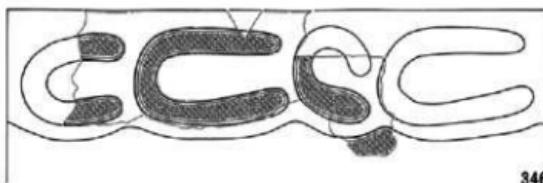
第31図 花沢A遺跡出土土器展開図(2)



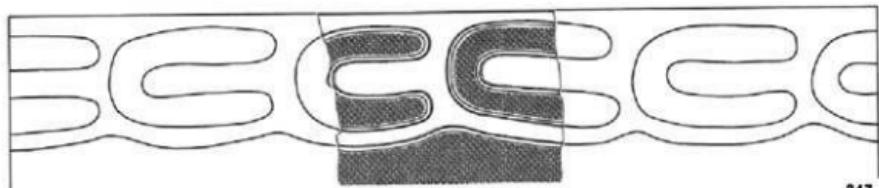
344



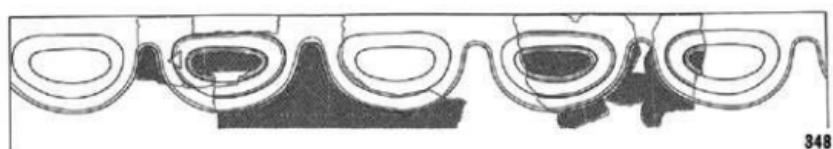
345



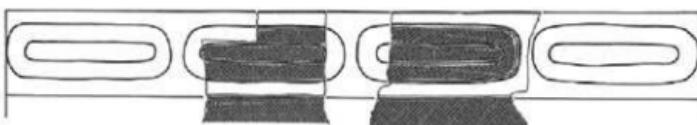
346



347

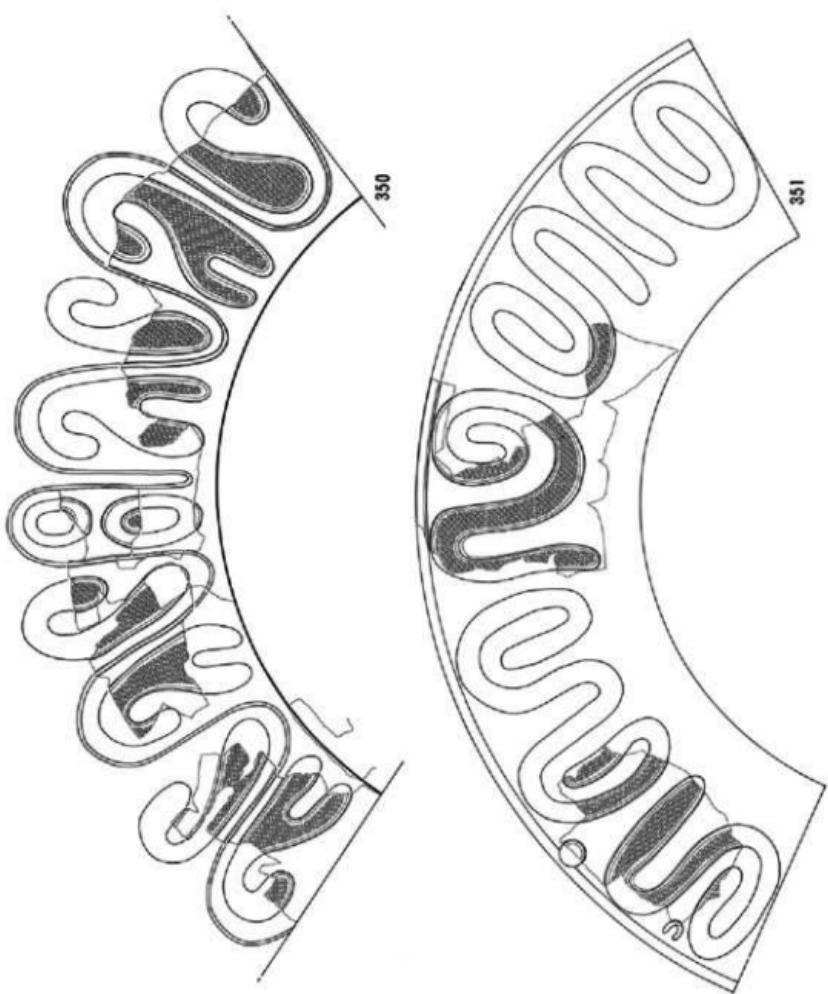


348

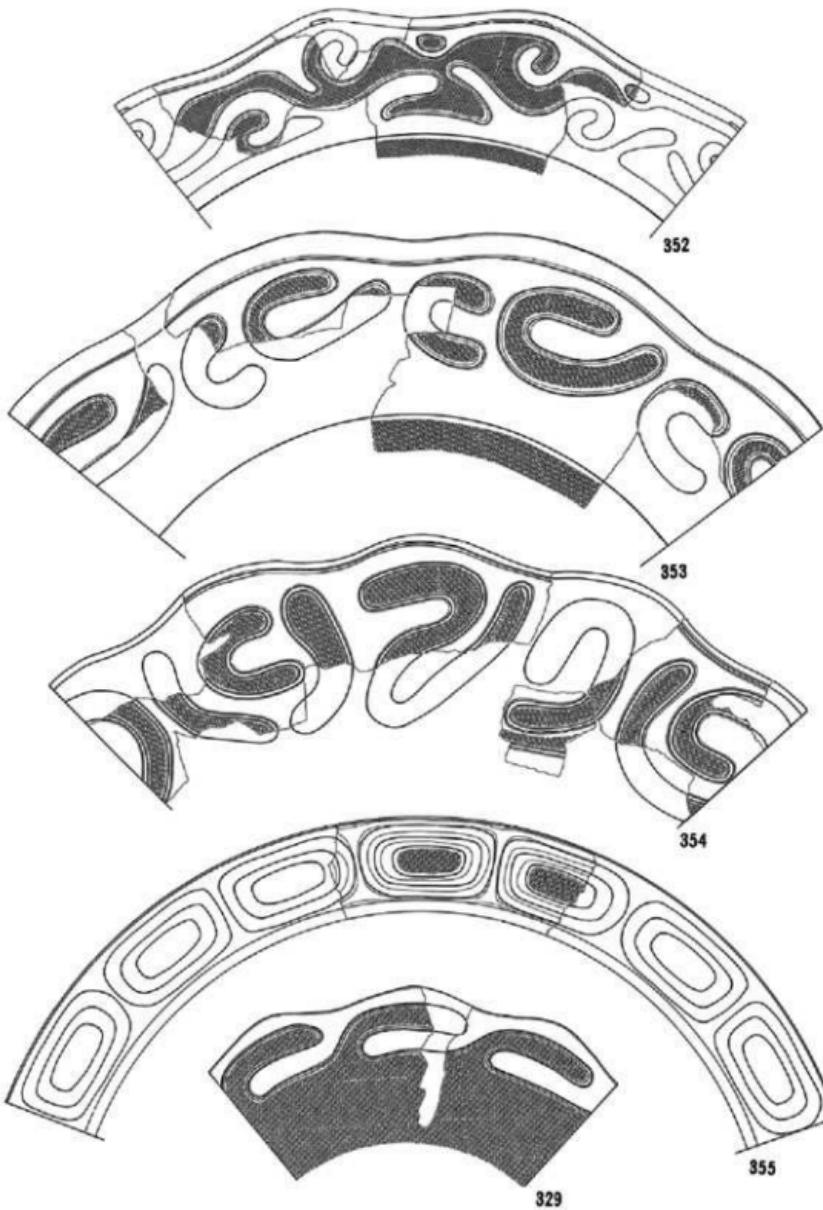


349

第32図 花沢A遺跡出土土器展開図(3)



第33図 花沢A遺跡出土土器展開図(4)



第34図 花沢A遺跡出土土器展開図(5)

## 第2表 花沢A遺跡出土土器觀察表

圃地番号	圃地番号	出土 地区	層位	文様表面性状	単位文様	色 調	胎 土	測定番号	圃地番号	出土 地区	層位	文様表面性状	単位文様	色 調	胎 土
121	第18回	HY27	F3	調整沈金文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 中量	181	第21回	HY27	F2	横沈文	側面の方筋文	明る黄褐色	石英砂 中量
122	第18回	HY27	F2	調整沈金文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 少量	182	第21回	HY27	F2	横模文	側面のC字	暗黄褐色	石英砂 中量
123	第18回	HY27	F3	調整沈金文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 少量	183	第21回	HY27	F2	L字单路	側面のC字	暗黄褐色	石英砂 少量
124	第18回	HY27	F1	調整沈金文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 中量	184	第21回	HY27	F3	L字本多条	側面のC字	暗黄褐色	石英砂 多量
125	第18回	HY27	F2	調整沈金文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 中量	185	第21回	HY27	F2	L字本多条	側面のC字	暗黄褐色	石英砂 少量
126	第18回	HY27	F1	調整沈金文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 多量	186	第21回	HY27	F2	無文	側面のC字	暗黄褐色	石英砂 微量
127	第18回	HY27	F2	調整沈金文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 中量	187	第21回	HY27	F3	L字本多条	側面のC字	暗黄褐色	石英砂 微量
128	第18回	HY27	F2	調整沈金文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 少量	188	第21回	HY27	F2	L字本多条	側面のC字	暗黄褐色	石英砂 中量
129	第18回	HY27	床面	調整沈金文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 多量	189	第21回	HY27	F3	L字 〔?〕	側面のC字	明る黄褐色	石英砂 少量
130	第18回	HY27	F2	調整沈金文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 中量	190	第21回	HY27	F2	L字本多条	側面のC字	暗黄褐色	石英砂 中量
131	第18回	HY27	F2	調整沈金文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 多量	191	第21回	HY27	F2	L字单路	側面のC字	暗黄褐色	石英砂 中量
132	第18回	HY27	F2	調整沈金文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 少量	192	第21回	HY27	F2	L字单路	側面のC字	暗黄褐色	石英砂 少量
133	第19回	HY27	F2	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 少量	193	第21回	HY27	F2	L字本多条	側面のC字	暗黄褐色	石英砂 微量
134	第19回	HY27	F1	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 少量	194	第21回	HY27	F2	L字本多条	側面のC字	暗黄褐色	石英砂 少量
135	第19回	HY27	F3	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 少量	195	第21回	HY27	F2	L字单路	暗黄褐色	石英砂 中量	
136	第19回	HY27	F2	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 中量	196	第21回	HY27	F1	L字单路	暗黄褐色	石英砂 少量	
137	第19回	HY27	F2	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 少量	197	第22回	HY27	F2	L字本多条	暗黄褐色	石英砂 微量	
138	第19回	HY27	F1E	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 微量	198	第22回	HY27	F3	L字路	暗黄褐色	石英砂 少量	
139	第19回	HY27	F3	陰模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 少量	199	第22回	HY27	床面	L字本多条	暗黄褐色	石英砂 少量	
140	第19回	HY27	F2	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 少量	200	第22回	HY27	陰模	L字本多条	明る黄褐色	石英砂 少量	
141	第19回	HY27	F3	陰模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 少量	201	第23回	HY27	床面	L字本多条	暗黄褐色	石英砂 多量	
142	第19回	HY27	F1	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 少量	202	第23回	HY27	床面	L字本多条	暗黄褐色	石英砂 少量	
143	第19回	HY27	F2	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 少量	203	第23回	DY17盛土部	F2	L字 〔?〕	暗黄褐色	石英砂 少量	
144	第19回	HY27	F2	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 多量	204	第24回	HY27	F2	L字本多条	明灰褐色	石英砂 少量	
145	第19回	HY27	F2	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 多量	205	第24回	HY27	F2	L字单路	暗黄褐色	石英砂 微量	
146	第19回	HY27	F3	陰模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 中量	206	第24回	HY27	F2	L字单路	暗黄褐色	石英砂 少量	
147	第19回	HY27	F2	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 少量	207	第24回	HY27	F1	無文	暗黄褐色	石英砂 少量	
148	第19回	HY27	F3	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 少量	208	第24回	HY27	F1	L字本多条	暗黄褐色	石英砂 中量	
149	第19回	HY27	F2	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 少量	209	第24回	HY27	F2	L字本多条	暗黄褐色	石英砂 中量	
150	第19回	HY27	F2	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 少量	210	第24回	HY27	F2	L字本多条	暗黄褐色	石英砂 中量	
151	第19回	HY27	F2	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 少量	211	第24回	HY27	F1	L字本多条	明灰褐色	石英砂 少量	
152	第19回	HY27	F2	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 中量	212	第24回	HY27	F2	L字本多条	暗黄褐色	石英砂 微量	
153	第20回	HY27	床面	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 多量	213	第24回	HY27	F2	L字本多条	暗黄褐色	石英砂 少量	
154	第20回	HY27	F3	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 中量	214	第24回	HY27	F2	L字本多条	暗黄褐色	石英砂 少量	
155	第20回	HY27	床面	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 少量	215	第24回	HY27	F3	L字本多条	暗黄褐色	石英砂 少量	
156	第20回	HY27	F1	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 少量	216	第24回	HY27	F2	L字本多条	暗黄褐色	石英砂 少量	
157	第20回	HY27	床面	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 少量	217	第24回	HY27	F2	L字本多条	明灰褐色	石英砂 中量	
158	第20回	HY27	F3	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 中量	218	第24回	HY27	F2	鐵器類	暗黄褐色	石英砂 中量	
159	第20回	HY27	床面	調整沈金文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 多量	219	第24回	LN10	F1	安新文	暗黄褐色	石英砂 少量	
160	第20回	HY27	F2	調整沈金文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 少量	220	第24回	LN10	F2	無文	暗黄褐色	石英砂 微量	
161	第20回	HY27	F1	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 少量	221	第24回	DY31	F2	半截竹管文	暗黄褐色	石英砂 少量	
162	第20回	HY27	F1	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 中量	222	第24回	G123-229	上	L字本多条	暗黄褐色	石英砂 多量	
163	第20回	HY27	F2	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 中量	223	第24回	HY27	F1	山形文	暗黄褐色	石英砂 少量	
164	第20回	HY27	F2	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 少量	224	第24回	HY27	F1	圓腹文	暗黄褐色	石英砂 少量	
165	第20回	HY27	F2	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 少量	225	第24回	HY27	F1	網曲波文	暗黄褐色	石英砂 少量	
166	第20回	HY27	F2	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 少量	226	第24回	G123-229	上	明快波文	暗黄褐色	石英砂 多量	
167	第20回	HY27	F1	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 中量	227	第24回	G123-229	上	半截竹管文	暗黄褐色	石英砂 少量	
168	第20回	HY27	F2	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 中量	228	第24回	HY27	F1	山形文	暗黄褐色	石英砂 多量	
169	第20回	HY27	F3	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 多量	229	第24回	HY27	F2	網曲波文	暗黄褐色	石英砂 少量	
170	第20回	HY27	F2	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 少量	230	第24回	DY30	F1	单截竹管	暗黄褐色	石英砂 少量	
171	第20回	HY27	F2	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 少量	231	第24回	G125-229	平行波文	暗黄褐色	石英砂 多量		
172	第21回	HY27	F2	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 少量	232	第24回	G125-229	上	明灰褐色	石英砂 少量		
173	第21回	HY27	F2	調整沈金文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 少量	233	第24回	DY31	F1	L字本多条	暗黄褐色	石英砂 少量	
174	第21回	HY27	F2	調整沈金文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 少量	234	第24回	G123-229	上	L字本多条	暗黄褐色	石英砂 多量	
175	第21回	HY27	F1	調整沈金文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 中量	235	第25回	HY27	F1	波文	暗黄褐色	石英砂 中量	
176	第21回	HY27	F1	調整沈金文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 中量	236	第25回	HY27	F1	沈堆文	暗黄褐色	石英砂 中量	
177	第21回	HY27	F2	調整沈金文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 少量	237	第25回	HY27	F1	沈波文	明灰褐色	石英砂 中量	
178	第21回	HY27	F2	調整沈金文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 少量	238	第25回	HY27	F1	沈瓣文	暗黄褐色	石英砂 少量	
179	第21回	HY27	F2	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 中量	239	第25回	HY27	F1	沈波文	暗黄褐色	石英砂 多量	
180	第21回	HY27	F1	後模文	背後のC字	暗黄褐色	石英砂 中量	240	第25回	HY27	F1	沈瓣文	暗黄褐色	石英砂 微量	

南L番号	標本番号	出土地 区	層位	文様表現方法	単位 文様	色 調	胎 土	通し番号	出土 検区	層位	文様表現方法	単位 文様	色 調	胎 土
241	新25回	H Y27	F1	多吹沈文	暗黄茶褐色	石英砂 少量	301	第27回	G132-227	II上	調整沈文	新25回	暗黄茶褐色	石英砂 微量
242	新25回	H Y27	F1	沈文	暗黄茶褐色	石英砂 少量	302	第27回	G132-227	II上	L R3多条	暗黄茶褐色	石英砂 微量	
243	新25回	H Y27	F1	沈文	明灰褐色	石英砂 中量	303	第27回	G132-227	II上	L R3多条	暗黄茶褐色	石英砂 微量	
244	新25回	H Y27	F1	沈文	暗灰褐色	石英砂 微量	304	第27回	G132-227	II上	R L4多条	暗黄茶褐色	石英砂 微量	
245	新25回	H Y27	F1	沈文	暗灰褐色	石英砂 少量	305	第27回	G132-225	II上	L 2路	暗黄茶褐色	石英砂 微量	
246	新25回	H Y27	F1	沈文	明灰褐色	石英砂 少量	306	第27回	G132-225	II上	R L4多条	暗灰褐色	石英砂 微量	
247	新25回	H Y27	F1	沈文	明灰褐色	石英砂 微量	307	第27回	G132-227	II上	L 单幅	暗灰褐色	石英砂 微量	
248	新25回	H Y27	F1	沈文	スティック文	暗灰褐色	石英砂 少量	308	第27回	G132-222	II上	L S多条	暗灰褐色	石英砂 微量
249	新25回	H Y27	F1	沈文	暗灰褐色	石英砂 少量	309	第27回	G132-227	II上	多吹沈文	明灰褐色	石英砂 少量	
250	新25回	H Y27	F1	沈文	明赤褐色	石英砂 微量	310	第27回	G132-225	II上	沈文	暗黄茶褐色	石英砂 微量	
251	新25回	H Y27	F2	豊臣秀吉生	明灰褐色	石英砂 微量	311	第27回	G132-227	II上	豊臣秀吉	暗黄茶褐色	石英砂 微量	
252	新25回	H Y27	F2	豊臣秀吉生	暗灰褐色	石英砂 少量	312	第27回	G132-225	II上	豊臣・秀利文	明灰褐色	石英砂 微量	
253	新25回	H Y27	F2	沈文	暗黄茶褐色	石英砂 少量	313	第27回	G132-229	II上	沈文	明灰褐色	石英砂 微量	
254	新25回	H Y27	F1	豊臣秀吉生	暗黄茶褐色	石英砂 少量	314	第27回	G132-227	II上	豊臣秀吉	暗灰褐色	石英砂 少量	
255	新25回	H Y27	F1	豊臣秀吉生	暗黄茶褐色	石英砂 少量	315	第27回	G132-227	II上	多吹沈文	暗灰褐色	石英砂 少量	
256	新25回	H Y27	F1	沈文	暗黄茶褐色	石英砂 少量	316	第27回	G132-227	II上	沈文	暗黄茶褐色	石英砂 少量	
257	新25回	H Y27	F1	豊臣秀吉生	暗黄茶褐色	石英砂 少量	317	第27回	G132-225	II上	豊臣秀吉	暗黄茶褐色	石英砂 少量	
258	新25回	H Y27	F1	豊臣秀吉生	暗黄茶褐色	石英砂 少量	318	第27回	G132-225	II上	豊臣・秀利文	暗黄茶褐色	石英砂 少量	
259	新25回	H Y27	F1	L R3多条	暗灰褐色	石英砂 少量	319	第27回	G132-227	II上	豊臣文	暗灰褐色	石英砂 少量	
260	新25回	H Y27	F1	豊臣秀吉生	明灰褐色	石英砂 少量	320	第27回	G132-229	II上	豊臣文	暗灰褐色	石英砂 少量	
261	新25回	H Y27	F1	豊臣秀吉生	暗灰褐色	石英砂 少量	321	第27回	G132-225	II上	豊臣文	暗灰褐色	石英砂 少量	
262	新25回	H Y27	F1	豊臣秀吉生	明灰褐色	石英砂 少量	322	第27回	G132-227	II上	豊臣・秀利文	暗灰褐色	石英砂 少量	
263	新25回	H Y27	F1	L 3多条	暗灰褐色	石英砂 少量	323	第27回	G132-225	II上	豊臣文	暗灰褐色	石英砂 少量	
264	新25回	H Y27	F1	L R 単幅	明灰褐色	石英砂 少量	324	第27回	G132-225	II上	豊臣文	暗灰褐色	石英砂 少量	
265	新25回	D Y29	調整沈文	新25回	暗黄茶褐色	石英砂 少量	325	第27回	G132-225	沈文	暗黄茶褐色	石英砂 少量		
266	新25回	D Y30	調整沈文	新25回	暗灰褐色	石英砂 少量	326	第27回	G132-225	沈文	暗灰褐色	石英砂 少量		
267	新25回	D Y30	調整沈文	新25回	暗灰褐色	石英砂 少量	327	第27回	G132-229	床面	豫文	暗灰褐色	石英砂 少量	
268	新25回	D Y30	調整沈文	新25回	暗灰褐色	石英砂 少量	328	第27回	G132-229	床面	調整沈文	暗灰褐色	石英砂 少量	
269	新25回	D Y31	調整沈文	新25回	暗黄茶褐色	石英砂 少量	329	第28回	G132-225	床面	調整沈文	暗灰褐色	石英砂 少量	
270	新25回	D Y31	調整沈文	新25回	明灰褐色	石英砂 少量	330	第28回	G132-227	F 5	豫文	暗灰褐色	石英砂 少量	
271	新25回	D Y31	調整沈文	新25回	暗黄茶褐色	石英砂 少量	331	第28回	G132-227	F 5	豫文	暗灰褐色	石英砂 少量	
272	新25回	L N10	R L3多条	暗灰褐色	石英砂 少量	332	第28回	G132-227	F 5	豫文	暗灰褐色	石英砂 少量		
273	新25回	L N10	R L4多条	明赤褐色	石英砂 少量	333	第28回	G132-227	F 1	豊利	豊利	石英砂 少量		
274	新25回	L N10	R L3多条	暗灰褐色	石英砂 少量	334	第28回	G132-227	F 1	豊利	暗灰褐色	石英砂 少量		
275	新25回	L N 9	R L3多条	暗灰褐色	石英砂 少量	335	第28回	G132-227	F 1	豊利	暗灰褐色	石英砂 少量		
276	新25回	L N10	調整沈文	新25回	暗黄茶褐色	石英砂 少量	336	第29回	G132-227	F 2	調整沈文	明赤褐色	石英砂 少量	
277	新25回	L N10	R L 単幅	暗灰褐色	石英砂 少量	337	第29回	G132-227	F 2	豫文	明赤褐色	石英砂 少量		
278	新25回	L N10	R L4多条	暗灰褐色	石英砂 少量	338	第29回	G132-227	F 2	豫文	暗灰褐色	石英砂 少量		
279	新25回	L N10	R L3多条	暗灰褐色	石英砂 少量	339	第30回	G132-227	F 2	豫文	暗灰褐色	石英砂 少量		
280	新25回	L N15	豊利	暗灰褐色	石英砂 少量	340	第31回	G132-227	F 2	豫文	暗灰褐色	石英砂 少量		
281	新25回	L N10	調整沈文	新25回	明赤褐色	石英砂 少量	341	第31回	G132-227	F 2	豫文	明赤褐色	石英砂 少量	
282	新25回	L N11	豊利	暗灰褐色	石英砂 少量	342	第31回	G132-227	F 2	豫文	暗灰褐色	石英砂 少量		
283	新25回	G134-226	II上	豊利文	暗灰褐色	石英砂 少量	343	第32回	G134-226	II上	調整沈文	暗灰褐色	石英砂 少量	
284	新25回	G134-226	II上	豫文	暗灰褐色	石英砂 少量	344	第32回	G134-226	II上	調整沈文	暗灰褐色	石英砂 少量	
285	新25回	G134-227	II上	調整沈文	豊利文	暗灰褐色	石英砂 少量	345	第32回	G134-227	II上	調整沈文	豊利文	暗灰褐色
286	新25回	G135-225	II上	調整沈文	C字状文	暗灰褐色	石英砂 少量	346	第32回	G135-225	II上	調整沈文	C字状文	暗灰褐色
287	新25回	G134-226	II上	豫文	C字状文	暗灰褐色	石英砂 少量	347	第32回	G134-226	II上	豫文	调整沈文	豊利文
288	新25回	G134-226	II上	調整沈文	C字状文	暗黄茶褐色	石英砂 少量	348	第32回	G134-226	II上	豫文	调整沈文	豊利文
289	新25回	G134-226	II上	豫文	C字状文	暗黄茶褐色	石英砂 少量	349	第32回	G134-226	II上	豫文	调整沈文	豊利文
290	新25回	G134-227	II上	豫文	C字状文	暗黄茶褐色	石英砂 少量	350	第33回	M Y17	豫文	调整沈文	C字状文	暗灰褐色
291	新25回	G132-226	II上	調整沈文	豊利文	暗灰褐色	石英砂 少量	351	第33回	G132-226	II上	豫文	调整沈文	豊利文
292	新25回	G134-226	II上	調整沈文	豊利文	暗灰褐色	石英砂 少量	352	第34回	D Y31	豫文	调整沈文	豊利文	暗灰褐色
293	新25回	G134-226	II上	調整沈文	豊利文	暗灰褐色	石英砂 少量	353	第34回	H Y27	豫文	调整沈文	豊利文	暗灰褐色
294	新25回	G135-225	II上	豫文	豊利文	暗灰褐色	石英砂 少量	354	第34回	H Y27	F 3	豫文	调整沈文	豊利文
295	新25回	F Y24	調整沈文	豊利文	暗灰褐色	石英砂 少量	355	第34回	H Y27	F 3	豫文	调整沈文	豊利文	
296	新25回	G134-226	II上	調整沈文	豊利文	暗灰褐色	石英砂 少量							
297	新25回	C155-225	II上	調整沈文	豊利文	暗灰褐色	石英砂 少量							
298	新25回	G132-226	II上	調整沈文	豊利文	暗灰褐色	石英砂 少量							
299	新25回	G134-228	II上	調整沈文	豊利文	暗灰褐色	石英砂 少量							
300	新25回	G132-227	II上	豫文	豊利文	暗灰褐色	石英砂 少量							

## 第5節 大檀A・大塚山遺跡

### I 遺跡の概要

両遺跡は隣接し、遺跡範囲の南西方向から北東に横断する旧道を境とし、北西部を大塚山遺跡、南東に大檀A遺跡がある。第35図に示した「1983年度調査区」は置賜考古学会が発掘調査を実施した地点を表示した。更に1984・85年の2箇年に亘って大檀B・C遺跡を山形県教育委員会が調査を実施している。大檀B・C遺跡は大檀A遺跡群の北東約450mの地点にあり、調査終了後は山形県立米沢興譲館高等学校の用地として利用されている。学校の建設に伴って、両遺跡の周辺一帯は次第に変貌しつつある。両遺跡の遺跡面積は約83,000m<sup>2</sup>である。

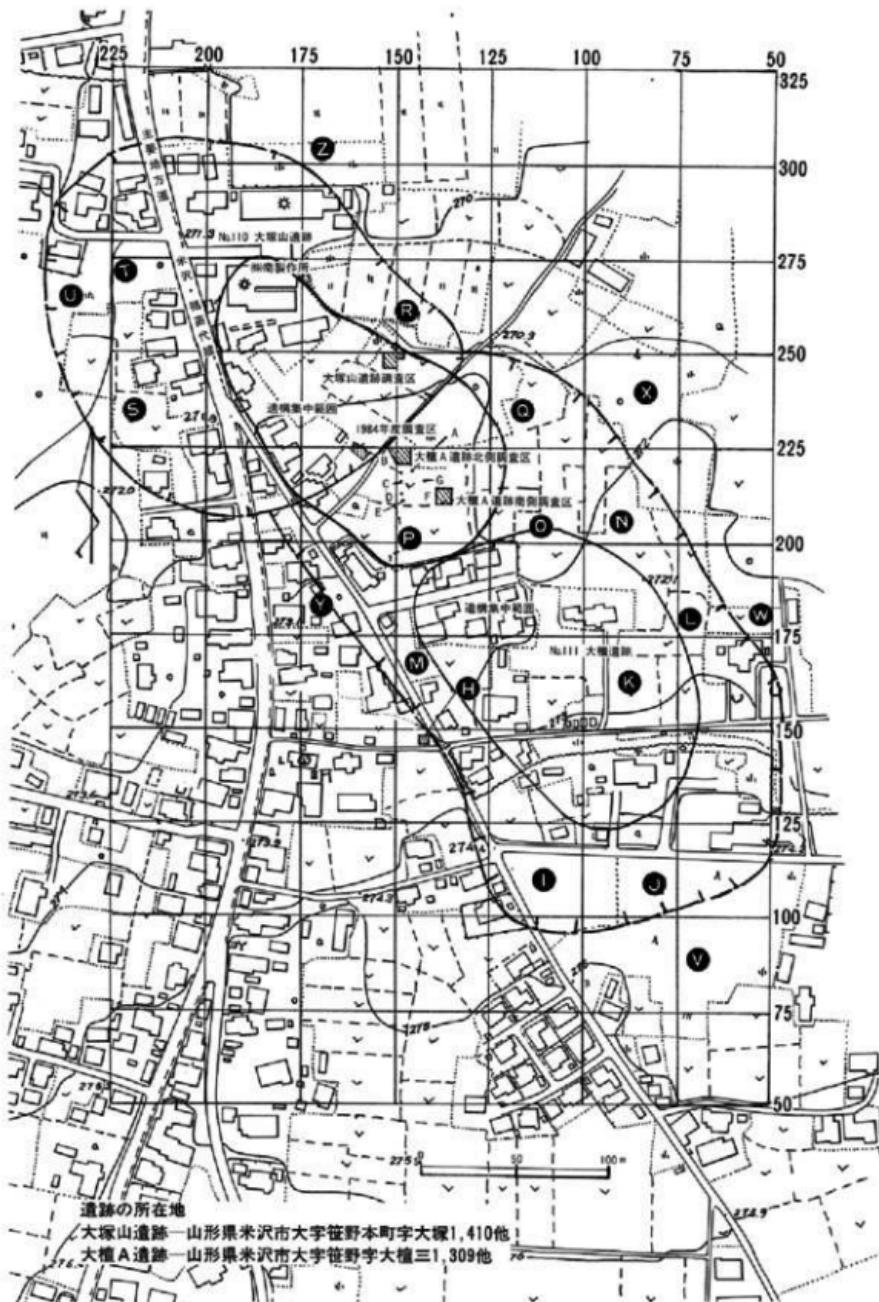
### II 試掘調査の経過 [第35図参照]

第35図で示す範囲、南北550m×東西350mに真北を基準としてグリッドを配した。A～Zの箇所を1m×1m範囲で掘り下げる。h地点は道路拡張に伴う試掘として幅1m、長さ5mのトレンチ掘りを実施する。試掘には1987年10月1日（グリッド作成）から10月4日までの日数を要した。1点破線で示した範囲が遺物の認められた範囲である。R・Q地点の遺物は出土状況から理解して、図示した大塚山調査区、大檀A調査区より土砂と共に運搬してきたものである。

S、T、U、I、J、L、Nの各地点は剝片が数点出土しているにすぎない。A～Fの試掘坑からは土器片、磨石、剝片が認められた。今回の試掘分布調査の結果から実線で示した範囲を遺構集中範囲と想定したい。更に遺跡の性格を明確にするため、大塚山遺跡に拡張区グリッド149～154～246～250の範囲を、大檀A遺跡ではグリッド146～152～224～228、136～140～206～210の調査区を配し精度を実施した。

### III 調査の経過

前述した3箇所の試掘調査区を昭和62年（1987）10月5日より開始する。最初に大塚山遺跡と大檀A遺跡のグリッド146～152～224～228の両地点を並行し、表土剥離を1日で終了し、更に精査、遺構確認と進行する。大塚山遺跡は段丘縁辺に位置するのが判明、第36図で示す様な北東部の落ち込みが確認された。本遺跡の表土は浅く平均15cmであった。遺構確認面は黄褐色土微砂質層であり、遺構は黒褐色土を有するので遺構の確認は容易にでき、竪穴式住居跡、土地が調査区全域に検出された。表土が浅いのにも関わらず、遺構が壊されていないのはトロロイモなどの深く耕作する農作物を栽培しなかった為である。調査期間は同年10月22日までの延べ18日間を要した。大檀A遺跡は黒褐色土の遺構確認面であり、大塚山遺跡と対照的に遺構の確認は容易ではなかった。更に、耕作により遺構が若干壊されているのが判明した。最も南側の調査区グリッド136～140～206～210の地点は、遺物は多量に認められたが遺構は確認できなかった。第42図に示した範囲にトレンチを設置し掘り下げた結果、縄文時代前期の遺物がII層下面より出土している。各調査区とも遺構は現況のまま埋め戻した。



第35図 大塚A大塚山道跡グリッド配図

#### IV 検出された遺構

大塚A・大塚山両遺跡調査区から検出された遺構は、竪穴式住居跡3棟を含む土壙群と土器埋設遺構合わせて36基が確認されている。ここでは大塚山遺跡、大塚A遺跡の2者に大別して個々に代表的な遺構についての概要を記す。

##### (1) 大塚山遺跡 【第36~40図参照】

約82m<sup>2</sup>の範囲から検出された遺構は、長径3.6m、短径3.5m、深さ10cm~15cmのHY1と平面形態が円形及び橢円形を示す土壙群26基、不明ピット9基の总数35基であった。先のHY1竪穴式住居跡は、住居跡中央部に深鉢形土器の上半分を切断した土器埋設炉を設置する長軸1.5m、石組部の最大幅1mを呈する馬蹄形、土器埋設石組複式炉を有し、袖部はほぼ南方にあり袖石を有することから形態的には古い特徴を示すものであるが、埋設土器の年代から想定すれば必ずしも一致しない。柱穴はTY1を頂点とし、TY2・3の3基が主柱穴であり、大きさは23cm~30cm、深さ46cm~52cmと平均的であった。柱穴間の長さもTY1~TY3までが2m、TY2~3の間1.7m、TY1~TY3の間が2mとなりほぼ正三角形を呈する。壁下にはP1~P16の16基の小ピット群が配列され、棚を有するピットと考えられる。本住居跡の内部及び西側壁に存在するDY12、20の両土壙は、層序確認においてDY12が住居跡廃絶後に構築したもの。DY20は住居跡構築時に埋め戻したことがわかった。

住居跡から検出された遺物は、第54図の271炉埋設土器1点の他、第51図233~236の4点他に土製品第51図237がある。石器は第48図版1、磨石2点、凹石1点、石刻1点が床面より出土している。遺物の总数は11点であった。

住居跡の年代は炉埋設土器から想定すれば、大木10式の新しい時期(大木10C)と推定される。次に土壙群は2つに大別され、袋状形態を示すもの21基、ポール状を示す浅い落ち込みの土壙5基、合わせて26基ある。この中でDY15内からMY1、MY2の2個の完形土器が直立した状態で検出されており、DY15の埋土の分析から判断すれば、土地の自然埋没した後に埋納したものとみられる。なお、各土壙の平面形態及び埋土の状況、大きさは第3表に示した通りである。ピットも同様である。

##### (2) 大塚A遺跡 【第41、42図参照】

大塚A遺跡の調査区から検出された遺構は重複する2基の竪穴式住居跡と土器埋設遺構3基である。竪穴式住居跡は両者とも調査区の西側に沿って認められたもので、隣接して農道が横断している事から全体の約半分しか確認できなかった。

HY2は平面形状がほぼ円形を呈す約4.3mの住居跡であり、ほぼ中央に袖部を北東に開く土器埋設石組複式炉が付随する。複式炉は碟を用いた特異な形状を有するもので、二重の石組部と灰原から成る。この様な複式炉は南原窯跡HY7、3号炉跡に類似している。全体的に、後世の

破壊を受けており灰原の一部が欠損しているが、長軸おおよそ1.7m、上段石組部最大幅約50cm、中央石組部最大幅約75cmとなる。柱穴は確認できなかった。

出土した遺物は第53図 265の注口土器1点、他に土器破片総数350点、内拓影印可能な土器17点を第43図の16、第46図の100、101、107、108、111、113、114、118、第47図140、第48図の148、152、153、156、157、159に示した。石器は剥片32点、磨石1点、凹石1点がある。年代的には大木10式の古い方から中頃にかけての（大木10a～10b式）と考えられる。

H Y 3 もほぼ円形状を示す住居跡と考えられる。先のH Y 2 の壁が深いこともあってH Y 3 を切る様な形態となるが、実際にはH Y 3 がH Y 2 を切って構築している。上部からの擾乱が著しい事もあって、炉跡の大半が破壊を強く受けている。但し、炉埋設土器と礫が存在することから想定し、先のH Y 1 と同様な土器埋設馬蹄形石組複式炉を有した公算が強い。住居跡の床面、西と東の壁上に第54図 270の深鉢形土器1点（M Y 5）と粗製土器1点（M Y 4）が付随する。この他に本住居跡から検出された遺物は土器片119点、内拓影印可能な土器11点を第46図 104、第47図 122、125、130、131、135、139、145、第48図 155、160、162に示した。石器は剥片38点、磨石5点、凹石5点、石皿1点の総数170点であった。最後に調査区中央東よりに粗製深鉢形土器の下半部を埋納したM Y 3 がある。なお、大槻東側調査区内からは第42図で示す様な出土状況であり、第45図のB群土器が全体的に検出されたのみで遺構は認められなかった。

#### V 検出された遺物

大塚山・大槻A両遺跡から検出された遺物は土器群を中心として前者の大塚山遺跡が総数1,241点、後者大槻A遺跡、総数6,272点の両遺跡合わせた最終数量は7,513点となる。これらの遺物は主に遺構内検出によるものが最も多く、他に遺構外検出と大槻A東拡張区は包含層であるため縄文中期中葉の遺物を中心に3,099点認められた。ここでは両遺跡の関連性を鑑み、一括して報告するが第4表には各出土地区毎に触れているので参照願うことにして、以下土器群と石器群について簡単に述べてみたい。

##### (1) 出土土器 【第43図～第54図】

両遺跡から検出された土器群は、大塚山遺跡が1,088点、大槻A遺跡が6,167点で総数7,255点を数える。これらの遺跡の大半は縄文中期末葉が最も多く、次いで縄文中期中葉、縄文前期初頭の順となり、僅かに縄文後期初頭と縄文晩期の土器群が含まれる。

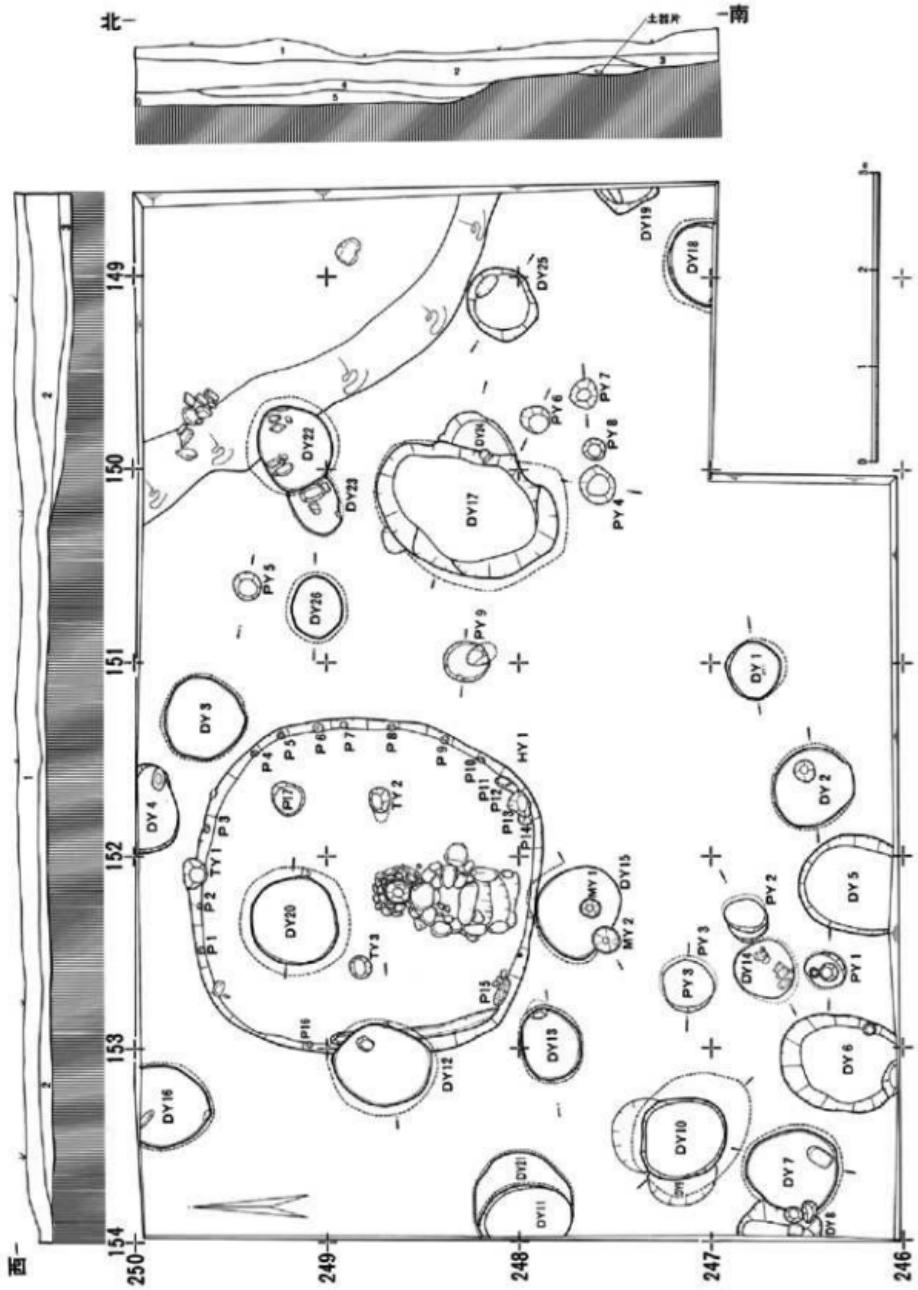
##### A群土器

縄文前期初頭に位置する土器群を一括した。大半が少破片であるため全体像を把握することは困難であるが、取えて区分をすれば撲糸压痕文を施したグループ、2。L R, R Lを3本～5本の多条縄文原体を主に羽状縄文を構成するグループ、3, 4, 6, 7, 8, 17, 169, 180, 184。L R, R Lを3本～5本の多条縄文原体を斜位に展開したグループ、5, 13, 15。結束縄

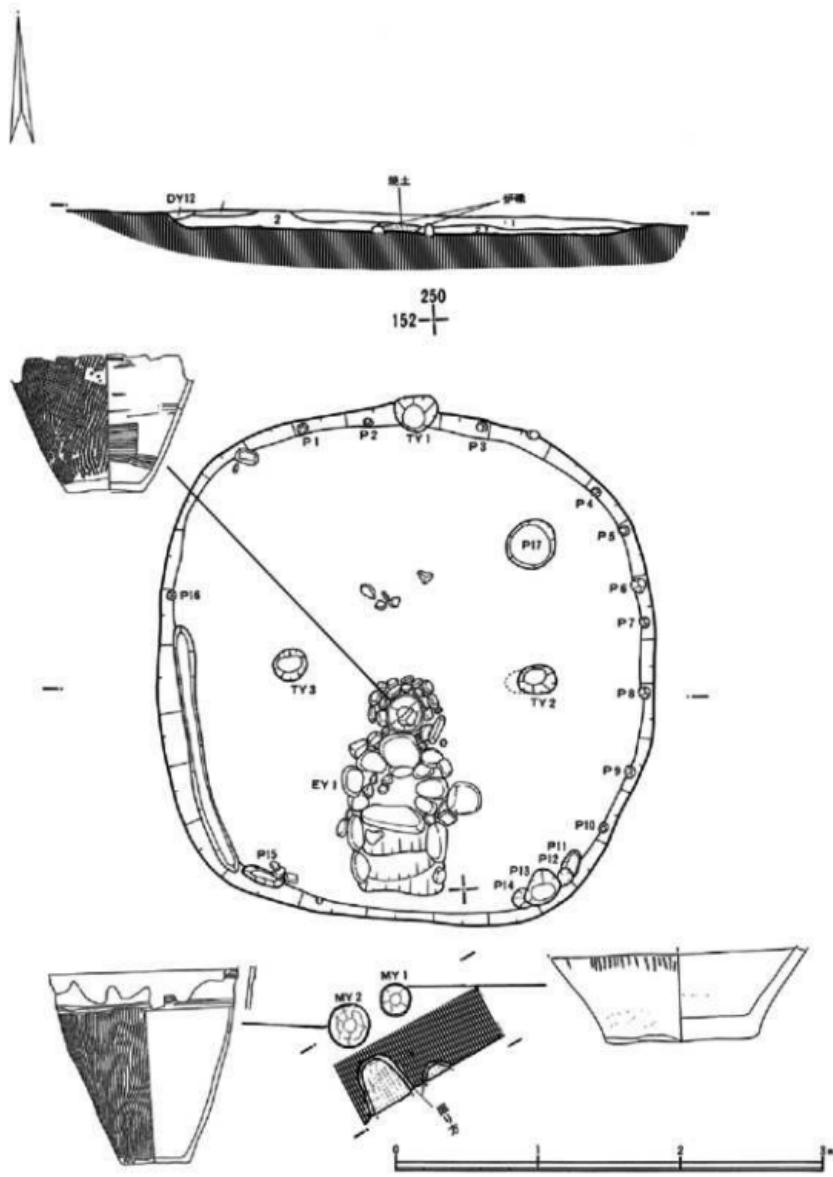
第3表 大塚山遺跡遺構計測表

A 自然堆積 B 人工堆積

遺構 No.	長径mm	短徑mm	深さmm	平面形	出土 遺物	層位	出土 遺物 案図番号
D Y 1	56	52	15	楕円	土器片16点 凹石1点	2枚 A	第49図165、166
D Y 2	88	73	24	不整円形	土器片29点 削片8点 磨石1点	7枚 A	第49図167、168
D Y 3	87	79	11	楕円	土器片6点	4枚 A	第49図169~172
D Y 4	91	40	19	楕円	土器片51点 削片2点	5枚 A	第49図177、178
D Y 5	110	96	9	楕円	削片1点	4枚 A	
D Y 6	121	100	26	長円形	削片5点	4枚 A	
D Y 7	96	85	19	楕円	土器片61点 石皿1点	5枚 A	第49図173、174
D Y 8	86	28	35	不整円形	土器片4点 削片11点	4枚 A	第49図179、181、182
D Y 9	67	—	5	楕円形	土器片3点 削片1点	1枚 A	第49図183
D Y 10	96	80	55	楕円	土器片97点 削片6点 磨石2点	12枚 A	第49図184~196
D Y 11	90	54	50	楕円	土器片12点	12枚 A	第50図197、198
D Y 12	120	81	46	不整円形		9枚 A	
D Y 13	75	58	14	楕円		3枚 A	
D Y 14	62	61	17	楕円	土器片18点 削片1点 磨石1点	4枚 A	第54図272
D Y 15	93	82	32	楕円	土器片45点	8枚 A	第50図199、202、203
D Y 16	82	73	25	楕円	土器片16点	8枚 A	第50図200、201
D Y 17	195	129	37	不整円形	土器片263点 削片6点 凹石1点 磨石1点	14枚 B	第50図204、205、207、第52図262
D Y 18	86	46	51	楕円	土器片50点	9枚 A	第50図208、第51図232
D Y 19	68	—	20	不整円形		3枚 A	
D Y 20	91	88	37	楕円	土器片4点	11枚 B	第50図209
D Y 21	102	—	15	円形	土器片8点	3枚 A	第50図210、211
D Y 22	85	—	44	楕円形	土器片233点 削片9点 磨石3点	11枚 A	第50図214~221
D Y 23	—	47	16	楕円形	土器片1点 削片1点	2枚 A	
D Y 24	73	—	5	不整円形	土器片98点 削片1点	1枚 A	第51図222~231
D Y 25	74	68	7	不整円形		1枚 A	
D Y 26	58	52	15	楕円	土器片21点 削片2点 凹石1点	4枚 A	
P Y 1	42	37	23	楕円		2枚 A	
P Y 2	46	45	25	不整円形		3枚 A	
P Y 3	55	54	38	楕円	土器片23点	8枚 A	
P Y 4	40	36	34	不整円形		5枚 A	
P Y 5	29	28	22	楕円		2枚 A	
P Y 6	31	27	22	楕円		3枚 A	
P Y 7	31	27	26	不整円形		4枚 A	
P Y 8	24	21	5	楕円	凹石1点	2枚 A	
P Y 9	46	41	14	楕円	土器片1点	2枚 A	



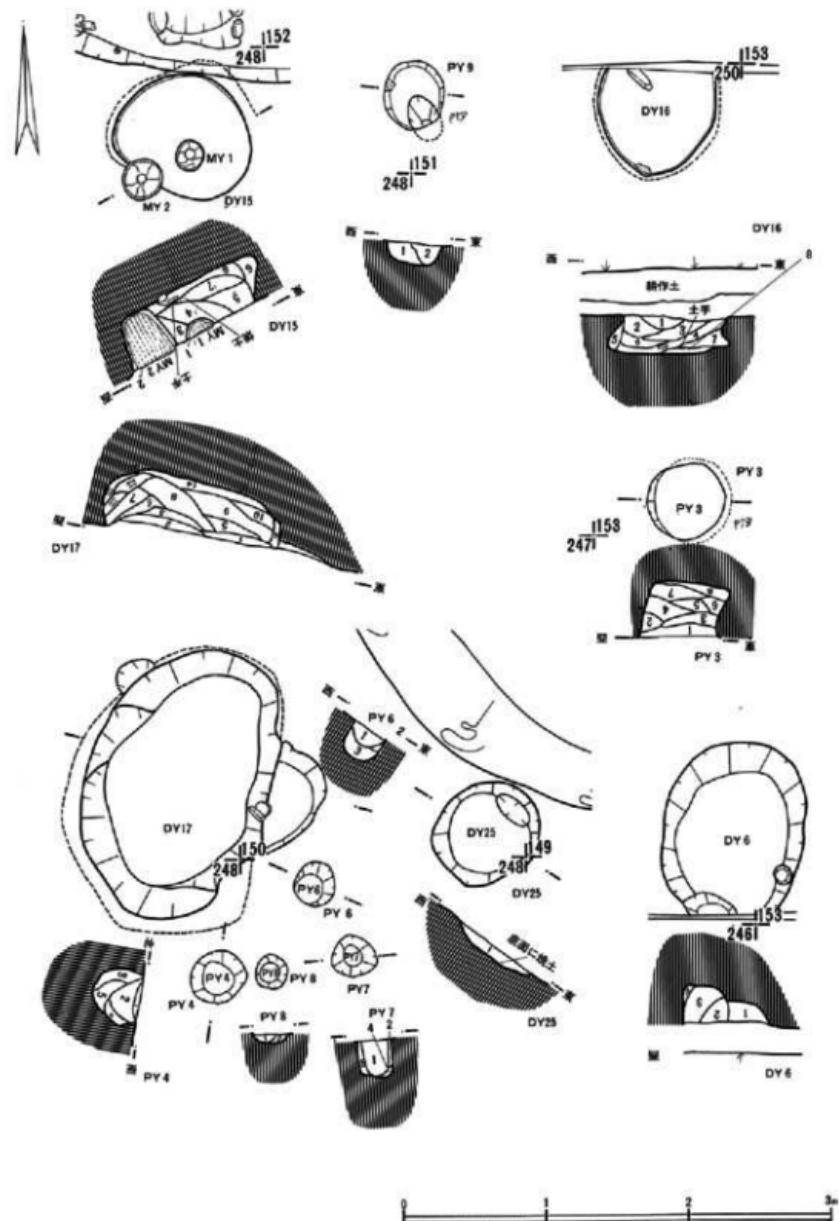
第36図 大塚山遺跡遺構全体図



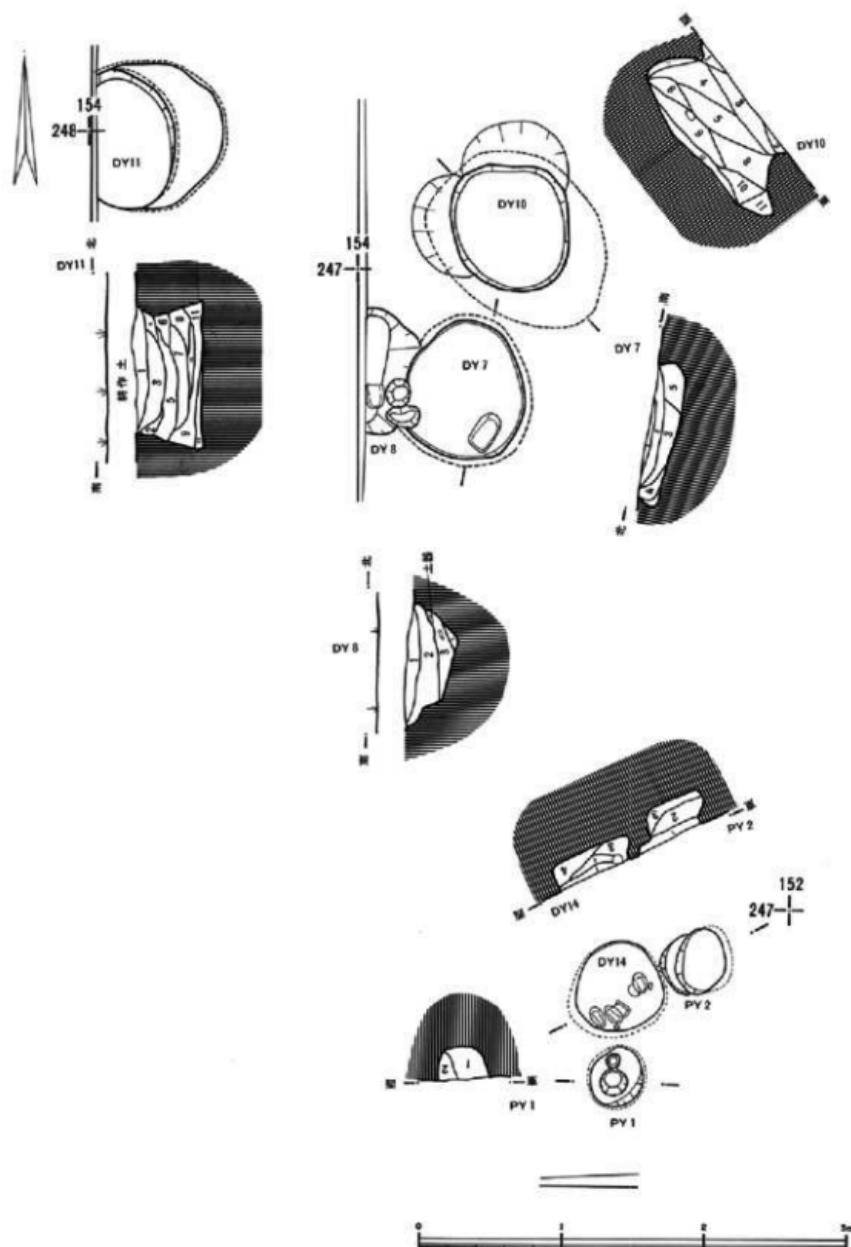
第37図 大塚山遺跡HY 1平面図



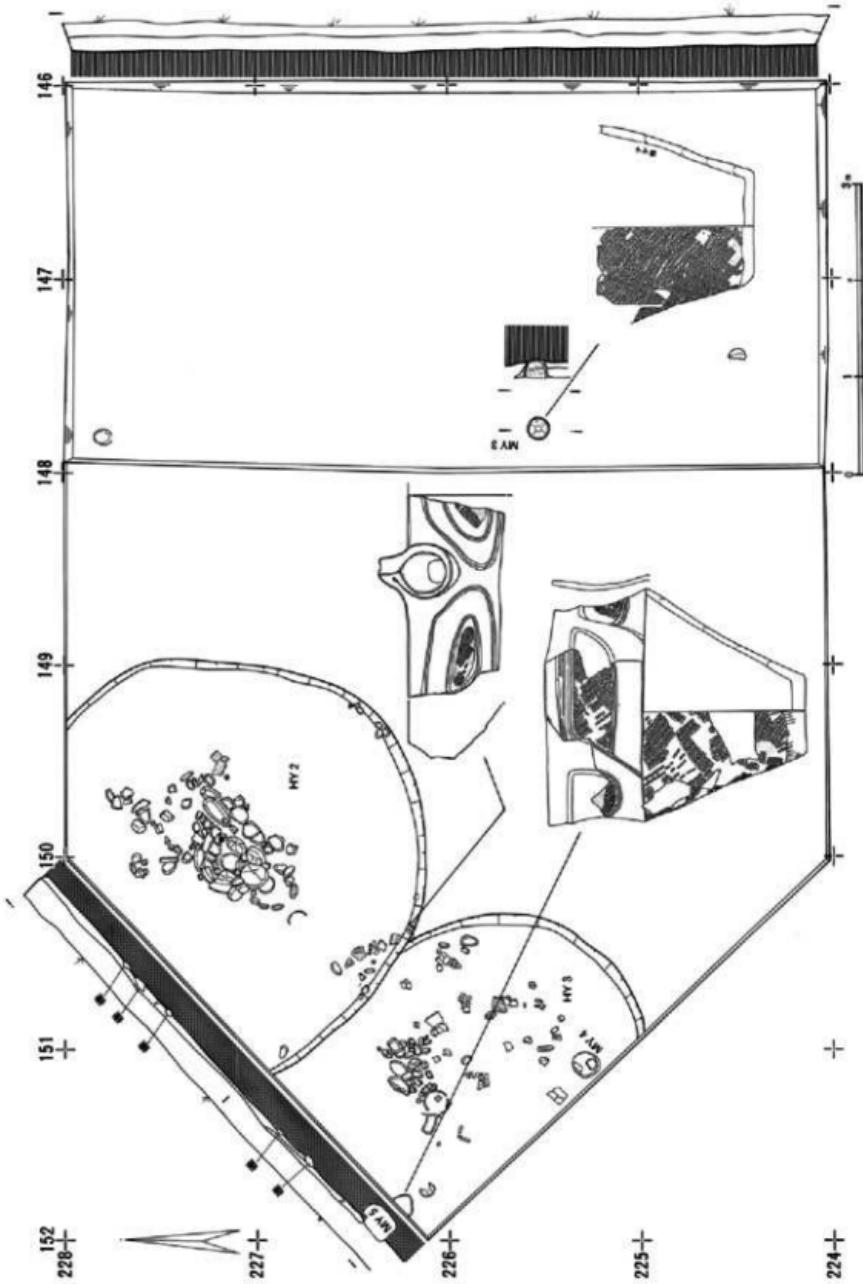
第38図 大塚山遺跡土壙セクション平面図(1)



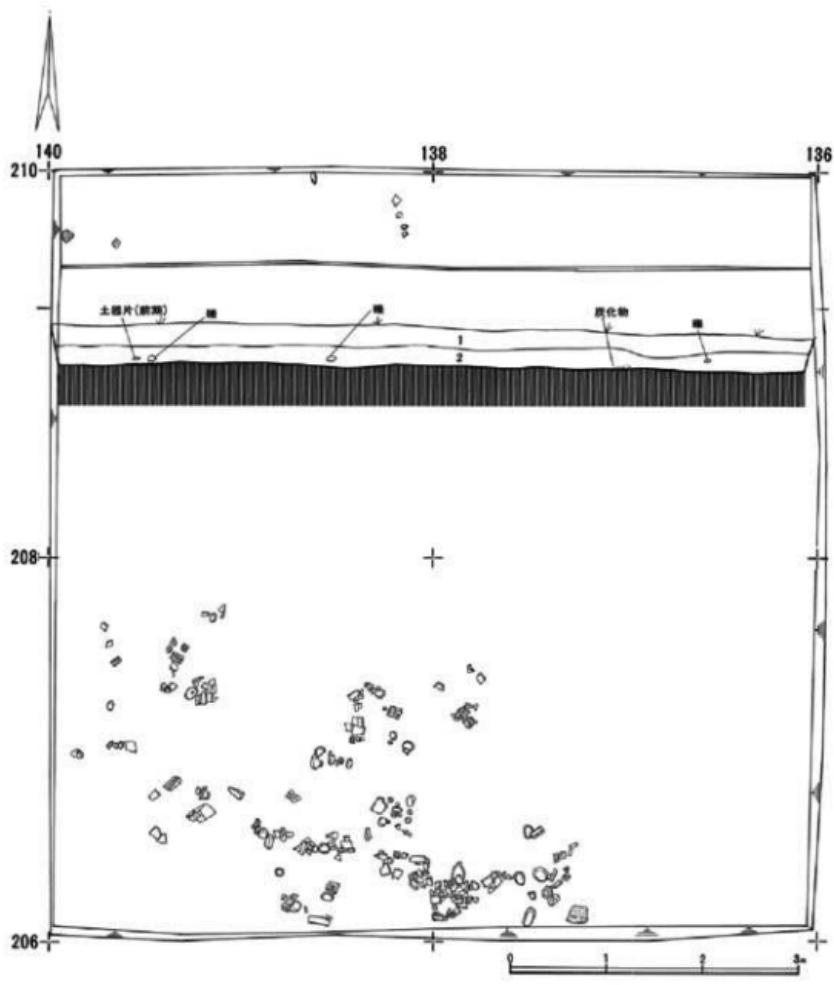
第39図 大塚山遺跡土壤セクション平面図(2)



第40図 大塚山遺跡土壌セクション平面図(3)



第41図 大棟A遺跡HY 2, 3平面図



#### 第42図 大檀A遺跡G137~140-207~210調査区遺物出土状況実測図

文を横位に展開させたグループ、9, 10, 12, 14, 18, 20, 21, 23, 24, 204, 218。ループ文を主体にしたグループ、11, 167, 210, 222, 223。組み紐縄文を主体にしたグループ、19, 22, 25, 26, 224となる。これらはループ文、組み紐縄文、羽状縄文の特徴から想定すれば、関東地方の関山式併行及び当地の松原遺跡に位置するものと考えられる。

#### B群土器

縄文中期中葉の土器群を一括する。文様表出技法、器形等からB1類～B4類に細別した。

##### B1類土器 [27～30, 48, 80～88, 91, 173, 212]

口縁部が幾分内傾気味に外反する深鉢形及び口縁部が著しく内曲するキャリバー形の両者に分けられる。文様を表出する方法として、棒状工具による沈線文やソウメン状の粘土紐を鋸歯状及び渦巻状に施したものや沈線を加えて交互突刺を用いるもの等があり、本群の中では最も数が少なかった。これらは主に大木8a式に併行するものとみられる。

##### B2類土器 [68～77, 186]

先のB1類と同様に、3本単位の粘土紐と直行する沈線文の組み合わせによって文様を構成するグループである。69～72の土器群には粘土紐を貼り付け上端を調整する、所謂、調整貼付文を有するものも含まれ、粘土紐の幅もB1類の様な2～3mm平均から3～4mm平均と広くなる特徴がある。粘土紐と沈線文を平走した分岐点には渦巻文や「の」字状文がメルクマールとして発達し、後述するB3類の前段階となるものと考えられる。器形は全てキャリバー形を有し、地文は3本多条のLR, RLが主体的であり、一部複節を呈するものも存在する。以上のことから、大木8a式の中でも最も新しく大木8b式に移行する段階の土器群と推測したい。

##### B3類土器 [40～44, 46, 89, 90, 92, 174, 176, 185, 230, 266]

本類は沈線文を主体とする土器群を一括した。B2類と同様に3本単位の沈線を用いて胴部文様帶構成を配する土器群であり、沈線の先端渦巻文を描くのを特徴としている。口縁部を貼り付けた両端渦巻文や「の」字状文、渦巻文を主要文様帶として胴部文様帶と口縁部文様帶を明確に区画している。これらは大木9b式の仲間に位置するものとみられる。

##### B4類土器 [31～39, 45, 47, 49～54, 62～67, 78, 79, 217, 225, 227, 228, 234]

最後のB4類土器は、第46図版に示した様な調整粘土貼付文と調整沈線文を併用した文様を表出するグループであり、これまでの2単位の粘土紐及び沈線部の表出が目立つ様になり、口縁部文様帶に発達させた「の」字状文や渦巻文を誇張するのが特徴となる。胴部文様帶と口縁部文様帶の空間となる頸部には無文帶を置き、明確に区画させるのも本類の特徴と言えよう。この類は大木8b式の中心的な存在となる。

#### C類土器

縄文中期後葉期の土器を一括した。単位文様が明確でない以上、文様表出技法を中心に分類す

ると下記の6類に分けられる。

C 1 類土器 [55~61, 122, 171, 214]

粗描きの無調整沈線文を主体にするグループで、横位に展開する「C」字状文を隣接させることによつて単位文様が簡素化され、横位の楕円文及び半楕円文を中央に残し一端の沈線が「P」字状や55aや55cと229の様に横位の「U」字状沈線が楕円文を切つて横位に展開するものが中心となる。他に60の様に単位文内に円形突刺を有するものや、61a~61dの様に縦位の楕円文を密に配するものも含まれる。殊に61は一見、大木9b式に近い文様構成を有するが、鋭利な工具で細く描きあげた単位文内部に充填繩文を加える等は、寧ろ後期的保存に近い。これらは大木10式の仲間でも最も新しいグループに位置づけられよう。

C 2 類土器 [97, 149, 215, 232, 233, 257]

C 1 類とは対照的に太状の沈線及び凹線を用いて文様を構成するグループであり、横位の変形「C」字状文、「C」字状文を展開するものと考えられる。大木9b式に併用するものである。

C 3 類土器 [93, 105]

隆帯文を特徴とするグループであり、「C」字状文を横位に展開するものと見られる。

C 4 類土器 [96, 98, 100, 102, 104, 106, 112, 117, 120, 123~134, 137, 140, 142~147, 165, 168, 178, 179, 181~183, 188, 189, 193, 197, 199, 201, 206, 208, 216, 220, 226, 231, 244~251, 258, 261, 265]

隆帯文及び棱線文で文様を構成するグループを一括した。文様構成はおおよそ2種類に区別され、226, 231の様に口縁部に「の」字状文、「C」字状文系を展開する112等がある。

C 5 類土器 [95, 99, 103, 107~111, 113, 135, 136, 138, 139, 141, 191, 202, 229, 255, 270]

稜沈文、稜帶沈文で文様を構成するグループである。基本的には先のC 4 類と文様構成での相異はほとんどなく、「の」字状文、「C」字状文、変形「C」字状文等によって文様を表出している。この中で唯一の完形土器、第54図270は簡素化した「C」字状文を横位に展開しているものである。

C 6 類土器 [94, 101, 114~116, 118, 119, 121, 148, 150~164, 166, 170, 172, 175, 177, 187, 190, 192, 194~196, 198, 200, 205, 207, 209, 211, 213, 235, 236, 252~254, 256, 259, 260, 262~264, 269, 271]

粗製土器を一括した。この粗製土器の中には口縁部が外反するものを基本とするもの、115の様に内反するものも僅かに含まれる。

以上、C 1 類~C 6 類まで触れてきたが、地文となる繩文原体は3・4本の前々多条の繩を展開するものと、同じく直前段多条の2段の繩を展開するものが最も多く、次いでL・Rによる撲

糸文を縦に展開するグループも含まれている。器形は粗製土器が内外反する深鉢形土器、鉢形土器を中心とし、C1類～C5類までの所謂精製土器は、外反する深鉢とやや内傾気味に外反する二者の深鉢形土器の他、キャリバー形や浅鉢形、夔形の一部も含まれている。文様表出技法は、稜線文系、無調整の沈線文・調整沈線文等が中心となるが、圧倒的に稜線文系を主にした特徴がみられ、単位文様内の地文は全て充填縄文によるものが主流となっている。

#### その他の土器群〔第50図 203、 221 第54図 272〕

縄文後期に位置づけられる土器群として、202、272がある。後者は口唇部と突起部、更に口縁部に把手を有する器形で、突起部及び把手部の下半部中央に貫通の小穴を施す。把手部両縁辺に沿って2条の鎖状文が鋭利な工具により浅い細線で描かれている。縄文後期初頭と想定したい。203は縄文晩期に位置する土器片で、小形土器の口縁部片であり、厚さは薄い。

#### 土製品〔第51図 237～243、第53図 267～268〕

267の土偶、268の匙状土製品各1点、円板状土製品237～243、7点の総数9点が検出されている。G136～140、206～210調査区II層包含層より出土した土偶、匙状土製品は大木8b式に併行する。土偶は上半部が欠損した板状の形状を呈し、側面及び腹面、背面に細い刻線が認められ、更に、腹面上端部には粘土を円形に貼付し中心に円形に巡ぐる刻線を施す。円板状土製品は縁辺を研磨して円形状に加工したもので、3～4cmと同じ様な大きさのもので占められる。

#### (2)出土石器〔第48図版〕

調査区の全域に認められ、出土総数は492点であった。うちフレークは333点、チップは100点、凹石24点、磨石30点、石皿3点、石刻2点となる。フレークの中で完形石器については第48図版に写真で示した。器種別に分類し以下に説明したい。

I群石器—石鎌〔1～3〕で3点認められた。1はHY1のP17から出土しており、全面に焼成を受けてハジケ面を有す。2・3は、大榎A遺跡東南調査区II層出土である。

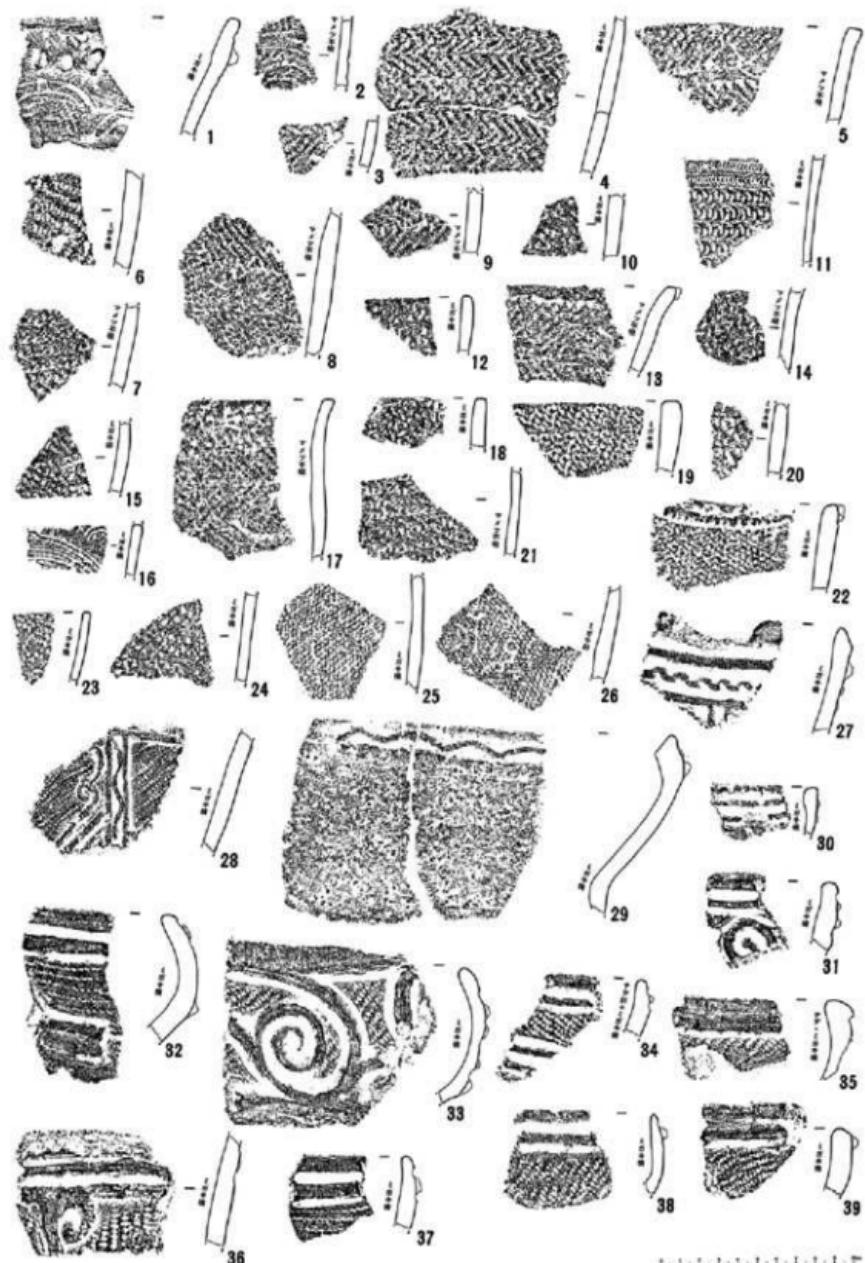
II群石器—石錐〔4・5〕の2点出土し、作業縁辺は両面調整により整形されている。

IV群石器—石匙〔6～11〕6点あり、横形の6を除き、他は縫形で占められている。9は両面調整により整形されているが、他は片面調整である。全て大榎A遺跡の出土であった。

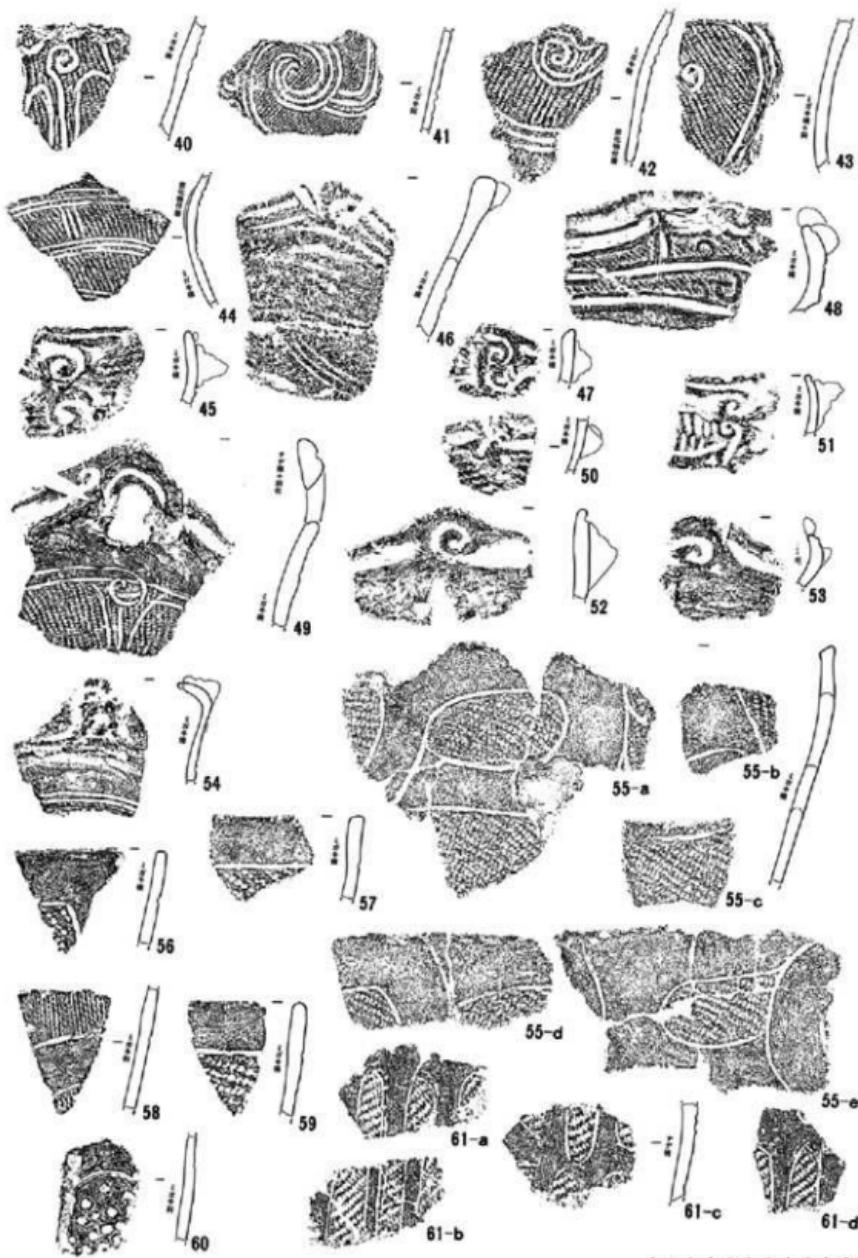
V群石器—石箇状石器、〔12～18〕の7点出土している。刃部は丸味を帯びる形状が殆どであるが、基部は平坦なものが13、14、16、湾曲を呈すものが15、やや尖状を有すものが12、17、18の3タイプ認められる。12、14、16は片面調整、13、15、17、18が両面調整である。

VII群石器—スクレーパー類を一括した。19～25の7点がある。形状は、尖状を有す剥離調整でやや弓形に内曲する形態が多い。21、23を除き片面調整により整形されている。

X群石器—磨製石斧、26の他にもう1点出土しており、2点ともにHY2の南側から出土している。26は刃部が欠損している。石材は緑色粘板岩を使用し、全面を研磨し整形している。



第43図 大權A遺跡出土土器拓影図(1)



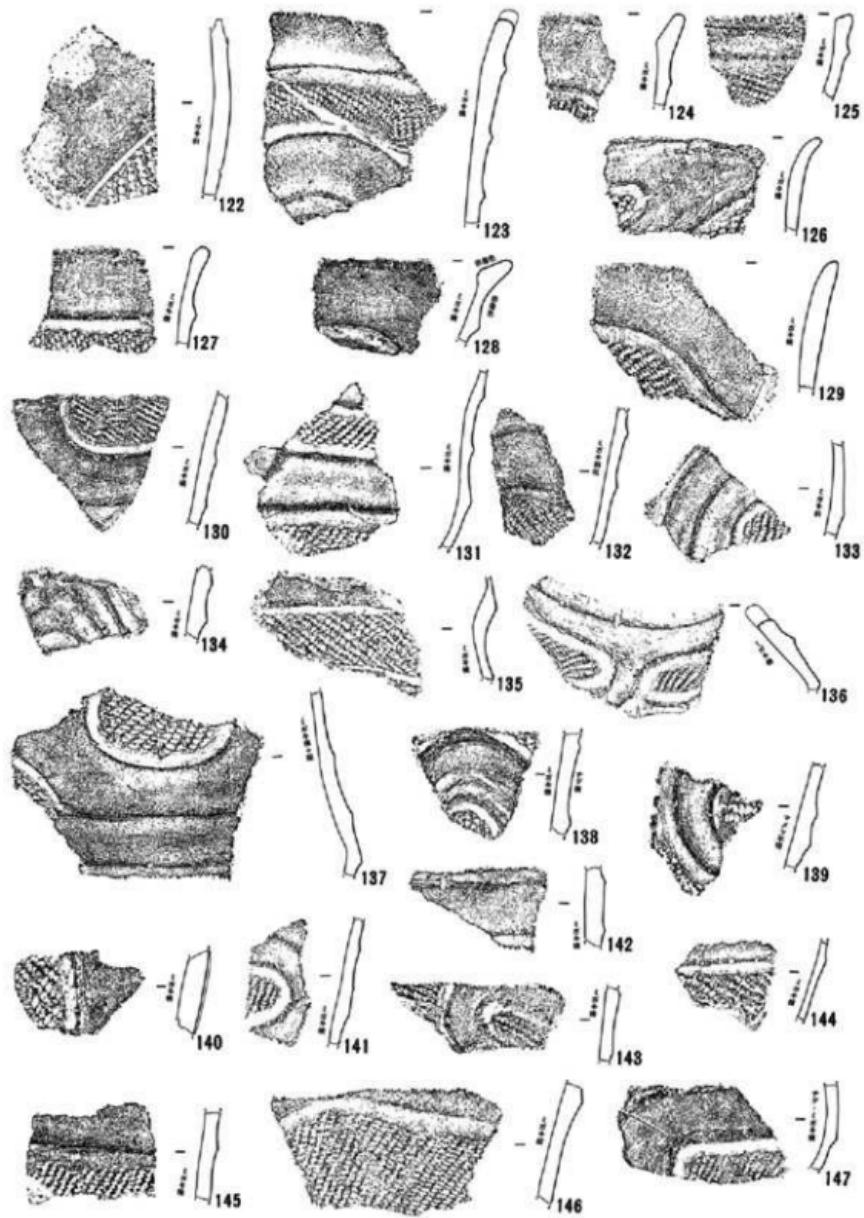
第44図 大植A遺跡出土土器拓影図(2)



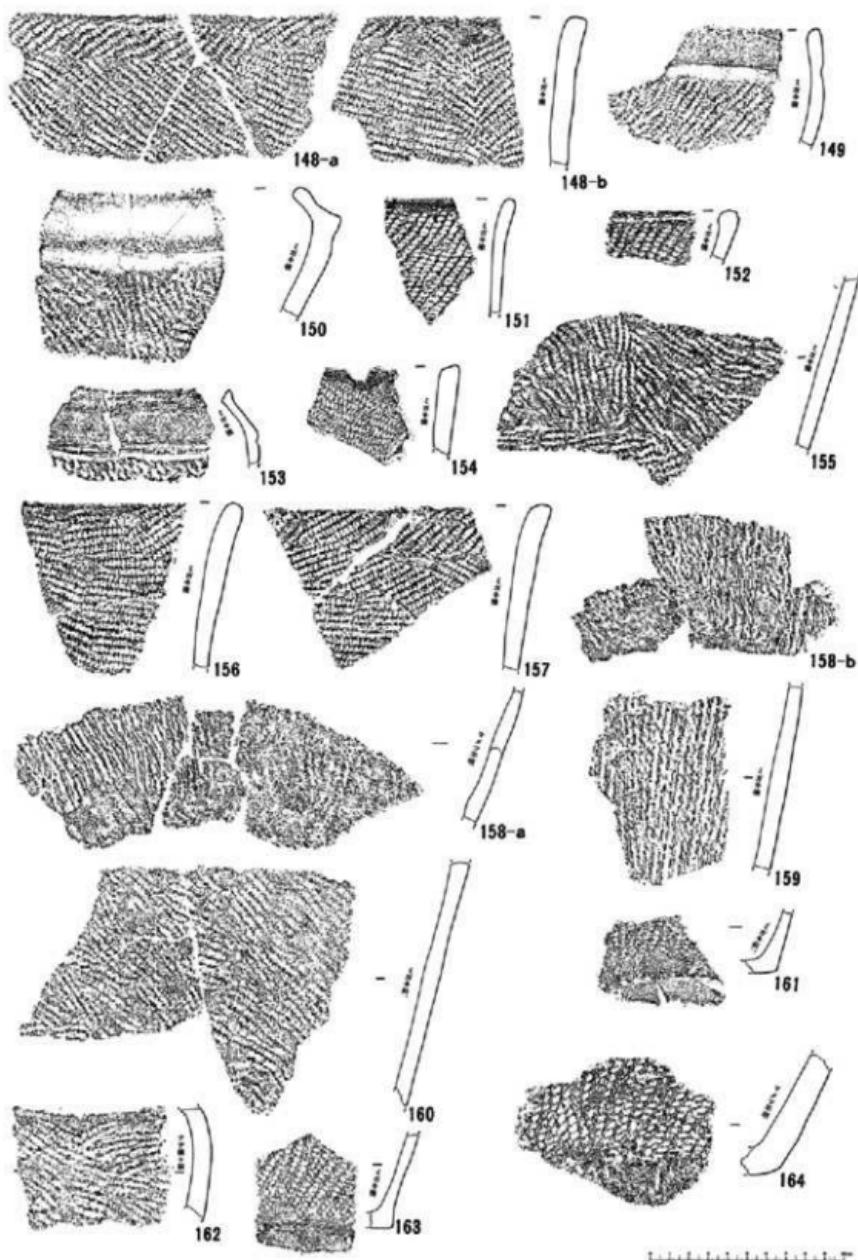
第45図 大權 A 造跡出土土器拓影図(3)



第46図 大槻A遺跡出土土器拓影図(4)



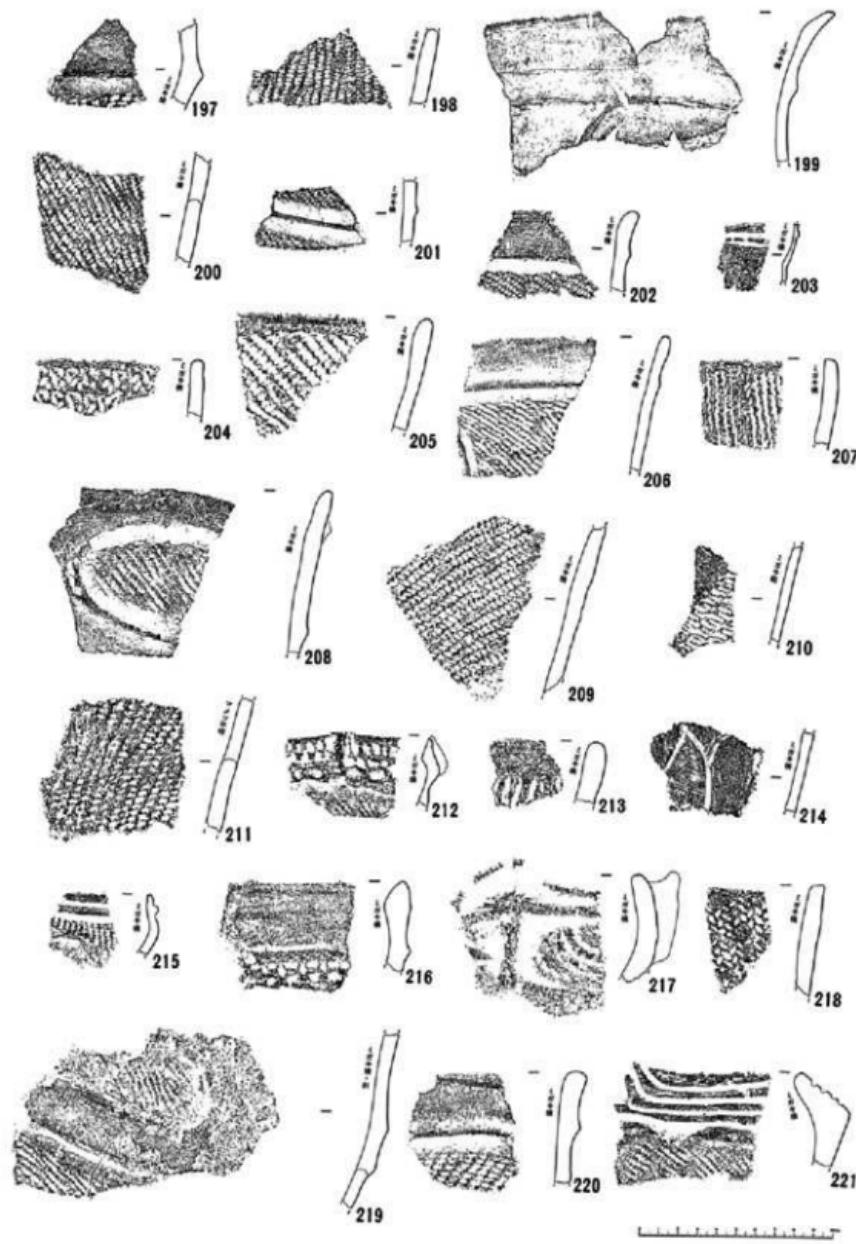
第47図 大槻A遺跡出土土器拓影図(5)



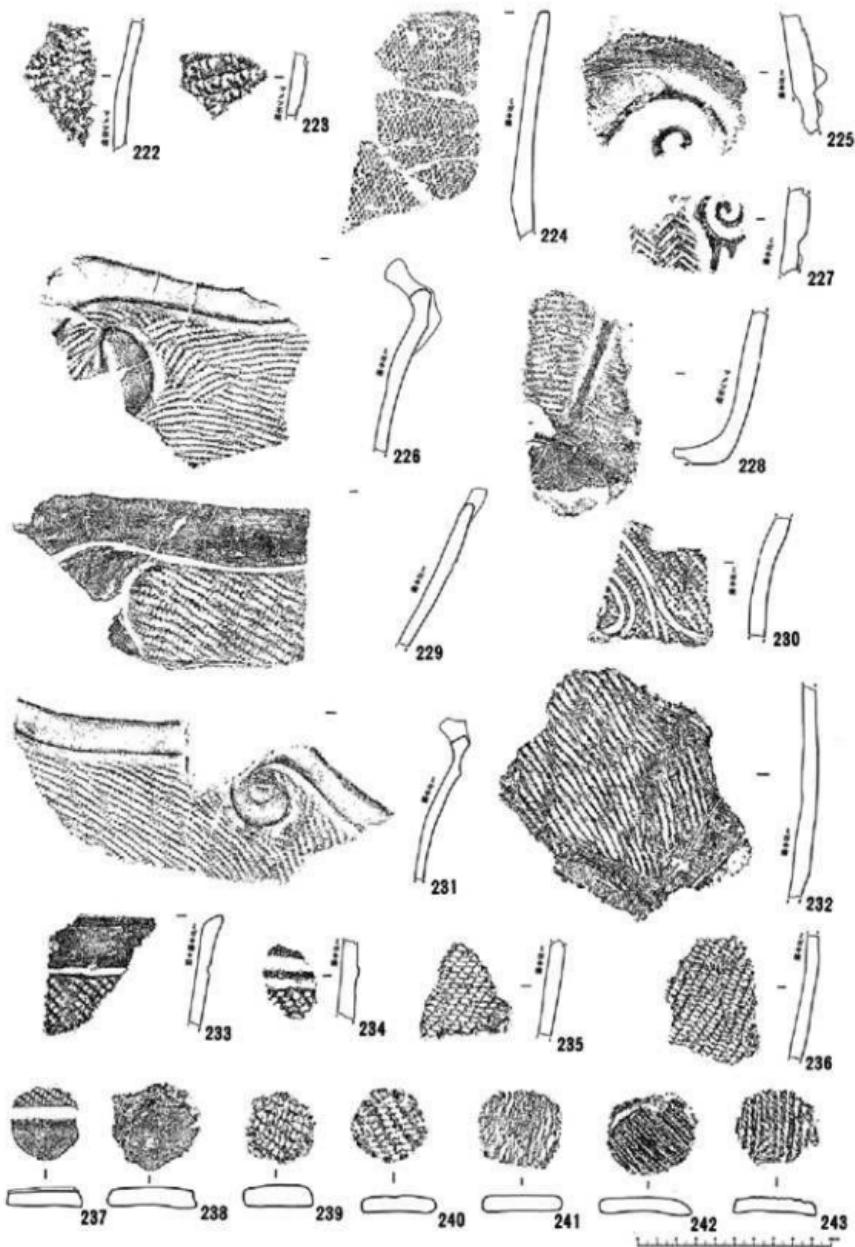
第48図 大槻A遺跡出土土器拓影図(6)



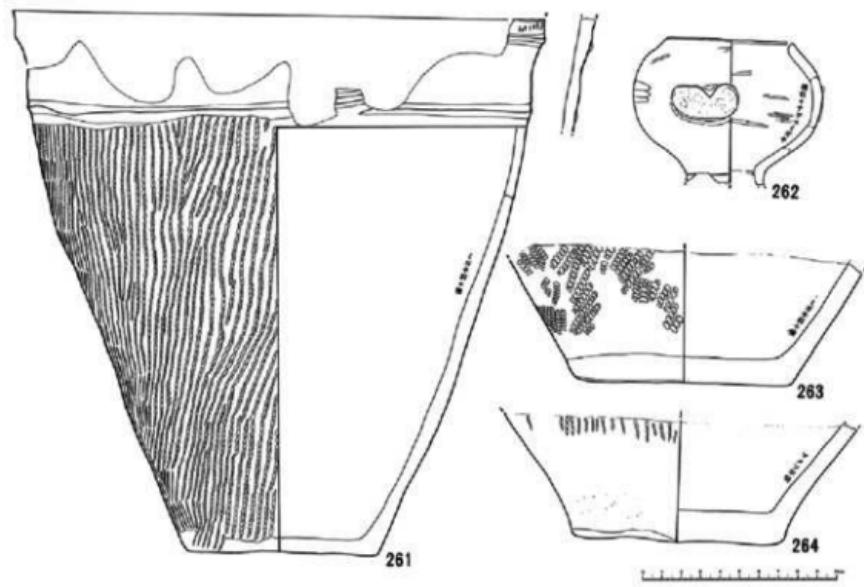
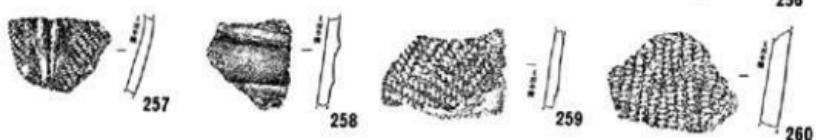
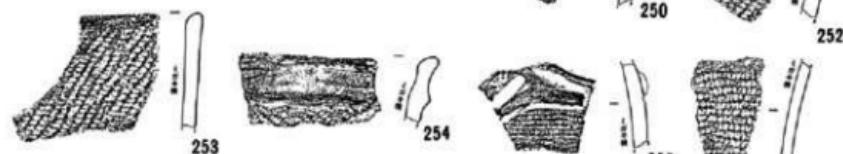
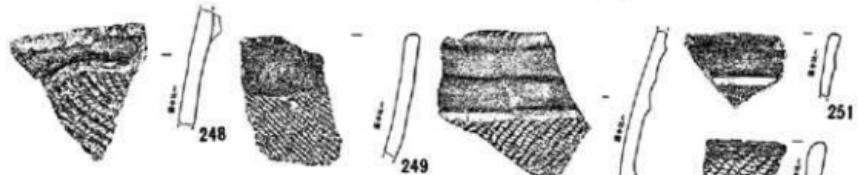
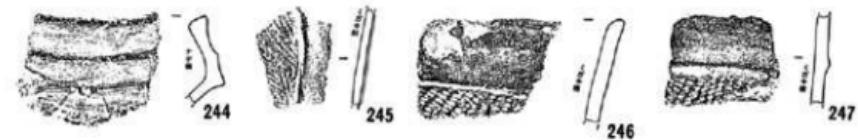
第49図 大塚山遺跡出土土器拓影図(7)



第50図 大塚山遺跡出土土器拓影図(8)

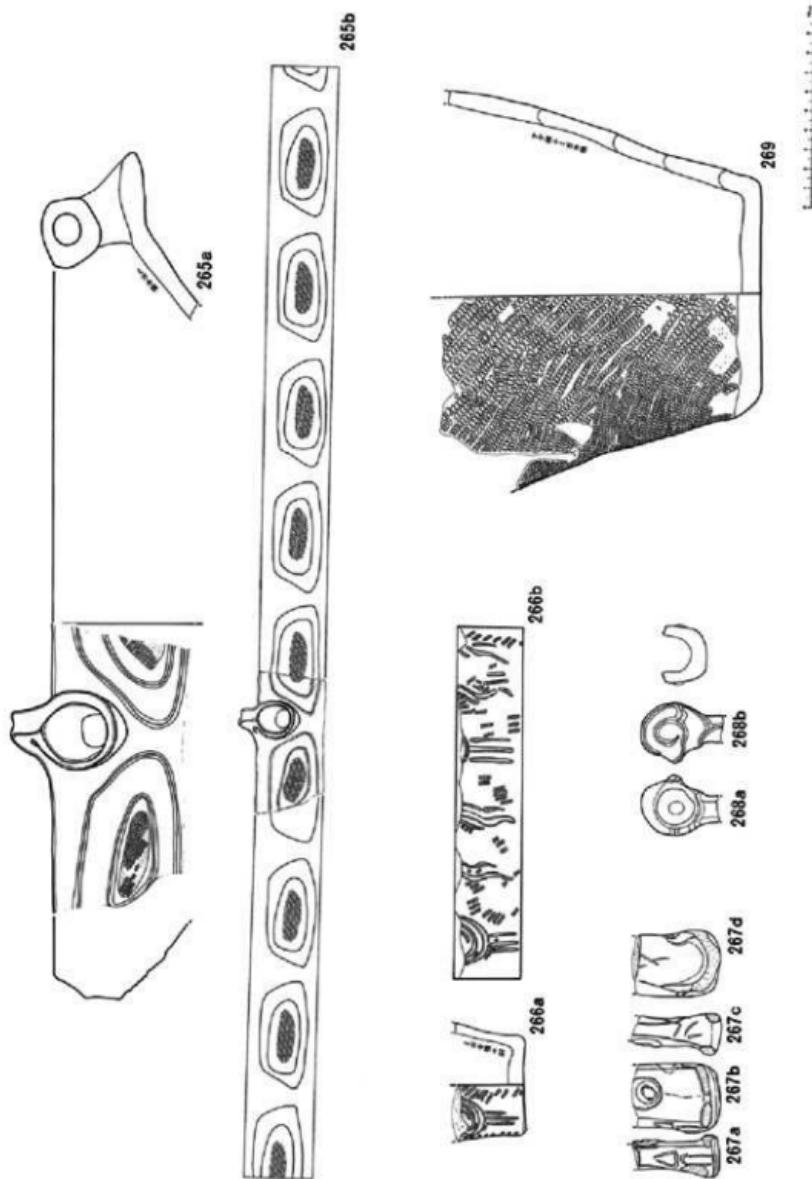


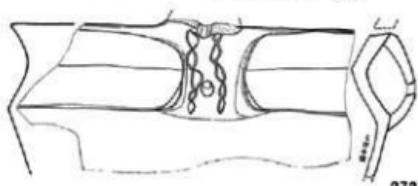
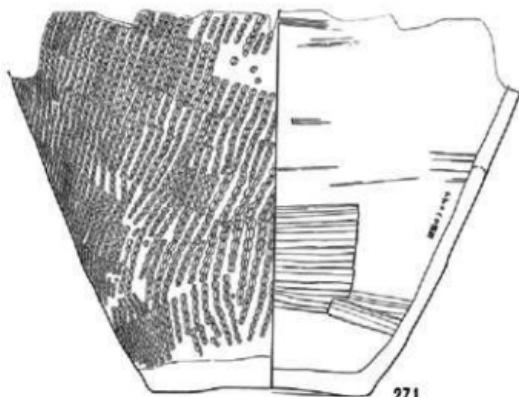
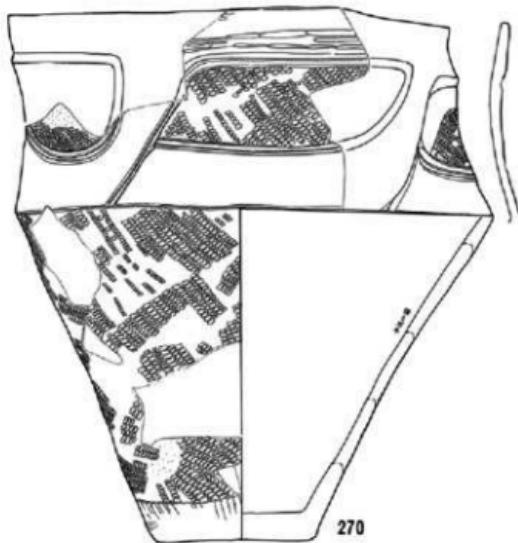
第51図 大塚山・大塚A遺跡出土土器拓影図(9)



第52図 大塚A・大塚山遺跡出土土器拓影図・実測図10

第53図 大槅A遺跡出土土器実測図(1)





第54図 大塚A・大塚山遺跡出土土器実測図(2)